

271-34

現 代

兵庫縣人物史

田住豐田郎編

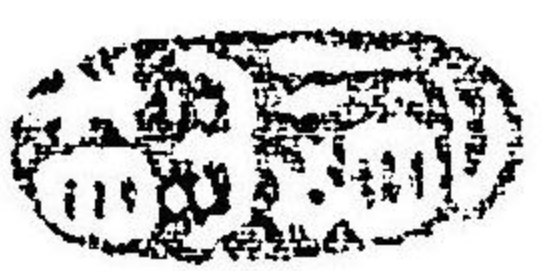
113

如松 大鳥圭介題



明治四十三年秋日

私暇日
松月堂



樞密顧問官男爵大鳥圭介君題字

樞密顧問官 法学博士 文學博士 男爵加藤弘之君題字

天地萬物皆

歸吾有

加藤弘之

舊出石藩主貴族院議員子爵仙石政固君題詠

政固

仇を貴國哉

里に教を力す

にきい中へ果す

忠に地

後龍野濤主子爵脇坂壽君題字

就
潛
淵

淡
水

貴族院議員男爵北垣國道君題字

北垣國道

赫
隆

新
西
卷



樞密顧問官男爵九鬼隆一君題字

觀心寺拜楠公墓

懷古上長途傷心對
墓碣山河五百年風
雨弔餘烈

成海



大阪朝日新聞社長上野理一君題字



業精于勤
荒于嬉

有作理



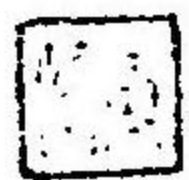
帝國博物館長股野琢君題字

張

海濱亦東坡意精神
一安臥雲入鏡新
多甘果好飯軍多
坐看湯是台移人

大正四年

股野琢君



貴族院議員男爵松尾臣善君題字

花木四時多意為
經書子卷旃生海

田原君法源

其子真學

第百銀行專務取締役池田謙三君題字

倍一粒萬

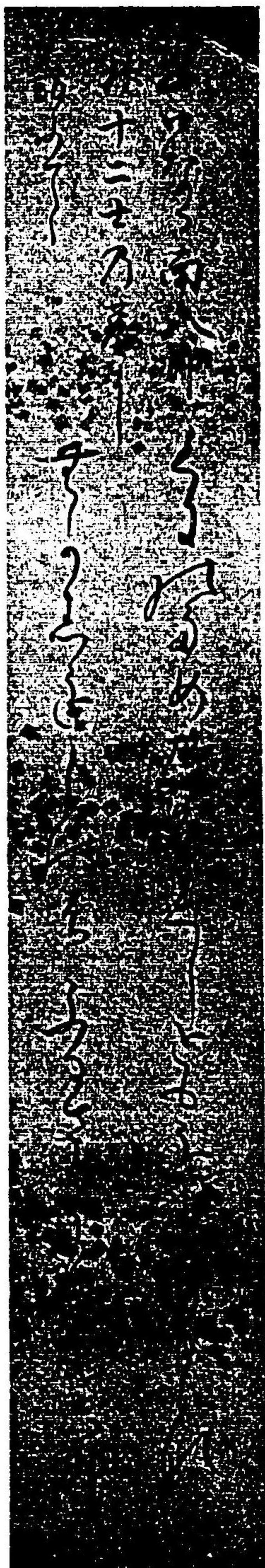
池田謙三
集之

御歌所寄人醫學博士井上通泰君題詠

中ノ小播磨ノ
ノリノコト出
マシムル時ノ

ふらふら又いふ世の向い
年月のいふまゝの山通泰

原六郎翁題詠



貴族院議員男爵武井守正翁題詠

年
我々も亦人たるもの
いふまゝの山通泰

貴族院議員男爵田健次郎君題字

樹老烟嵐滴 奇岩繞
急湍高樓臨 水坐翠
氣滿樹干

山中温泉

讓山田健



貴族院議員田邊輝實君題字

田邊輝實

勤勞而後頤息一玉色
玉泠以消放心二玉色
陸書齋出金石三玉色

明治三十四年十一月

田邊輝實



陸軍野戰砲兵監陸軍中將藤井茂大君題字
陸軍野戰砲兵監
陸軍中將
藤井茂大

陸軍野戰砲兵監陸軍中將藤井茂大君題字

衆議院副議長肥塚龍君題字

龍

聖花芳華

四季

乃田信光

肥塚



大谷派姫路別院貫主大谷勝珍師題字

勝

天下和順日月恒明

風自心時天厚不越

國運正安兵戈不興

此方治具人務使江漢

勝珍書



帝國大學教授文學博士村上專精君題字

詩

身貧未實貧
心貧是去貧
不為原世皆福
唯夏修學貧

山陰村上專精君



帝國大學教授文學博士村上參次君題字

崇德廣業
以報君國

為田任君

參次

樺太民政廳長官平岡定太郎君題字

風帳
蒼底
逐

為田位君

重



帝國大學教授文學博士高楠順次郎君題字

清白之法具足圓滿
如雪山公於山照諸功德
等一淨極

大正五年壽經之法

高楠順次郎書



高等師範學校長嘉納治五郎君題字



行善不以為名而名從之

甲南書



前田默風君題字

前田默風君題字

同村社盤銘

道入法



PRECEPTS OF IYEFYASU.

*Life is like unto a long journey with a heavy load.
Let thy steps be slow and steady, that thou stumble not.
Persuade thyself that privations are the natural lots of
mortals, and there will be no room for discontent, neither
for despair. When ambitious desires arise in thy heart,
recall the days of extremity thou hast passed through.
Forbearance is the root of quietness and assurance for
ever. Look upon wrath as thy enemy. If thou knowest
only what it is to conquer, and knowest not what it is to
be defeated, who unto thee! it will fare ill with thee.
Find fault with thyself rather than with others. Better
the less than the more.*

Translated by Prof. K. WADAGAKI,
of the Imperial University.

神戸市長老神田兵右衛門君題字

平不

亦

樂

辛亥五日

七十二
神田兵右衛門



故大西甚一平翁筆蹟

物既
...
...

上野兼子刀自題詠

吾望柱
...
...

田中經一郎翁題詠

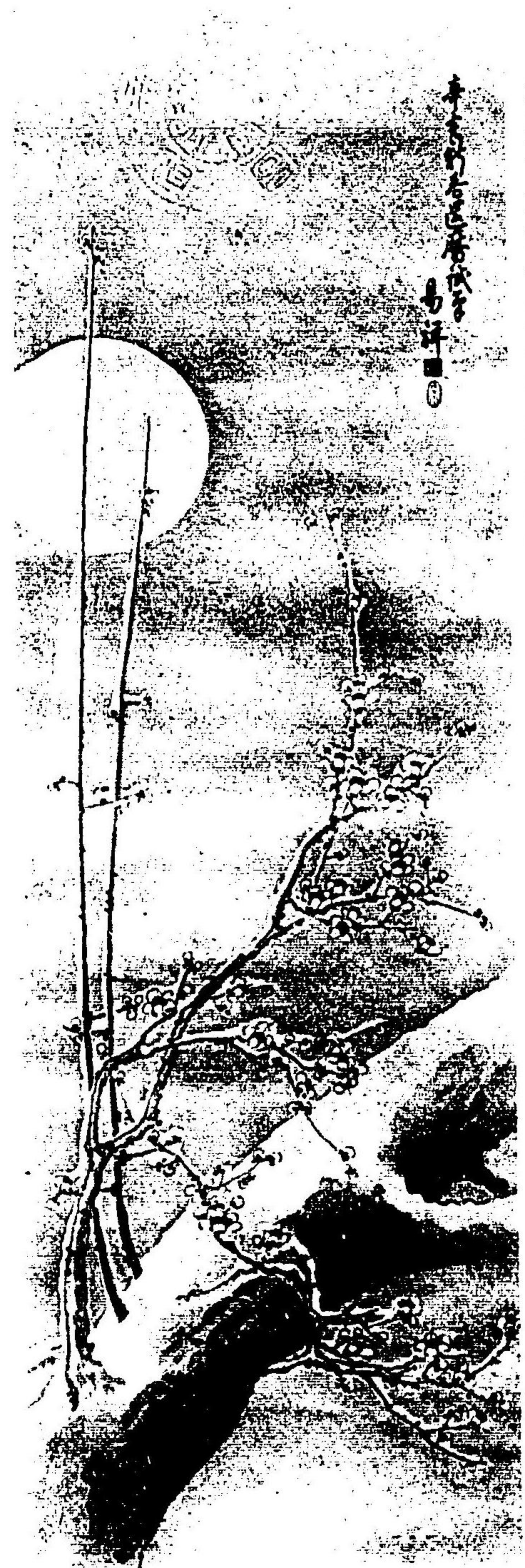
よみたり地には...
...

拓殖銀行頭取美濃部俊吉君題畫



美濃部俊吉
四十九
七月

日本燐寸株式會社社長直木正之介君題畫



直木正之介
七月

庭家の翁之弘藤加爵男官問頼密極



人夫權(守隆女長)人夫藤山、人夫爵男、翁之弘、爵男、子常(人夫藤照(子幸女次)人夫藤近(子盛女三)人夫川吉)より右へ(向列二
 (子女女五人)人夫俊(子藤女四)

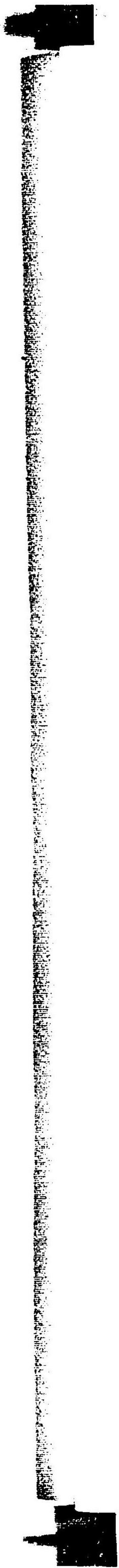
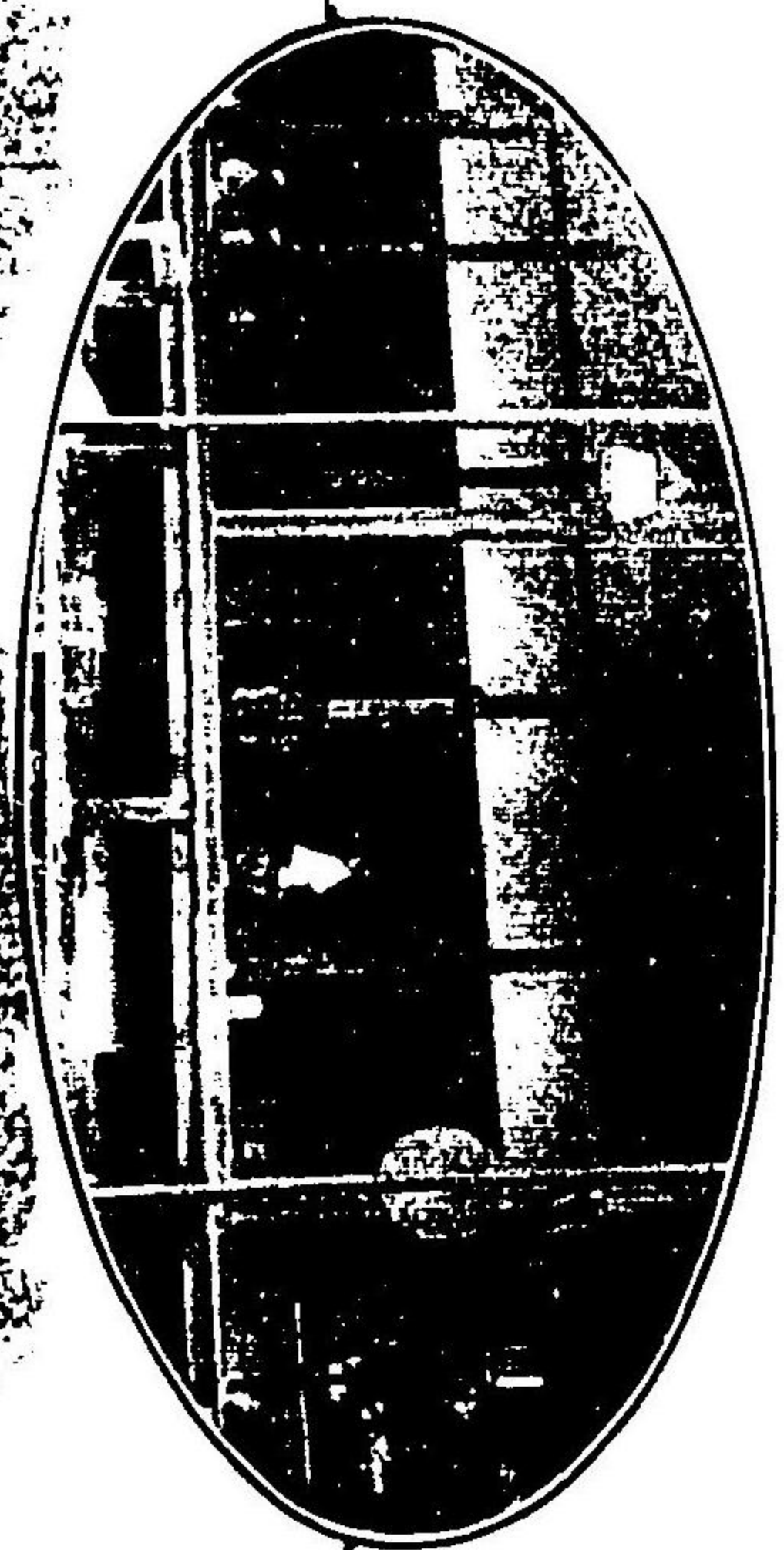
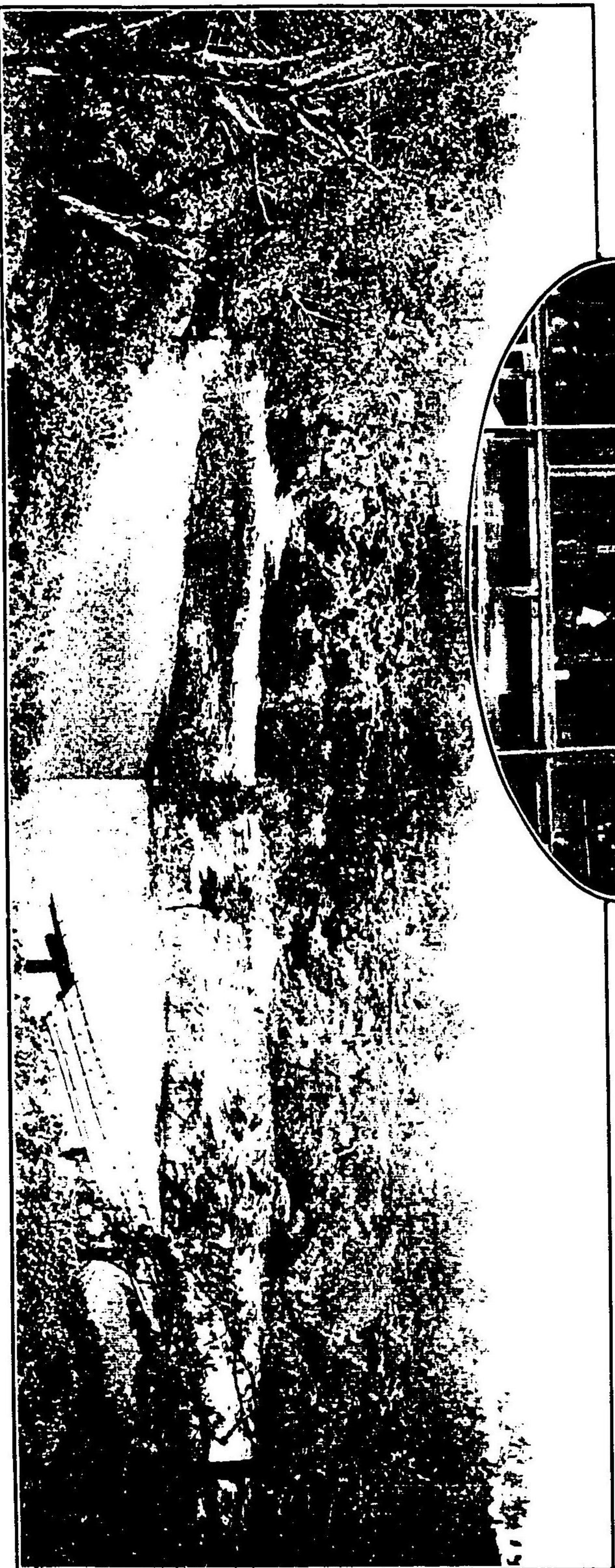
君郎三保、七博、婿女、君一國、底士博、界工婿女、君隆照、藤加士博、界警男長、君郎五、虎、藤近士博、界工婿女、君郎太、武、川吉士博、工婿女、列三
 子米人夫同、君吉比、崎、藤加、ヤ、ト、フ、男、次、君郎三、伊、藤、山、監、總、務、政、務、婿、女、子、弘、人、夫、同、君、郎、俊、渡、馬、男、三、列、後
 子、女、孫、令、も、れ、何、は、他、其、列、前

(影撮念紀式婚念) 庭家の翁善臣尾松爵男裁總行銀本日



君那三柴里北士博男醫婿女、君成基宮二生理銀峯婿女、人夫善吉、君根澤吉婿女、君那丸殿上井士博男法婿女、君維基尾松、君一義藤内、君夫信男四りより行つて向列後
 讓令氏男裝裝、讓令氏尼木、人夫氏夫表、人夫同、翁善臣爵男、人夫氏夫信、讓令里北、子成女長人夫里北、君夫太子嗣、君那三郎尼木保親、露治健尾松
 人夫氏維基、武男裝裝里北役橋取倫保命生國帝婿女、人夫氏尼木
 りを孫令るは何に他其(子輝女五)人夫氏信那五山柴八十(子知女六)人夫氏成基宮二四十一列前

原六郎氏庭園の第一の變長館



庭家の氏郎次健田簡男員議院族貴



子雅女三、子桂美人長君藤、子安人太博男、君勳男五、常座、客來人三子よ右で、向列前
子輝女女、君篤子嗣、君郎次健博男、子芳女長、右正男三、君野明四列後

故伊藤長次郎翁筆蹟



有文主九二十四日

親筆在概老花昔

菊香新入氣馨香淡

香遠播芳樹之高竹生微夜

何處妙極展

初志塵世累百年自覺空如懶

緣病沈沈被後故幾處休禪宗

睡身何處佛權孤苦無少思鄰

桂風沈心層

乙亥至陽節三維別下臨江移展序

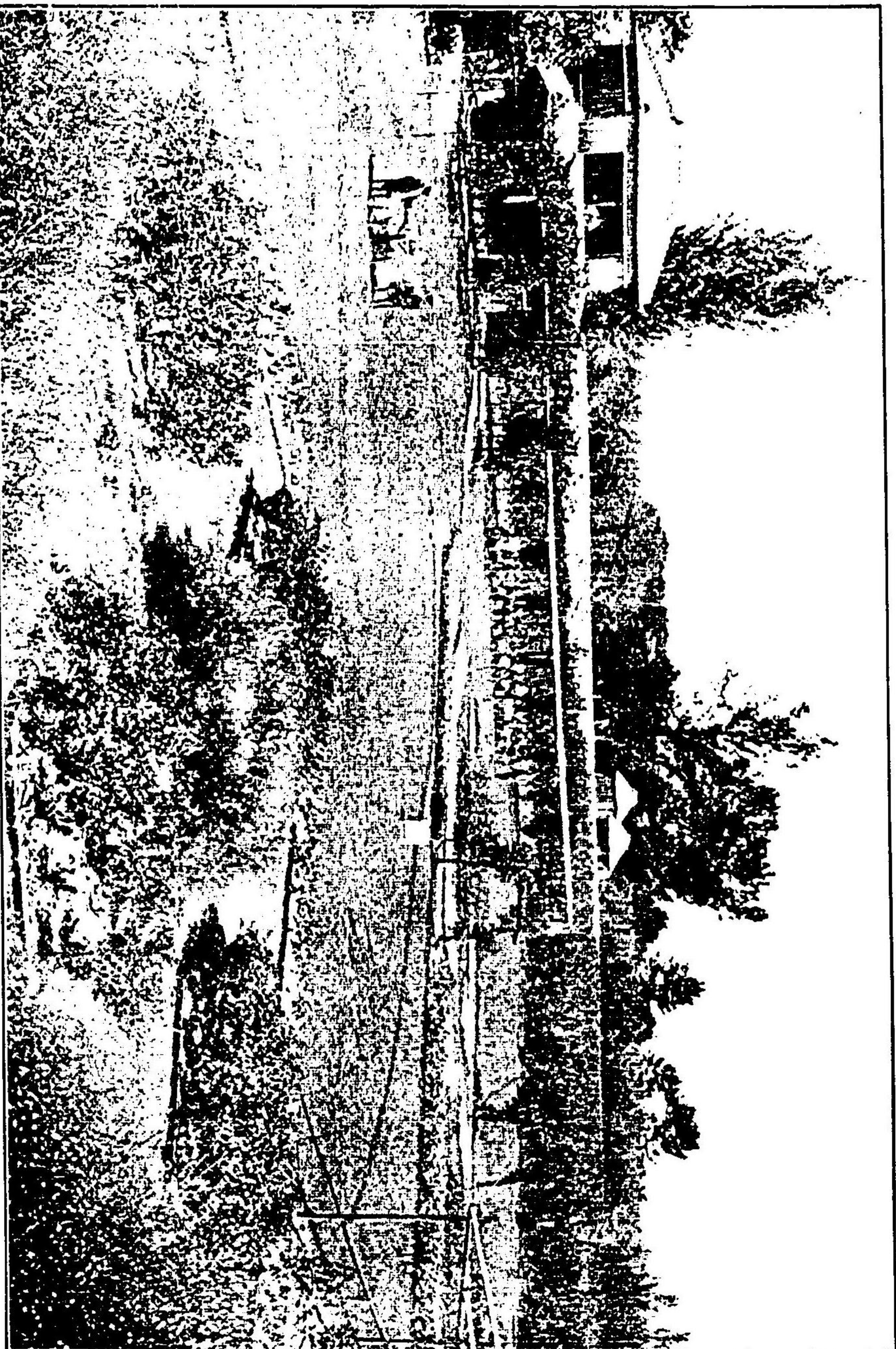
上波字號

也實至也為性

庭家の翁實輝邊田員議院族貴



人夫君昌辨、子よき女、翁實輝、人夫、子らの女、子たる女りよ右列前
右某松尾醫傳下殿孫皇、君即次比田池官事参者法司所女、右吉辨子嗣等右實男四列後



伊藤家の経路に接する果樹園の一部



庭家の氏介之政本直長社會式株寸燦本川



君介之政人主、白刀野字空明、白膝下長八人氏那太倫、白染人氏田柴(子隆女四)人氏田林、子枝靜女五男(右)向列前

子信女の八人氏同徳(白路女三)人氏口谷、子朝人氏那三、子孝人夫同

君那太倫同徳婿女、在知度日谷婿女、在那三子嗣、在益男三、在那太倫上男下婿女、在三桂田聖男次、在誠真田林婿女列二

子之孫命もれ何に他男(子代下女二)人氏徳高、在教純徳高婿女段上、君準男五、在榮男四列三



本吉編者 田住豊四郎



序

田住豊四郎君、突如こして來たり曰く、吾輩今回「兵庫縣人物史」を編せんことを、聞く君も亦兵庫縣人なりと、請ふ少しく君の來歴を聞かんこと、又曰く、君にして若し心當りの人あらば、請ふ之れを吾輩に告げよと。余の曰く諾、但し今日までに於て、君の蒐めたるもの幾許ぞと。君乃ち其主張を告げ苦心を語り取り出す所の人物の寫眞、殆んど百を以て數ふるものあり。余驚いて曰く是れある哉、是れある哉、今や何々人物傳を編すこと稱して、其の實私利を計る似非者、少なからず、既に此の努力熱誠あり、乃ち君の世間有りふれたる似非先生にあらずして、眞に兵庫縣に忠なる志士と認めたり、余も亦兵庫縣人なり、深く君に之れを謝すこと。此に於て乎、一見舊知の如く、夫れより兵庫縣下の人物論を上下し、刻の移るを知らず、一日の歡を盡して後、他日

を約して別れたるは、既に數月以前の事に屬す。

顧みれば、兵庫縣人には由來才子、一寸と役に立つもの、氣のきいたもの、常識に富むもの、義理と人情を辨へ居る多く、學生にあつては大抵中等以上に位するものを出し、實業家にあつては一寸と善い地位に手腕家となつて働くものを出し、風流をも辨へ、優美の情をも有し、勇氣に於ても決して人並以下には落ちざるものとす、斯くて天真爛漫たる所もあり、友情に富む所もあり、極めて快活にして面白き人物多しと爲す、之れを以て東北の人を見れば、義理と人情に疎く見ゆ、九州の人を見れば、腹黒き人の如く思はれ、面白くなきこと極めて多し、然かれども其の大物の資格あるものに於ては、之れを東北若しくは九州に譲らざるを得ず、余や能く之を知る、此に於て乎、何んをかして兵庫縣人の圈寰を脱せん、と欲し苦心すること茲に年

あり、さればと云ふて又縦へ大物に成長すればとて長州人の如きヅルイ人間とも成りともなく、寧ろ兵庫縣どころか日本までも忘れてしまい、今古宇内の諸人物を睨んで、我が兵庫縣人たるのタイプより躍出せん、と努力せし苦心や實に無量なるものあり、されば余は一方に於ては兵庫縣人たるを悦ぶと同時に、更に一方に於ては兵庫縣人たらざるを祈るや久し矣。

頃日余タマ／＼神戸に遊び、再び田住君と會す、君乃ち人物史編纂の経過を報じ、將に刊行を終らんとするを告ぐ、其示す所を見るに縣下知名の人物數百人を網羅し、之を傳すること正にして且つ詳、而して其加へたる論評亦穩健適切、稍余と感を同うするものあり焉。

別に敘するものを有せず、兵庫縣人物史を編せらるゝに當り、

聊か兵庫縣人たる余の所感を述べ、書して以て序を爲すと云
爾。

明治四十四年十一月

松村介石

本書編纂の趣旨

余曩に一度兵庫縣人物評傳の編纂に志し多忙の爲めに果すを得ず、會ま明治四十一年の秋小閑に乗じて再び前志を繼ぎ、其後全力を傾注して之に従事し爾來三星霜漸く茲に上梓を告ぐ、名けて現代兵庫縣人物史と云ふ、要するに人物史傳の意味たるに外ならず。

蓋し史傳に最も尊ぶべきは、其事蹟の精確なること、且つ論評の公平適切なることに在りて存す、然るに兵庫縣は四道五箇國に跨る大縣なるのみならず、其人物も亦四方に離散して調査の不便甚だしく、而して其人物の如何を究め、事蹟の正確を失はざらんごせば、遠きを厭はず一々往訪して親しく面接するの要ある耳ならず、又諸方より査察する所なかるべからず、即ち之が材料の蒐集には余の大に苦心奔勞したる所にして、實に本書の編纂に三年有餘の長き歳月を費したる所以たらずんばあらざるなり。

抑も兵庫縣は日本四十六縣中隨一の大縣なり、其面積よりするも、産物よりするも、將又其富力より觀察するも、三府を除きて兵庫縣に及ぶものなく、而して

人物の輩出も亦敢て少しも爲さず、然るに由來兵庫縣人は協力團合の思想に乏しく、身を他縣に寄する者は毫も郷里を顧みず、而して在郷の士は縣下出身者の姓名をすら之を知らざるもの多く、隨て其間殆んど交渉なく、聯鎖なく、協合なし、去れば又先輩と後進者との間も疎隔甚だしく、之を他縣人に於て見るが如き兩者の間に指導敬從の美風存せざるは余の常に遺憾とする所なり、雖然、今之を靜かに考想すれば其由て來る所なくんばあらず、蓋し兵庫縣は元々幾多の小藩互に相割據せる所にして遺風今尙存し、自ら人心の統一を缺けるのみならず、現に地理的關係より之を觀るも、丹波、但馬、播州、攝津、淡路の五箇國に跨りて互に風俗人情を異にし、一は日本海に接し、一は太平洋に面し、聯絡交通も完全ならず、是れ實に兵庫縣人に統一なく、和協なく、團合なき所以と云ふべし、故に縣人互に相知り相知らるゝは、團合和協を圖り、愛郷的觀念を旺んらしめ、以て縣下の發展に資する所以なるを思ひ、遂に本書の刊行を企てたる所以の一なり。

翻て又惟ふ、明治の昭代傳へて後世に遺すべきもの多しと雖も、時代進展の原動力たる人物の事蹟は、後世人士の最も知らんと欲する所なると共に、又逸散し易く之を知るに最も困難を感じる所なり、是れ余が明治現代の縣下人物を羅致して其事蹟經歷を正確にし、併せて人物の一般を評論し、一々不變色寫眞を挿入して之を後代に傳へんと志し、茲に本書を刊行するに至れる所以の二なり、而して復た現時青年子弟を目的とする立志傳成功談等に關する刊行物を見るに、其多くは熱血氣銳の青年を煽動して一身を誤らしむるものならざる莫く、害多くして益少なきを慨し、後進者をして自己の出所、境遇、志望に應じて執るべき徑路を示さんと欲し、其最も印象の深くして且つ感化力の強かるべき、縣下各方面の人物を傳評して後進子弟の訓育に資する處あらんと欲し、本書を刊行したる所以の三なり、即ち茲に三年有餘の長き歲月と苦心奔勞とを惜しまずして本書の編纂に傾盡したる所以たらずんばあらず、若し幸にして其幾分にてても達することを得ば、余の望みや即ち足る。

終りに臨み、本書の編纂に對して多大の便益を與へられたる先輩諸士の厚情を深謝し、登載諸名士の健康を祈る。

日本一の忠臣の末路は、	日本一の義士は、	日本一の銀山は、	日本一の燐寸は、	日本一の鯛は、	日本一の薄口醬油は、	日本一の柳行李は、	日本一の打刃物は、	日本一の素麵は、	日本一の革細工は、	日本一の牛は、	日本一の鹽は、	日本一の酒は、	日本一の港は、
曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く	曰く
淡川	赤穂	生野	神戸	明石	龍野	但馬	三木町	掛保、飾磨	姫路	但馬	赤穂	灘	神戸
であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ	であ
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る

凡例

- 一、本書は三年有餘の歳月を費して成れるものなり、故に未だ見聞せざる人物を捉へ不精確の材料を基礎として作りたるものとは其選を異にし、編者は一々各人物に接見して知らざるを問ひ、不審は質し、又或は他より査察して最も事實の正確を期せり。
- 一、本書の人物評は筆誅を目的とせざるに非らざるに共に、又徒らに稱揚を避け唯だ稱すべきは稱し、貶すべきは貶し、編者の直観したる有りのままに之を描寫し、且つ人物の特長は力めて逸せざらんことをせり。
- 一、書中往々故人を傳せるものあり、是れ現代に最も關係を有し、交渉少なからざるに由る。
- 一、書中人物の叙事論評は精粗必ずしも一轍ならず、雖もこれ現在の史實を中心の起點とし、以て其史興の及ぶ所を叙述するに力めるより來れる結果にして敢て他意あるに非らず。
- 一、本書編纂中に於て、各人物の地位竝に境遇等に或は異變なきを保せず、是れ

一々其稿を認めたる年月日を記入したる所以なり。
 一、本書輯むるところの人物總て四百六十餘人、未だ必ずしも縣下現代の俊英を羅盡したりとは爲さず、他日續編を俟つて之が完成を期せんことを。

兵庫縣人物史目次

播磨出身之人物

酒井忠興君	一	松村介石君	四九	木村春東君	七六
松平直徳君	四	松村松年君	四九	松村清吉君	七七
小笠原長丕君	六	近藤薫君	五一	伊藤實然君	八〇
大鳥圭介君	六	前田黙鳳君	五三	伊藤貴志君	八〇
松尾臣善君	一三	改野耕三君	五四	松尾健治君	八二
武井守正君	二二	後藤恕作君	五五	播磨辰次郎君	八二
石本新六君	二六	龜田介次郎君	六三	塚本清次君	八四
肥塚龍君	二九	加藤徳三君	六五	奥村鹿太郎君	八五
藤井茂太君	三一	平岡萬次郎君	六七	井田清三君	八七
藤井光五郎君	三四	平岡定太郎君	六七	宮内二朔君	八七
古市公威君	三七	美濃部俊吉君	六九	内藤義一君	八八
股野琢君	三九	永濱盛三君	六九	八木覺太郎君	八九
井上通泰君	四二	美濃部達吉君	七二	小川久四郎君	八九
三上參次君	四五	辻善之助君	七三	犬飼柔吉君	九〇
本多日生師	四七	星野錫君	七五	福島元昂君	九〇

兵庫縣人物史目次

廣月	九二	志方	一〇二	宮崎	一一二
前川	九一	高橋	一〇三	西海	一一三
和辻	九三	香野	一〇五	朝田	一一三
鈴木	九四	古門	一〇七	森田	一一四
森川	九五	藤井	一〇七	寺田	一一四
砂川	九六	高井	一〇八	播重	一一五
小林	九七	横山	一〇九	井上	一一六
河野	九九	中村	一〇九	川口	一一七
廣岡	一〇〇	二川	一一〇	進藤	一一七
岸本	一〇一	改野	一一一	藤清	一一七

但馬出身之人物

仙石	一一九	櫻井	一五〇	田中	一五八
京極	一二三	櫻井	一五〇	神失	一五九
加藤	一二三	中江	一五二	冲野	一五九
北垣	一二九	井上	一五三	和田	一六一
原六	一三八	熊谷	一五四	猪子	一六二
濱尾	一四七	池田	一五五	河本	一六四
久保田	一四九	大島	一五七	西村	一六五

丹波出身之人物

岡本	一六六	山田	一七二	佐々木	一七七
毛戸	一六八	一瀬	一七三	前川	一七八
池口	一六九	小田	一七四	川崎	一七八
田原	一六九	齋藤	一七五	山崎	一七九
南艇	一七〇	紫安	一七六	山利	一七九
若宮	一七一	白瀧	一七七	岩藏	一七九

攝津出身之人物

青山	一八一	村上	一九七	金原	二〇四
織田	一八三	曾野	一九八	塚口	二〇六
上野	一八四	本郷	二〇〇	横尾	二〇七
田艇	一八九	石橋	二〇二	三崎	二〇八
田健	一九四	松本	二〇三		
田邊	一九六	羽室	二〇四		

九鬼	二〇九	嘉納	二二四	丹波	二二九
尼崎	二二六	元良	二二七	高楠	二三〇
濱野	二二七	細木	二二八	岡忠	二三一

兵庫縣人物史目次

直木倫太郎君	二三三	津久井茂君	二三三	岡本良太郎君	二三四
--------	-----	-------	-----	--------	-----

淡路出身の人物

平瀬與一郎君	二三五	田中太七郎君	二四二	正木照藏君	二四五
田中正平君	二三八	三木善八君	二四二	廣岡宇一郎君	二四五
増田信一君	二三九	森一馬君	二四三		
森田茂吉君	二四一	藤江章夫君	二四四		

縣外出生神戸在籍の人物

川崎正藏君	二四七	鹿島秀麿君	二六〇	杉山利介君	二七〇
川崎芳太郎君	二四七	村野山人君	二六二	田村新吉君	二七二
ハンダ一君	二四九	瀧川辨三君	二六三	小松楠彌君	二七六
吳錦堂君	二五二	川西清兵衛君	二六六	金子直吉君	二七七
兼松房次郎君	二五三	渡邊尙君	二六八	湯淺竹之助君	二七八
鳴瀧幸恭君	二五七	岡崎藤吉君	二六九	小磯吉人君	二七九

神戸在住の人物

九鬼隆輝君	二八一	小寺謙吉君	二八六	範多龍太郎君	二九五
○神戸兵右衛門君	二八三	故小寺泰次郎君	二九三	直木政之介君	二九八

岸本豊太郎君	三〇四	小野権四郎君	三三二	中井淳君	三五三
小曾根喜一郎君	三〇六	秦銀兵衛君	三三三	藤尼幸一君	三五四
森本慶明君	三〇七	上西龜之助君	三三四	松本啓藏君	三五四
森本六兵衛君	三〇九	山口八左右君	三三五	前川清次君	三五五
生島五郎兵衛君	三一〇	三木正夫君	三三七	藤田治右衛門君	三五六
坪田十郎君	三一〇	駒井巷君	三三九	榎谷熊吉君	三五七
後藤勝造君	三一五	大國真太郎君	三三九	藤井忠兵衛君	三五八
横田孝史君	三一七	伊藤俊介君	三四〇	八田木久次君	三五八
菅野安太郎君	三二一	大谷吟右衛門君	三四二	八田兵次郎君	三五八
村上俊吉君	三二二	岩崎虔君	三四四	藤田松太郎君	三五九
友國春子女史	三二三	丸山繼男君	三四五	大庭竹四郎君	三六〇
室谷藤七君	三三四	北野藤兵衛君	三四六	井上善吉君	三六二
佐野春吾君	三三五	渡邊萬壽太郎君	三四七	高德藤五郎君	三六二
水野正巳君	三三六	神田直五郎君	三四九	森田寅之助君	三六三
野添宗三君	三三七	川本恂藏君	三四九	赤木豊太郎君	三六四
丸岡寛三郎君	三三八	井上學太郎君	三五〇		
鈴木清君	三三一	大野輝吉君	三五二		

播磨之人物

兵庫縣人物史目次

兵庫縣人物史目次

一柳末徳君	三六五	原田宗兵衛君	四一四	内藤利八君	四五四
建部秀隆君	三六七	米澤長次郎君	四一六	竹田文吉君	四五六
脇坂壽君	三六九	米澤吉次郎君	四二一	竹田柳吉君	四五七
森忠恕君	三六九	川口木七郎君	四二四	田寺敬信君	四五七
森訥郎君	三六九	部下家の一族	四二四	安藤新太郎君	四五九
本多涉君	三七〇	近藤家の一族	四二九	神戶松之輔君	四六〇
故河合惣兵衛君	三七〇	東谷實秀師	四三二	丸山芳介君	四六一
故河合惣兵衛君	三七二	斯波與七郎君	四三二	初井奈良吉君	四六四
故河合傳十郎君	三七四	蓬萊宗兵衛君	四三三	高井利平君	四六六
大谷勝珍師	三七五	蓬萊三郎君	四三五	高井利一郎君	四六七
伊藤長次郎君	三七七	蓬萊林太郎君	四三八	濱本八次郎君	四六八
伊藤家の祖先	三八六	石井兵藏君	四四〇	熊谷薫郎君	四六九
石田貫之助君	三九二	土居義雄君	四四二	砂川雄健君	四七一
○多木条次郎君	三九三	瀧竹藏君	四四二	高橋鷲城君	四七二
大西甚一平君	四〇〇	小河秀太郎君	四四四	野々上喜藏君	四七四
奥藤研藏君	四〇五	山本卓爾君	四四五	大森與三次君	四七七
堀謙次郎君	四〇八	故新弘謙師	四四七	菊川惣吉君	四七八
堀豐彦君	四一〇	後藤褒真師	四五〇	高島仁左衛門君	四七九
兒島熊太郎君	四一三	鶴野金平君	五五三	平野龜之助君	四七九

濱田藤次郎君	四八一	小林善太郎君	五〇六	三木洞林君	五二四
山本惠真師	四八二	福原謙七君	五〇七	井内中正君	五二五
脇坂兵太郎君	四八三	多田菊太郎君	五〇八	植杉郁次郎君	五二六
田淵新作君	四八五	武間謙君	五〇九	坂田藤藏君	五二六
澤野利正君	四八六	橋本橘治君	五一〇	多木元三郎君	五二七
故淺井彌兵衛君	四八八	横井時春君	五一〇	松井伊三郎君	五二八
中原信之君	四八九	前野善次郎君	五一二	山口吉五郎君	五二八
中原誠也君	四九一	岡田甚吉君	五一三	藤井忠兵衛君	五二九
高川定次郎君	四九二	阿曾準一君	五一五	山口新五郎君	五三〇
坪田家の一族	四九三	石堂爲太郎君	五一五	池田九兵衛君	五三一
堀林之助君	四九六	竹内清一君	五一六	藤田平右衛門君	五三二
桑田房吉君	四九七	織田貫次郎君	五一七	藤井茂兵衛君	五三三
唐端清太郎君	四九七	井上善太郎君	五一八	岡澤瑗玄太君	五三四
長谷川佳君	四九八	小笹力之助君	五一九	上月安重郎君	五三九
土井權大君	四九九	木南保之助君	五二〇	來住廣次郎君	五三六
土井直次君	五〇〇	福岡勇君	五二〇	來住泰次郎君	五三六
三木彌兵衛君	五〇一	龜田精一君	五二一	來住兼三郎君	五三七
延賀喜三兵衛君	五〇二	岸本恒太郎君	五二二	片岡源十郎君	五三八
志水市郎平君	五〇三	松野一角君	五二三	高瀬定次郎君	五三九

兵庫縣人物史目次

兵庫縣人物史目次

柴崎鹿之助君	五三九	三浦幸彌君	五五四	大野甚之助君	五七一
玉置福藏君	五四〇	岸田順造君	五五五	山口傳重郎君	五七二
西村隆次君	五四一	船津吉太郎君	五五六	小寺留三郎君	五七二
土肥喜男君	五四二	吉田喜代松君	五五七	田岡英太郎君	五七三
宮崎新藏君	五四二	大西玉之輔君	五五八	伊賀正太郎君	五七四
中村祐七君	五四三	三宅利平君	五五九	尾田眼龍君	五七四
町田猛郎君	五四四	佐々木豐太郎君	五五九	尾田德治君	五七四
近藤純悟君	五四五	股野芳三郎君	五六〇	長谷川五市君	五七五
藤岡慶次郎君	五四五	志方耕三君	五六一	小國積次君	五七六
黒田玄通君	五四六	山下亮効君	五六二	藤田利恒君	五七七
山本壽雄君	五四七	稻岡幸八郎君	五六三	福田廣吉君	五七八
岡部千之君	五四八	佐治源兵衛君	五六四	三幡繁藏君	五七九
矢内久七君	五四八	故高非常三郎君	五六五	吉田清治君	五八〇
鷺塚貞操君	五四九	横田小左衛門君	五六六	石堂鶴之助君	五八一
内藤彌兵衛君	五五〇	安積重次郎君	五六七	植木登哉君	五八二
安井保太郎君	五五一	三宅雄次君	五六八	故代谷順藏君	五八三
平野林藏君	五五二	兒島卯藏君	五六九	廣田傳右衛門君	五八四
小野寺秀太郎君	五五二	和辻瑞太郎君	五七〇	田中耕作君	五八五
港謙一君	五五三	大野宗平君	五七一	西脇儀兵衛君	五八六

但馬之人物

濱本彌七郎君	五八七	岩佐一郎君	五八八	瀬渡猛雄君	五九〇
海老名源三君	五八七	村原助治君	五八九		
故池田草庵君	五九一	佐藤英太郎君	六〇五	岡毅君	六一四
日下安左衛門君	五九二	長谷秀一君	六〇六	瀧田清兵衛君	六一五
淺田貞次郎君	五九四	鎌田三郎兵衛君	六〇七	佐川恒太郎君	六一六
田村頼太郎君	五九六	西村莊兵衛君	六〇八	原庄七君	六一七
田村勘兵衛君	五九八	西村淳三君	六〇九	井上真一郎君	六一八
進藤長治君	五九九	河本濱次郎君	六一〇	冲野源太郎君	六一九
進藤敢君	六〇一	平尾源太夫君	六一一	船越三木男君	六一九
丸尾八右衛門君	六〇二	西山員直君	六一二	佐藤文兵衛君	六二〇
丸尾光春君	六〇三	岡崎正規君	六一三		

丹波之人物

故小島省齋君	六二三	波部本次郎君	六二九	服部雄紀君	六三四
故植木環山君	六二五	小林常太郎君	六三一	園田定太郎君	六三五
故阪東直三郎君	六二六	小谷保太郎君	六三二	樋口達兵衛君	六三六
故森本莊三郎君	六二八	中川幸太郎君	六三三	齋藤幸之助君	六三八

兵庫縣人物史目次

武庫、川邊、有馬之人物

櫻井 忠胤君	六三九	大塚 茂十郎君	六四八	上 原 惟善君	六六一
小西 新右衛門君	六三九	辰馬 半右衛門君	六五〇	中 馬 興九君	六六二
大江 貞夫君	六四一	山邑 太左衛門君	六五一	小 森 純一君	六六四
大江 芳松君	六四一	花木 甚右衛門君	六五二	寺 西 留吉君	六六五
大江 市松君	六四一	若井 源左衛門君	六五三	山 脇 延吉君	六六六
嘉納 治郎右衛門君	六四三	泉 仙介君	六五四	北村 萬次郎君	六六七
辰馬 悅叟君	六四四	白 洲 文平君	六五五	細木 喜兵衛君	六六八
辰馬 吉左衛門君	六四五	甲 賀 卯吉君	六五七	深 見 恭平君	六六九
大塚 讓之助君	六四七	鶴崎 平太郎君	六五九	和 田 精才君	六六九

淡路之人物

喜 田 精一君	六七一	野 上 嘉平君	六七五	三 島 節治君	六八二
中村 重次郎君	六七三	阪 東 國八君	六七七	編者自傳	
秦 猪平君	六七四	山 添 俊雄君	六七九		
加集 新九郎君	六七五	村 上 俊平君	六八〇		

兵庫縣人物史目次終

雜誌發行豫告

近々 兵庫縣人の機關誌 必讀の雜誌 刊行

縣友雜誌

縣友社發行 諸先輩諸氏の後援を有す 主幹 田住豊四郎

『縣友雜誌』とは如何なる雜誌なるや、讀んで字の如く「縣友」は我兵庫縣民唯一の良友を以て任ぜんとするものなり、蓋し方今雜誌の數多く、其數千百を以て數ふべし、雖も未だ我兵庫縣下に於て是非も讀まざるべからず、これ余輩が兵庫縣下の爲めに常に遺憾とせる所なりき。『縣友雜誌』は即ち此缺を補はんとするものにして、兵庫縣下の問題は其何たるを問はず、小は個人の動靜より大は縣治、郡治、又は村治のことに至る迄で漏さず之を論議裁評するは勿論或は實業、教育、家庭、人物等苟しくも縣下公私の事情を知悉せんと欲するものは何人、雖も本誌を必讀せざるべからざる、嶄新の編輯方法を採り、眞に縣友雜誌の名に背かざらんことを、殊に余は兵庫縣人物史を編纂して縣下の人物を知悉し、人物史上に記載し能はざりし幾多の珍奇なる事實材料の如きは即ち之を本誌に掲げて誌上の花たらしめんとす、加之、本社は縣下萬人の便益を計らんと欲し、一方に高等人事紹介部を設け、或は結婚の媒介、職業其他取引上等の調査仲介をも爲さんことを、故に其在郷者は勿論、或は縣下出身の人物にして他に在任せらるる諸氏、雖も苟しくも兵庫縣に因縁あらるる、士の必讀せざるべからざる雜誌なり。

兵庫縣人物史

播磨出身之部



舊姫路藩主

伯爵 酒井忠興君

(明治四十三年十二月稿)

●酒井家の祖先

新田氏の後裔、親氏、流浪して三河の酒井村(境井村)に住し、故あつて同地の豪族太郎右衛門の養子となり男廣親を生む、之れ即ち徳川氏と共に酒井家の祖先となす、廣親より五代政親に至り家康に仕へて其の臣下となり、徳川三代に歴仕して新業を補け大に功勞あり、政親の子重忠武州川越の城主に封せられ一萬石を領し、後ち上州前橋に移りて三萬三千石に加増せらる、其子兵部太夫忠世は大坂陣に軍功あり、延寶

兵庫縣人物史 伯爵酒井忠興君

八年更らに加増せられて十五萬石を食み、雅樂頭と稱し寛永の三輔たり、其孫忠清四代將軍家綱の時代にあつて驍名高く下馬將軍の稱あり、遂に幕府の大老職となり天下の政柄を掌握して權力一世を壓したりしが、五代將軍の樹立するに及び其職を罷めり、其子忠興は父忠清が豪奢榮華に眩惑して藩政弛廢の後を襲ぎ、最も消極的の維持に助めて遂に能く之を支へたる而已ならず、進んでは將軍の元老格、留間詰に陞り、又能く古典に通じて、寺社奉行、典故顧問大箱守居に擧げらる、咸休院と號し其遺訓は悉く金科玉條ならざるはなく、實

に同家中興の祖なり、之れより四代忠興の嫡孫忠恭に至り、今を去ること百五十年寛延二年封を姫路に移さる、忠恭の後忠以は多技多藝趣味廣汎にして長ずる處のもの二十餘藝、就中茶道を松平不昧に學び其蘊奥を極め、斯道に關する遺書數十卷今尙同家に存す、且つ繪畫並に詩歌、俳諧を能くし、又武藝は弓刀の達人と稱せられ躬ら刀を碎厲せりと云ふ、忠以の弟忠因は抱一又は文詮と號し、性高雅優逸文事に達し、初め繪を狩野派に學び後ち光琳を慕ひ、其畫風に氣格あり、韻趣高く、加ふるに筆致豐潤、前二者を綜合大成したる天縱の奇才は、一世の名人として具眼の士が推稱措かざる處、後ち俗塵を厭ひ桑門に歸して本派本願寺の弟子となり連枝に准せらる、忠以の次を忠道とす又文事に篤く、忠道の孫忠學は謙光院と號し英邁なる河合寸翁の計ひによつて將軍家齊の女を娶れり、忠學より四代を忠績とす關亭と號し慶應元年幕府最後の老職に擧げらる、當時勤王佐幕の論朝野に喧しく各藩其去就に迷ひつゝあるに際し、同家は徳川氏と祖を同ふし且つ譜代の臣として姻戚の關係あり、義に於て幕府と興亡を與にせざるべからずとなし、頑として動かさず、同三年養子忠愓家を繼ぎ將軍慶喜が鳥羽伏見に敗つるや共に江戸に走り遂に朝敵となる、朝廷備前藩に命じて之れを討たしめんとす、時に藩中の志士は君の一身よりも社稷を重しとなし、官軍たる備前藩に抵抗せず、直に城を開き、且つ忠愓の養子直之助忠邦を擁して大



忠愓侯二子あり長女清子氏は即ち貴族院議員子爵前田利定氏の夫人にして、伯は明治十二年六月の誕生、性聰惠にして優雅、園藝並に攝影に最も趣味を有し、東西各國より取寄せたる各種の植物は頗る豐贍にして、殊に温室植物は其名高く東京に於る唯一の植物園として博物學界の參考に資すべきもの多く、伯が園藝家として斯道の造詣は優に一家の爲を爲すに足り専門家をして後へに隨着たらしむ、性恰も家祖忠以に酷似せる處あり、又最も社交の巧なる道に明治の新思想に成長せられたるものあるを見るべく、故公爵三條實美卿の女公子姫を迎へて夫人となし、二女を擧げられたりしも、明治四十年早世せらる、伯も又不幸にして多年病廢にあり、故を以て本年舊福山藩主阿部正桓伯の二子忠正君を養ふて以て嗣となす、

當主忠興伯

忠正君幼名元彦學習院を卒へて今や中學に在り、體格強健

俊秀の譽れ高く、以て同家の將來を囑望するに足る。

酒井伯を初め同地出身の先輩

諸氏並に姫路市民に望む

酒井家が姫路に封ぜられて以來百五十年其間英主賢人を出し、殊に幕府時代

他の諸侯を見よ

之れを他の諸侯に見るに薩長土肥は勿論、福岡の黒田廣島の淺野、戸田、前田、小笠原の諸侯は廢藩の後と云へども、郡國を念ふこと往時治下の民に異ならず、依然として往來親睦を圖り自ら率先して地方の發展に努力至らざるなしと云ふ有様である、例を違きに見むる迄もなく、縣下の一小藩たる豊岡藩の京極子爵は、先代高敬君嘗て寶林義塾を設け同地方の子弟を教養し、先輩又之れを承けて後進の指導に励み、現に同地が學界に多士濟々たる所以のもの固より偶然ではない、又後山の青山子爵は先々代忠誠公近畿中國に尙武氣象の缺乏せるを歎き自ら多くの資を捐て鳳鳴義塾を起し、藩士に限らず一般子弟を教養して人物の養成に励み、又一昨年東宮殿下が北陸行啓に際して沿道諸侯の歡迎を見よ、大垣の戸田伯を初め、加賀福井何れも宏壯なる御駐蹕所を設け地方を代表して熱誠なる歡迎は、獨り諸侯の光榮而已ではなく又以て地方の光榮とする所又昨年岡山市に於る 陛下の御駐蹕は池田侯が公園の賜である、誠つて酒井伯を見るに豊富なる資産を擁するに拘はらず地方の指導後進の誘掖等に心を致されず、彼の姫路市に於ける淑徳女學校は多年本願寺の經營せる所、然るに財

政の都合によつて之れを廢せんとするや有志之れを戦き資金に依つて平すじて之を繼續することを得たりき、然るに伯は如何、抑も姫路は師團の所在地にして師團は姫路の命脈である、従つて貴顯の往來も多く幸に白蠶城と云へる一大美觀があるから之れに由つて便殿を設け物産陳列所を設くる等或は、伯が小石川邸の一隅に寄宿舎を設けて播磨青年の都下に遊學するものを收容するが如き種々適切なる公共的の事業がある、斯る事業は須らく伯の名望に俟たざるべからざるものありし伯は蓋し斯る事を願みんとする風はない、然に懸國の大戦たる日清、日露の戦役當時各藩藩主は何れも其意藩出征軍人を編ひ遣族を保護し戦死者を追用する等後援に努むる處ありしも、酒井家に於ては更に此事なく當時十師團の追申會に際して各宗管長門閥の懸に來つて用ふれども伯は一片の甲冑も寄せられたことはない、呼、國家有事の際に於る尙斯の如き状態である他は言はずして知るべき出来事であらう、隨て藩内との關係が益々疎隔するに云ふことは免れざる所である、斯くて二百年間の歴史的關係が根本より覆らんとしつゝあるのは海に遺徳の極みではない。

余輩一個の私言にあらず

最も先年熊谷藩那系の幹旋によつて藩士の子弟に限り保護すること云ふ規定は設けてあるが、其規定が有名無實にして、姫路藩士如何に貧乏なりと云へども此る狹隘なる規則の下に保護を受くるを潔とせざない、以上述べたる數言は是れ余輩一個の私言にあらずして、唯だ舊藩氏の感想言議を述べた迄の事である。

要するに同家は祖先墳墓の地にして、又多年權力の基礎となり而して安危を共にせる、舊封地との關係を成るべく斷絶せんと努めて居らるゝの觀がある、之れ獨り伯而已ならず同地出身の諸氏にして地方の指導に腐心するものはなく父祖の展墓も殊に顧みざるの風あるは實に歎はしき事である、吾輩は素より酒井家の舊臣下でもなく又姫路の市民でもなく、而して舊藩の民でもないが、唯だ本書編纂の趣旨と主眼の爲めに、伯を初め同地出身諸氏に反省を促す所以である。

氏の人格は自己の名利に汲々として敢て郷里を顧みず云ふやうな冷薄なる人ではないことは何れも之れを認識して居る、故に大に行きたいが之れを行はんとするには金が要る、然るに酒井家は世人の想像するが如く富裕ではない、それに華族なるものはソレ相當の體面を保たなければならぬ、縦し又金があるとするも同家は不幸にして代々早世である、伯は幼少にして多年病弱にあり全く後室が垂簾の家政であるから却々容れられない、勿論家令近藤君の如き最も郷里に縁故の厚き人も居る、君は在郷當時より已に自ら唱導して居つた位であるから意は充分ありながら、同家を擁して到底實行は困難である。

▲寧ろ姫路市民の罪である

殊に伯を初め同地出身の士が姫路に往來するを阻止せしめ、交情を阻害せしむる所以のものは姫路市民の罪である、一體姫路人士は輕薄にして他人の功を妬み、又先輩を崇敬する念慮もない、人を待つに薄く、利益問題にあらざれば結合の出来ない卑劣極る一種の姫路根性なるものがある、殊に貧乏士族程懼れ至極のものはなく、彼等は封建時代には無能力者でも白痴でも家柄によつて食祿を賜つたものであるから、遺傳と習慣とは自ら勞せず座して他人の物を受くること而已を考へて居る、偶々伯が歸來されると直に御祝と稱して些細の物を

呈して返禮の多きを望むと云ふやうな陋習がある、故に伯が一度歸郷されると忽ち數千の金が飛んで仕舞ふ、去れば折々歸郷したいが財政上の都合にて意に任せぬと云ふ事情もあるであらう、又伯を中心として同地出身の先輩が輕薄である情誼に乏しいと云ふが、一體姫路の人士は之等の先輩が歸郷しても、相當の禮を以て迎へることを知らぬ、例へば砂川雄峻君を代議士の候補に薦めたときは何うであつたか友人や親族が氏を擡ぎ上げて最も冷遇したではないか、石本男が歸來するや偶々歓迎會を催したが之れも白鷺城修繕の勞を請はんが爲め、古市博士に洋行歓迎の電報を贈つたのも水道の設計を依頼せんが爲めであつたと聽いては餘りに現金過ぎるではないか、武井男の如きは同地の出身者としては地方の誇りであるが、郷を辭して四十年親もなければ兄弟もない、而も故山の山川風土を友として偶々歸郷されても之れを歓迎せぬと云ふではないか、何と云ふ一體に冷淡なものである、其他數へ來れば澤山ある、是れ吾輩が姫路市民の反省を促す所以で、即ち姫路根性なるものを一洗する必要があるとすし伯を始め先輩諸氏を責むる譯には行かぬ。



舊明石藩主 貴族院議員 子爵松平直德君

●同家の祖先

當家は徳川家康の曾孫松平但馬守直良を祖となす、直良は越前大野に封せられて五萬石を領し、二代直明加増せられて六萬石となり、元祿十四年更らに明石へ移封せられたのである、直明は士を愛すること厚く、兵學者長沼濤齋を延びて國老格に列し、藩士の爲めに兵法を講せしむ、由來明石が多く兵學者を輩出したのは實に之が爲めである、直明薨じて大慈院と諡したが頗る潤達なる英君であつた、其後直常、直純直恭を経て六代峻徳院直之は宗家より入つて嗣となり、更らに八萬石に加増せられて特に十萬石の格式を以て待遇せられ之より直周、直韶、齊宣、慶憲、直致を経て現子爵直德君に至つた次第であるが、明石藩は歴代學者を優遇して多くの碩學を聘し敬義館と云へる藩校を興して大に文教を奨励し、一時天下の鴻儒が此地に集るもの踵を接したと云ふことであるが、同家が幕府時代に多くの人材を輩出したのは、全く歴代の藩主が教導の途に心を傾注せられたからである。

▲當主直德子

當主直德君は先々代慶憲の次男にして、明治二年七月の生れ、幼名を祥次郎と云ひ、慶應義塾並に學習院に學び、明治十七年三月先代直致の養子となり、同年四月直致氏の薨するに及んで家督を繼ぎ名を直德と改め同時に襲爵しられ、其後三十六年一月貴族院議員の補缺選舉に當選し、三十七年七月總選舉の結果再選せられ、夙に研究會派に屬し穩健なる思想

兵庫縣人物史 子爵松平直德君

と其高潔なる人格とは常に貴族院に於ける甲冑界の錫々として囑望せられて居る、性優雅にして園藝と謠曲に多大の趣味を有し颯々の聲は常に高輪の邸内に響いて居る。

夫人精子氏は舊岩村藩主松平剩命氏の長女にして華族女學校の出身、貞淑の譽れ高く、四男あり何れも修學中家庭は頗る圓滿である。

子爵は一面國事に奔命する傍ら常に明石に來往して、舊藩士と親睦に努めて居られるにも拘らず、嘗て學校敷地問題に關して、明石町民との間に紛議を生じたことありしも、幸に同家の評議員齋塚貞操氏等の斡旋によつて圓滿に解決せられた、而して同家が多年無償で貸與せられて居つて今又七箇年賦を以て賣渡されたこと云ふことは、明石町に對しては恩惠的で彼是言ふべき餘地はない、殊に明石町の子弟にして大學に學ばんとするものには、學資貸與の規定を設けられてあるを以て見れば、子が舊領内を念ふの厚きを知るに足るべく、吾人は些々たる利害問題の如きを以て、多年の美的關係を互に阻碍せざらんことを切に希望するものである。



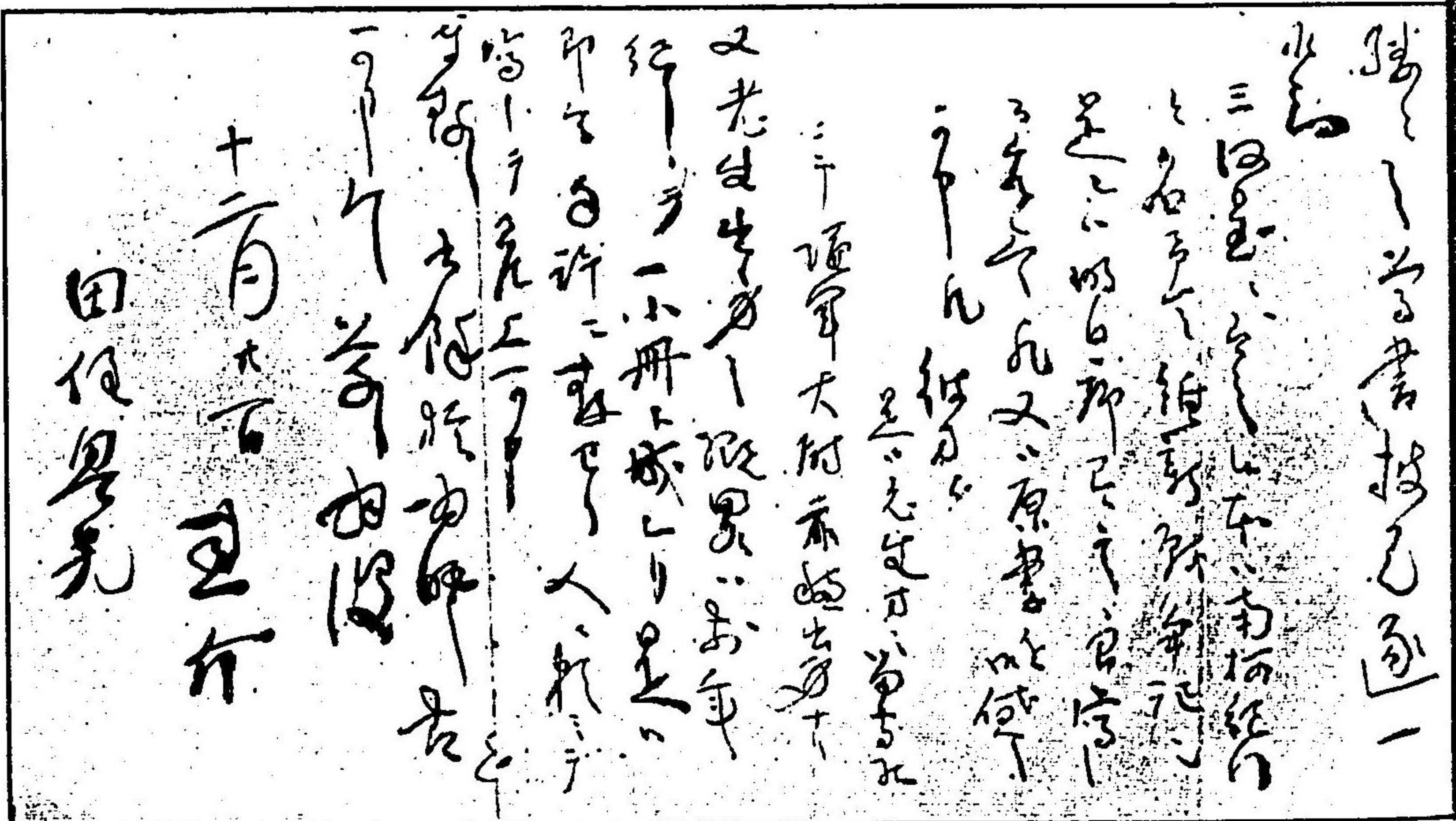
れには及ばぬと思つたが、折角であるから貰つて居る。

▲日清戦争の發端

日清戦争の起りを語れと云ふのは、さうだれ俺は支那公使となつて北京に四年居つたが、支那の大官に接して其間東洋の問題を色々口を酸くして談して聞かすけれども少しも解らぬ、仕方ないと思つて居る處へ、故參謀總長の川上操六が来て、公使館に二箇月計り滞在したことがある、而して形勢はどうかと言ふから、何うも憚らない一つ支那と戦争をやつて彼の横つ面をハッキリして目を醒ましてやるのぢやと云ふと、川上も驚いて勝てるかと言ふから、何に軍艦は四千噸計りあつて日本より遙かに優勢の形であるが、併し陸軍は俺れが始終見て居るに少しも恐れるものではない、勝つことは決まつて居るからお前が歸朝したら何時でも支那へ出兵の出来るやうに三萬の陸軍を小倉に置くことにして呉れい、其内端緒が啓けるであらうと相談をして、其後機を窺つて居る一二年後に恰も朝鮮に東學黨が起つた、其の時政府から俺に朝鮮公使を兼ねて呉いと言つて来た、乃で一晩考へて一切の事を擧げて俺に任すならば承諾しやうと返事した、所が任すと言ふから、夫れより軍艦に決神を向め、豫て考へ通り朝鮮を餌にして支那を引き入れ、是非日清戦争をやらねばならぬと、心私かに覺悟を極めて朝鮮へ向つた、忘れもしぬ小村が見送つた時、俺は小村に今度は朝鮮で死ぬるぞと云ふて握手して二人姑く晴涙に咽せんだ、こがある、夫れから仁川へ着くと東學黨無算の爲めに支那の兵が三千牙山へ来たと言ふから、何れ京城で開戦と覺悟を爲し、俺が入京の護衛と云ふ名義を以て一千の兵を率ゐて京城へ乗り込んだ、何れ行きなり戦争と思つて力んで居つたら支那の兵はまだ京城へは来て居ない一寸張合が抜けたが、夫れから韓國政府へ掛け合ひ、韓國は獨立國が將た國國と詰問すると、獨立國であると言ふから然らば支那の兵は返して仕舞へと言へば、一旦内亂の鎮撫を支那に頼むのであつたらうと行かぬと云ふ、然らば内亂の鎮撫は日本でやる一切を日本公使に一任せよと、其間の折衝頗る困難を極めたが遂に一切の事を擧げて一任すると云ふ委任状を取つた、そこで直に公使館書記官に命じて、支那の司令官に兵隊を撤するやうに申込めと言つたら書記官も愕いたが、何に驚きする事は其は是れから支那と戦争をやるのだと云ふて、掛合ひを爲して居る内に大島の兵

て大分世の中が擾がしくなつて来た國へ歸つても別段是といふ見込も無い、寧ろ江戸へ往たなれば江戸には大家も多く西洋の本も寫本などによらず、自由に讀むことが出来るやうと思つて、僅の旅費を拵へて江戸へ出られたのが安政元年である、其の時濱松町の大木忠益と云へる醫師の塾に入り、直に翁が塾長となり、加藤弘之男なども亦同窓の一人で、今に兩翁から此昔語りをされて居る、然るに其の時分から段々外國船も來る大名の家來が訓練をする、大砲や小銃を拵へる臺場を築くことが盛になつて、各藩から其の事を原書で調べて呉れいと頼まれ、夫よりは醫者の本は讀まずに色々なことを研究された、乃ち（此時既に寫眞のことなども調べて、薩摩の大守齊彬公の命により、御養女が十三代將軍へ入輿の際に、其方法を申上げて、大守自ら同御姫様の姿を撮られたさうで、現今と其方法は異ふが、兎に角此れが本邦に於ける寫眞實驗の嚆矢である）。世は開國攘夷の論喧しく、豪壯に

兵庫縣人物史 男爵大島圭介君



田代具光

が一萬やつて来る。遂に戦端を開いたのである、此時の内閣の總理は伊藤であつたが、無論伊藤には此計畫は相談せず、我輩と川上の相談であつた、俺が朝鮮を引揚げて歸朝した際、伊藤が新橋に迎へに来て、爺のさんさんい事をやつたなあと言ふたことがある、小村は知つて居つた彼れは却て山師だ、勿論俺は充分支那には勝てると思ふ胸算立して居つたが、其後日露戦争となり連戦連勝で遂に今日では朝鮮の併合迄を見るに至り、彼の爺さんや婆あさんが日本へ遊びに来る様になつたが爺んなに早い事を行ふとは豫想しなかつた、存命中に此の結果を見て、實に愉快であるが死んだ先輩にも見せてやりたい。

▲男が前半生の略歴

翁は、天保四年赤穂郡細念村に生れ、父を小林直輔と云ひ數十代連綿の素封家にして世々醫を業とし翁も又醫を志して幼少閑谷の塾に入り經子の學を修め居ること五年、然るに翁が十八歳の時赤穂町の醫中島意菴と云へる者より、今後の醫師たらんとする者は到底草根木皮の傷寒論位を學んで居つては不可ぬ、須らく洋學を修めなければならぬと警醒を加へられ、意菴の所蔵せる洋書の翻譯書數十冊を借りて通讀して見ると、如何にも生理、病理、解剖等、何れも進歩して居ることと喫驚三嘆、一生中に此時位刺激せられたことはないと常に語つて居られる、其處で大に覺醒したる翁は直ちに父に請ふて、大阪の緒方洪菴先生の門に入り、福澤諭吉、長與專齋氏等と共に蘭學を修めて居られること三年、然るに其頃緒方の塾でも本が少くないので、各々寫して讀むのであるから却却困難である、また讀んだ本の中で醫者の助けになる様なことは甚だ少くない、殊に國元よりは學資を送られないから頻りに歸國を促した、然るに其頃には亞米利加の軍艦が浦賀へ來

して新氣満々たる翁は、更らに江川担菴の塾に入つて兵學を修め、担菴之れを偉として幕府に薦め、初めて祿百石二十人扶持を以て幕府直參の臣として召し抱へられ、後又泰西の兵學を佛人に學び、大に得る處あつて、歩兵訓練編を著し、文久元年鉛製活字を以て築城典型なる一書を出版した、之れが即ち我國に於ける活版書の濫觴である、當時列藩西洋の武技を講習するものは、皆此二書を以て規範とせざるなく、世を驚かしたことは到底今日の戰術論の比ではなかつた、既にして内外多事幕府大に兵備を理むるに當つて、歩兵訓練の任に擧げられ則策貢獻頗る努めたことは世人の克く知る所である。翁が書きたりと頃數名の學友が訪ひ來つて高論妙談の時を移し、終に酒を酌まんとしたるが、翁中堂錢もなし、翁たちごころに一計を案じ、下宿に於て二升徳利を借受け、之れに水を容れて腰間に携へ、刀を拵んで、市街を徘徊して居ると、會々富家の隠居らさき者に出逢ひ、之れに突き當つて徳利を大地に墮した徳利破れて水の出づるや忽ち憤怒の狀を裝ふて、曰く吾今酒を購つて歸る汝故らに我に觸

れて徳利を破る、其罪断じて恕すべからず、將に一刀を抜かんとして見せた處が、老爺は地に座して低頭罪を謝するに切、乃ち之れを恕し徳利及び酒を償はしめ、歸つて學友と大に痛飲したと云ふ、其意氣の豪壯なりしことを想見し得べく。

維新戦争と大島の洒落

戊辰の役幕府の軍が伏見鳥羽に破れ、王師東征して將軍江戸城を開くに當り、赤穂武士の遺風ある幕臣の翁は慷慨禁する能はず、奮然義に於て幕府の爲めに戦はんと欲し自ら陸軍奉行として乃ち傳習隊一千六百人を率ゐて下總の市川に據り屢々官軍に抗し、轉じて下野に入り結城を陥れ、更に進んで宇都宮に陣するや、翁の驍名を聞いて従ふもの日に多きを加へ、兵勢大に振ひ頻りに官軍を惱ませしも、衆寡敵せずして日光に退き、奥州に走り會津仙臺等の各地に轉戦せしが遂に敗れ、榎本武揚が幕府の軍艦を率ゐて仙臺松島灣に至るや翁は之れに搭じて蝦夷に渡り五稜廓に遁れぬ、是に於て軍勢又大に振ひたりしが、時に諸將相會して軍議するに當り、或は大に戦はんとするもの又は死守して自刃せんとするもの何れも意氣の軒昂たるものありき、然るに翁は獨り時勢を遠觀し自ら王師に抗すべからざるを覺り、且つ幾多の壯士をして空しく北海の鬼たらしむるに忍びずとなし、而して平然とし

て曰く今度は一番降参と洒落れて見るがよからうと、衆議遂に降参に決しぬ、此れが即ち大島の洒落と云ふて、世の好話柄として残つて居る所である、以て翁が襟度の潤大なることを察すべく、又英雄の面目躍如たるものがある、時は明治二年五月十八日にして左の述懐は翁が當時の胸中を付度するに足るべく、恰も古英雄の心情を言外に窺ふことが出来る。

兵氣衰頹事已窮 飄然代衆殺此躬
獨羞一片男兒骨 不曝白沙青松中
一場春夢恍無痕 戰血染衣紅尙存
兩岸秋風數行淚 扁舟載恨渡刀根。

降服後東京に護送せられ、獄に在ること二箇年、特典を以て赦さるゝに至つた、獄中の作としては『枕頭獨對三更月、不似去年橫塑觀』の句の如きは當時の情緒實に懐ふべしである、翁は總野轉戦の際より出獄に至るまで、日記を塵紙に誌して一日も怠らず、南柯紀行と題し詩の悲壯なるもの頗る多く今猶現に保存されてある。其獄中の日記には、其日々々の出來事、獄中の感慨、同時に在獄せし榎本子爵、大村益次郎等幕末志士英傑の消息をも併せ載せられた共、全部にては紙數數十枚に上り、到底茲には掲出し難ければ唯其の中二三節のみ掲出すれば

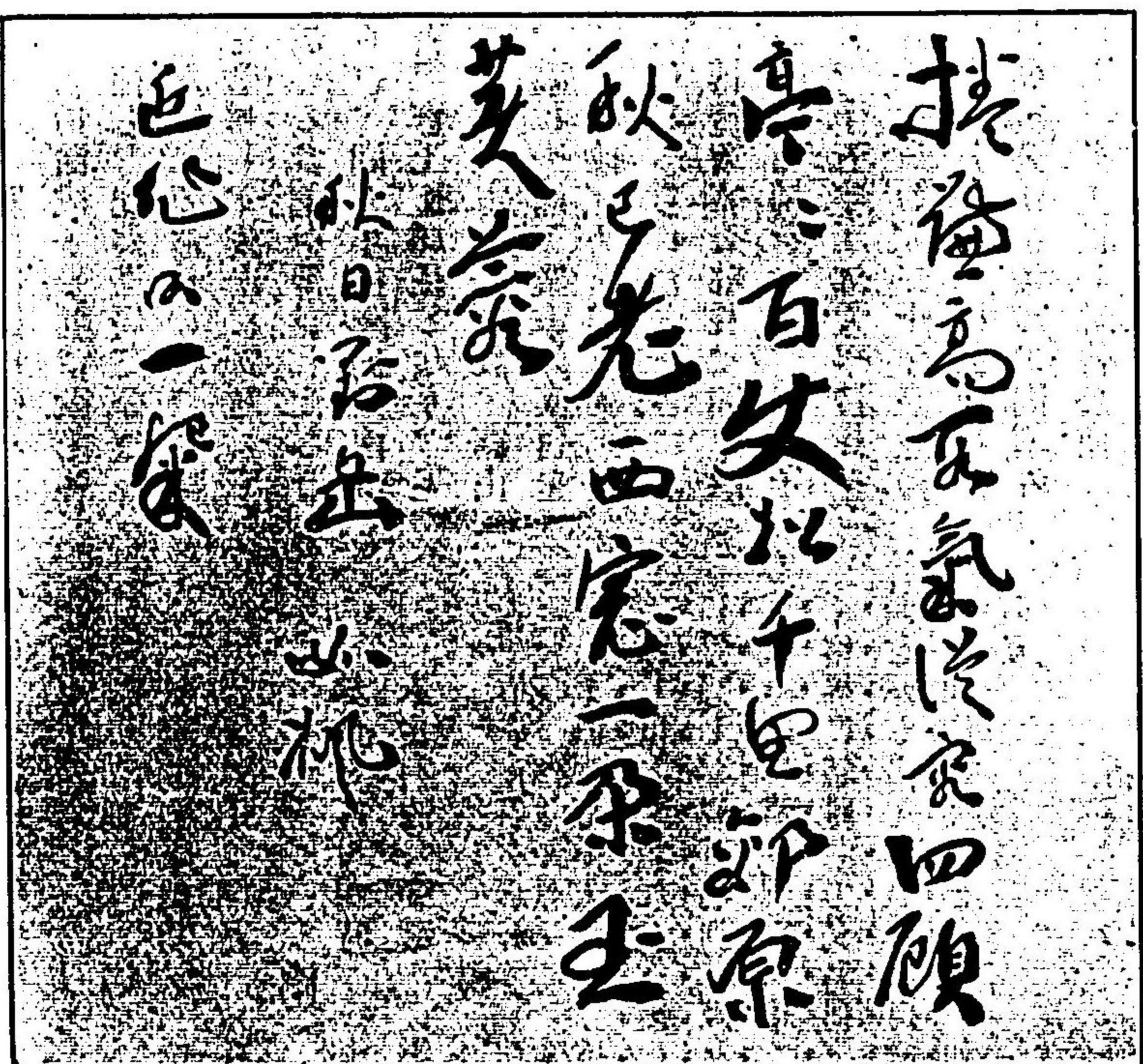
▲入牢の模様 已夏六月三十日朝來京府者、細川侯の兵隊護送して軍務局刑問所に至れり二時間も刑問所の門前に待ち居り其の後門内へ扉を逐て入りし所自洲と思しき所へ小吏共誘ひ連れしに依り茲に榎本初め十四人共並坐せしに砂利の上に薄き英漢を敷きたる處にて膝痛み大に困却せり正面なる高き座敷に役人三人豪然と座し刑問中掲屋へ入れ申す可き旨申渡し獄卒ども直に腰に細き繩を附け案内せる故之に隨ひ立ち上り行けば掲屋の戸口に至り鍵にて錠を開き内

に入り、見れば掲屋は幾局にも分ち多人數群居せり我等は最も奥なる一番の室に入りたり。

▲四疊半の牢室 室に入る時小吏兵悉く所持の物を改めしに由り不得已用意の金子並に石筆小刀矢立等を渡せり夫より内に入り見れば四方は四谷丸太の二重櫓子を以て之を圍ひ疊六疊敷なれ共圍の内に圍さ流し箱がある故疊の處は四疊半也、此の内に七人入れられたり、此の牢は元歩兵の罪人を入れおきたるを見ねて種々の樂書なせり其の内に佛人「コラシユ」四月二十一日入牢と記せるを見て大に驚き小使に尋ねしに「コラシユ」はテシロット船乗組の人々と共に此處に來り十八日許り後出牢せり其の後隣の牢其の外の人々を尋ねるに過半テシロット乗組の人々にて古川、小笠原、神木隊の石井、井上其の外なるよ聞き大に安堵せり。

▲宛然見せ物の虎 飯時には竹の皮に飯を包み澤庵の切かけたるを一片附け小使持來り因つて七人とも之を喫す、然れ共四方暗く未だ殘熱も甚だしき故精神無聊何れも少し許りづ、食して終れり△子皆て舶來の虎を見し事あり今日の妾恰も見せ物の虎の豹の如し悲しい哉△本日は何の用意もなき故床に入り其の儘臥せし處蚤は肌を咬む蚊は耳に響き安眠する能はず△此の牢屋は予が一昨年歩兵頭たりし折歩兵取締の爲建立せる者なりしが圓らす今我が身を管束せしむる獄となりたり己より出づる者は己に反る理なるか一笑を催せり。

兵庫縣人物史 男爵大島圭介



は白洲の上は薄き英漢を敷き繩取りの者附添ひ居り縁側には小吏二人座し其の大横向には一人座し筆記の事を司れり正面には小栗、月岡兩人相並び恰も阿古屋琴貴の景を畫出せり小栗先づ最初に牢中の苦辛を慰勞し次に兼て翻譯せし書類中にて某々の書ありや否やを問けり予

答へて曰く去年□□航走中家屋し其際筆墨書籍杯も打捨置きたれば今は種々の草稿類も多分紛失せしならん△第三に佛人ブリユフナを仙臺へ伴ひ來りしは如何なる人の周旋なるや又佛帝よりの命を受けて來りしや杯と詰問せり答に同人は海軍の者と同行し予は昨春より會津にありたれば其原因は更に知らずと隨つて種々の事を申立予輩を獲し他の脱走せる人を寛典に處し給はらん事を願ふ而して其日は右にて静まれり△軍務局刑問所は元清川氏のときは大手前歩兵屯所と唱ふるも今にて荒井並に小生の預かりにて毎日出勤して陸軍の事を取扱へり其の頃出入には番兵數人整列し捧げ銃を爲せしに今は同席の有様にて見る影も無く慷慨せり嗚呼人生の榮枯浮沈も甚哉往事を思ひ出せば皆一場の夢なり。

▲圓筆論と竹皮の枕 牢中人員折々出入ありて増減すれ共十三疊に二十四五人位なり殘暑の節一疊の上に二人づ、並びて臥するは随分難澁なり但し二人も相手を依りては格別苦しからざりし事共を思ひ合せたり牢中圓一箇所に其穴甚だ小なり前件人數多き故折々大小便を以て汚し孰れも某々争論を起し云々△沐浴は大抵十日或は十四五日にて人數は多く殘暑強く圓は臭き故身體の汚穢を除くの術無く因つて飯時の残り湯を取り順を返うて一日に四五人宛流し箱の内

にて行水を使へり△半中枕入る、事を禁ず因つて何れも飯を包み来りし竹の皮
を取り置き之を幾重にも疊みて枕と爲せり△△強なきにより大に困却せり一人
矢立の筆を持ちし者ありし故初めて反古紙を買ひ墨を絞り出して少しづ、書記
せり或は七夕の緋紙を求め前同様用ひし人あり。

後ち明治五年一月明治政府に出仕して、開拓使御用係小議
官となり、同年大藏大丞に轉じ大輔吉田清成子と共ニ歐米各
國を巡遊し、歸朝後陸軍四等出仕に補し、同參謀局三分課長
仰付られ、同八年工部省へ轉じ、暹羅國へ差遣せられ、其風
俗人情を視察して暹羅紀行の一書を著はし、安南に寄航して
大越史記を携へて歸る等、此行に於ける我國を裨益したるこ
と頗る多く、亞いで工學頭に任せられ、同九年内國勸業博覽
會御用係仰付られ、同十年工部大書記官工作局長となり、工
部大學校を創設して工業の振興を圖り、又電線の架設、鑛山
の採掘等に至つては其功甚だ多く、翁は一面工業家の素質を
備へ、嘗て精糖、燐寸、製紙、染織、其他ブリキ、セメント
等に至る迄、夙に研究して之れを人に教へられた人で實に多
才多藝の人であつた、同十三年勸業博覽會審査部長、同十四
年農商工上等會議員仰付られ、參事院議員補を兼ね、又同年
工部技監となり、工作局長仰付られ、十五年工部大學校長を
兼ね、元老院議員に、十九年學習院長を兼ね、二十年又兼ぬ
るに華族女學校校長を以てし、二十二年六月特命全權公使に任
せられ清國に駐劄し、二十六年七月朝鮮公使を兼ね、同國外
務大臣との間に日韓攻守同盟を締約し、井上侯の駐韓公使と
なるに際して、其任を退き、二十七年十一月樞密顧問官に任
せられ、引續き今日に至り、又三十六年大阪に開設せる内國
勸業博覽會の審査總長たりき、而して累進して二十八年勸一

等に陞叙せられ、瑞寶章並に旭日大綬章を賜はり、三十年正
三位に叙せられ、三十三年特旨を以て華族に列せられ、男爵
を授けられた。
翁は如楓と號し筆力雄健詩文を善くす、其所作の二三を摘
載すれば。

偶 成
扶弱制強果孰功 兵權掌握覺談雄
請看八道文明素 在此彈丸一發中
秋 夕
及斯燈火可親時 兩讀晴耕又賦詩
衣食有餘身亦健 半畦養菊結秋籬

前溪寺送木魚聲 擔雀爭鳴報早晴
老眼眠醒儻未起 玻璃窓下曙光明
蓋し世の元老たり先輩たるものが、白髮皚々として尙政權
に懸戀し、或は名利に汲々として、自ら其の品位を損するも
の多き時に當り、翁は早くも世を遠觀して身を處すること高
く俗界に超脱して又名利を思はず、塵を避けて湖南に居り、
詩を賦し書を繕き悠々自適として餘生を樂みつつあるが如き
は、洵に古英雄を見るが如く、是れ其の人物の大なる所以で
ある。

▲翁の家庭

翁に、三男四女あり、長男は即ち浦鹽駐在總領事、富士太
郎氏にして次男次郎氏は醫學博士にして先年臺灣病院長とし

て任地に客死し、三男六之氏は法學士にして一昨年早世せら
れ、長女は奥田像三氏夫人にして次女は實吉よし子三女鴻子
四女は玉枝子である。

▲附記

本書出版の期將に近からんとせる明治四十四年六月十五
日、突如として男の訃音に接し、感慨轉々禁せざるものあ
り、願へば嘗て男を三河臺の邸に、或は國府津の別墅に訪
ふて親しく其溫容に接し、常に訓戒を與へられたる、男の
一語一笑、一舉一動は今も猶手に取るが如く、殊に東京へ
來た折には必ず立寄つて呉れと老顏涙を浮べて懇に送られ
たる其偉は彷彿として眼前にあり、又余に寄せられたる書

中には男の蕩々たる真情を發露して一唱三嘆に堪へざるも
のがある、然るに其後間もなく病床に就かれたことを聞き
必竊かに恢復の一日も速からんことを祈つて居つた甲斐も
なく、忽焉として他界の人となられたのは、洵に痛悼の至
りに堪へぬ、而して一世の英雄を失つたことは、國民の共
に惜しむ所であるが、殊に余は嘗て男の知遇を受けたる而
已ならず、舊冬多大の賛成を表せられたる本書を男の座右
に供することを得ざりしを最も遺憾とするものである、然
れども今は思ふも又及ばず、噫玉釐花を積み載せて男を億
萬長途の外に誘はんとする、六月二十日午後二時、茲に附
記して謹で哀悼の意を表す(著者)



貴族院議員
日本銀行總裁
男爵松尾臣善君

(四十三年十一月繪)

凡そ世に名を揚げ功を樹てた人を見るに、必ず常人と大に
趣きを異にする所のものがある、常に其天性資質に於て卓越
せるものある許りではなく、其行ひたる跡を仔細に觀察すれ

ば其成功の偶然にあらざる所以を推知するに難くはない、而
して中には時に例外もあらうが、併し多くは時勢を察し、且
つ堅忍不拔の思想を以て、力戦奮闘其志を一貫して、最後の

到着點を誤らない人である。

日本銀行總裁男爵松尾臣善君の如きは又其一人である。氏は弱冠にしては一家經營の任に當り、夙に世運の趨向を遠觀して身を國事に挺し、擲られて宇和島藩に仕へ、而して明治の初年よりは政府に召され、國家財政の樞機に參して官海に在ること三十餘年、本邦の經濟界尙ほ未だ幼稚にして、波亂變轉極りなきの時代にあつて之れが施設整理の衝に當り、以て我國の經濟財政が今日の發達を見るに至りたるもの、實に氏に負ふ處多く與つて力ありと云ふべきである、宜なり氏が永く大藏省に奉職せられたるが故に、朝野共に大藏省の活字引と稱するに至る、以て氏が財政家として其實務に熱心なるものあるを想見するに足るべく、是に於てか本邦經濟界に於ける空前の難關たる、日露戰爭の起らんとするや、政府は氏を以て財界の中樞たる、日本銀行の總裁たらしめ、以て軍資の供給等我が經濟界に對する施設に異算なからしめんことを期した、而して氏は此樞機に就くや、指導按排の宜しきを得て誤らず財界の激變に處して、其目的を達せしめたる而已ならず、戦後財政の整理、經濟の發展に貢獻せること頗る多く殊に四十三年度の如きは、同行に取りて創立以來豫想外の好成績を示し、更らに同行營業年限の繼續、又は増資等の結果は、中央銀行として世界に對して遜色なきと共に、國家の信用をも重からしめ日本銀行空前の明總裁なりとの世評を受くるに至りしもの、蓋し氏が多年の經驗と手腕の卓越せるものあるや勿論なりと雖も、要するに誠見高く事理に明晰なること又其高潔なる人格に、加ふるに誠實事に處し鞠躬として之を

行ふ結果である、而も權勢を求めず、功名を貪らず、常に要衝に當つて終始邦家財政に獻替せる、氏の功勞勳績は、永く我が財政史上より没却すべからざるものである。

男は斯くの如く重要な地位にあると共に、又一面には最も祖先の祭事に意を用ひ、従つて愛郷心に富み、常に郷里の事には周到なる注意考慮を加へらるゝと同時に地方の者には歡んで會談せられ、殊に後進の提擧に努めらるること厚く、洵に温情掬すべき人である。

▲男爵邸を訪問す

男の邸は、赤坂區新坂の高臺で、綠滴る松の木立の中に建てられ、廣潤なる數千坪、庭園は今や楓葉紅を成して、軒下金風を送つて居る秋の景趣は、以て婀娜高潔なる主人の人と爲りを觀はしむ。著者一日氏の邸を訪ふと、門前に馬車の軌つた跡が印して既に外出せられた後ちであつたが、幸ひ小主義夫君に迎へらる。

▲若主人義夫君と語る

若主人の義夫氏も、又父男爵の意を享けられたものであらう、世に燦く日本銀行總裁男爵の誦詞であるから、或は權柄なる高襟紳士ならん杯と想像する人もあらうが、开んな風手は少しもなく、打解けたる談振りは、誠に質素な心易い人である、而して能く播州の事情に通じ、神崎郡の山林も加東の田地も總て氏が經營を擔任して居られるが、固より氏は播州で生れ播州で育つた人ではない、けれども祖先墳墓の地であ

るから出來得る限り親密に交通して、又力の及ぶ丈には盡したいと云ふて居られる、話中農家の經濟から耕地整理農作物の改善、副産の奨励等説かれること詳密に、該博なる見地と加ふるに正確なる實地的の議論に至つては、鋤鋤を把る農業家の、以て指針となすべきもの尠からざるには一驚の外はない。

氏は千葉の専門學校出身で、藥學を専攻せられ、三十七年に陸軍二等藥劑官を拜命して、日露の戦役には第一軍に従軍し、其功に依り勳六等に叙せられ旭日章を賜はつたが、今は専心家事に盡されて居る、人と爲り謹厚、道に圓満高麗なる家庭に生ひ育つた事が窺はれると共に、同家の將來は勿論我が播州地方も氏に由つて尠なからぬ貢獻を得るであらう。

▲男爵と語る

翌日男爵に會つた、男は毎朝特別なる用務の出來ざる限りは、必ず六時には起床して入浴を爲し、佛前に勤行して夫れから朝餐の後も、電氣按摩を行ふを以て、日課の如くにして居られるとの事である、著者が訪問した時には既に此朝の日課が済んだ所であつた、應て男爵は温顔微笑を湛へて出で來り、和洋折衷の客室に導かれた、而して同邸の結構が、頗る廣潤壯大である事は前にも言つたが、併し何れを見ても華奢と思ふ處は少しもなく、室内裝飾の如きも誠に質素なもので其地味な奥床しい男の性格が、不言の間に表はれて居る感じがある、室に通つて先づ目に着いたのは「志興秋霜潔」と云へる墨痕雄麗なる扁額で、之れは曾て伊藤公より男に贈られた

るものにて、蓋し知己の言であらう、而して此類も亦男の性格と相俟つて一層の光輝を放つやうに思はれた。

男は常に訪問の客に接しては、誰彼の別なく真心から款待する人で、而して能く談笑される、故に縦令不平忿懣の人であつても、男の温容に接しては、忽ち銘ろけて仕まふであらうと思はれる、以て其圓満なる人と爲りを知るべく、又品性の高潔と自然に具る高き徳とを窺ふことが出来る。

▲男爵の談話

卓を圍み餘りに語つて曰く、編輯の趣旨は一才見たが、郷里の人と他方在住の人と双方を紹介して、密接するに云ふことは至極よい、何分兵庫縣は地理的關係と、封建時代に小藩割據の所で、従つて同縣下であつても、今に疏通して居らぬこともあつたらう、又郷里の人と他方在住の人とは、お互に事情が解らぬから、自然に疎遠になるであらうと思はれる、殊に地方先輩の談を聞き、地方故人の跡を尋ね、目標を因縁ある手近い處にとつて青年者の參考にする、従つて縣下の理想を作ると云ふことも結構なことである、兎に角充分に注意して何んでも地方青年の爲めになるやうに編輯したららう。と先づ訓戒を加へられた。

▲處世の行路に二途あり

凡そ人の世に處するに云ふことは固より困難のことであるが、要するに世に立ち又は事を行ふに當り運む所の途が二つある、一は積極、一は消極である、進むこと計りを知つて守ることを知らず、多少の危険を踏んでも進退する、所謂大行は細道を顧みずと云ふやうな、余は假りに稱して之を積極と云ひ、進むこと計り守ることを注意して充分に基礎を固め漸を追進して行く、余は假りに稱して之を消極と云ふ、積極と消極と云ふも歸する處は一つである、けれども其行路は自ら異つて居る、余の今日迄の行ひ方と云ふものは

概して後者に屬するもので、勿論進むことに注意はするが、先づ進まんとて色々勝立てをする前に、自ら顧みて足らざる處は之を補ひ、障礙にないと思ふものは氣付次第に之を排除して行くことに努め、最早大丈夫と思ふに至つて初めて路を進めると云ふ風に行つたが、これは甚だ緩慢なるやうであるが、其代りに跡戻りは決してしない、そこで地方青年の人々に注意したいのは、例令ば兩宮や大倉と云ふやうな人が大成功をした、其結果許りを見て危険なも不顧直ちに容易に、大倉や兩宮になれるものと思つて驚き忽ち大失敗を招き慘憺たる境遇に陥る人もあるやうであるが、一體彼の人等の今日あるは却々容易な事ではない、當時今時は時勢の關係もある、且つ彼の人々の苦勞と云ふものは決して常人の能き得べきことではない、故に其成功の結果を觀るよりも、先づ以前に於ける苦勞を仕た跡を現んで貰ひたい、若し然らずして淺りに彼の人等に倣はんとて、時勢の變遷も辨へず、刻苦勵精に至らざるなき既往を慕はせず又劇運運籌到底常人の企て及ばざる才幹あることも願ひず、其結果而已を觀て直に之れに倣はんとするからして、終に顛覆して再び起つことの出来得ないやうな境遇に陥つてしまふのである、人は餘り突飛な事許り考へる者が強ち成功するにも限つては居らぬ、併し余は麒麟をして空しく驚馬と伍せしめ、單に現狀維持、祖業繼續の小成に安んぜよとは、絶對に云ふのではない、けれども到底常人の出来得ないことを望むよりも、寧ろ間違のない消極的に進んで行く方が安全ではないかと思はれる。

▲人の最も肝要なことは忍耐である

そこで何事をするにも缺くべからざる最も必要なことは忍耐である、今の青年は學問もあり、才智もあり、又立ち振舞ひも上手であるけれども、何うも至誠と忍耐の力に乏しいと思はれる、古來學問、才智の乏しい人で成功者はあるが、至誠と忍耐の乏しい人で、成功した人は少くないと思はれる、人生と云ふ激浪の嵐の中を、航海する間には色々の場合がある、或は困難なこともあれば又馬鹿らしいこともある、然れども开處が即ち忍耐を要する場合で、又之れを鍛練する機會である、這んな馬鹿らしいことに忍耐が能きぬ杯と首つて、必ず短氣を出しては不可ぬ、恰も余は明治の初年から政府の役人となつて、前後三十六年勤めたが、其間には随分種々のこともありしが、一切頓着なしに耐

▲賀状

下に列記の者百十五名相謀り明治三十六年二月六日即ち記名者等の友人たる貴族院議員大藏省理財局長從三位勳二等松尾臣善君の誕辰に於て君の還暦の榮壽と官職を奉ずる滿三十五年とを祝賀するが爲め聊か饗宴を設け其紀念として橋本雅邦畫く所の松鶴の雙幅を贈呈す。

右贈呈に際し聊か記名者等の所感を開陳し以て微衷の存する所を表明せんとす。夫れ記名者等の君と交遊を辱うするや其歲月各長短ありと雖も未だ曾て親疎あらず而して君の極めて友誼に厚きと其業務に熱心勵精にして事を處する極めて老熟縝密なると三十五年間我邦財政上の成績は君の力に頼ること多きに居るとは記名者等の共に景仰して措かざる所なり。

君は天保十四年癸卯二月六日を以て播磨國加西郡横田村に生る父は中根佐平治君母は後藤氏君は其長子なり幼名寅松後寅之助と改む年甫めて九書寫山座主に就き讀書習字の業を受く安政元年五月出で加東郡阿形村郷士松尾七兵衛君方信の養子と爲る六年十二月松尾五郎兵衛君の三女秀子君を娶る文久元年郷里を辭し伊豫國宇和島に抵り伊達侯に仕ふ藩士に列し物産の事を掌理す時に年二十なり君夙に勤王の志あり慶應三年十二月藩主宗城公に従ひ大阪に赴く明治元年二月朝廷君を徵して大阪府裁判所掛兼外國掛に任ず四月外國事務局述上所御用掛附屬吟味役に遷る十一月勘定役に

忍勵精して今日に至つた、謂は、余の今日あるは耐忍の結果多きに居ると思ふ。尙一つ特に地方青年に注意したいのは、近來兎角都會へ出ることを考へる、之れは近時に於ける一種の社會的病氣であらうと思はれる又國家の政策上から云ふても面白くない現象で、人は都會にさへ居れば成功するに限つたものでもない、寧ろ艱難苦闘孤懸懸踏の多き都會に居るよりは、寧ろ田舎に居つて其土地の開墾に盡力して成功を爲す方が、國家の爲め亦人生の幸福ではあるまいか、一體舊大名華族杯も、維新の際には政策上東京府に貫屬を命ぜられた、けれども今日は、斯る必要もなき事故、東京に居る必要なき方は、舊領地へ歸住して地方の指導に任ずる方が、自己の經濟將た地方の爲めから云ふてもよからうと思はれる。

▲地方青年が方針なくして徒らに都會に出るは幸福でない

尙一つ特に地方青年に注意したいのは、近來兎角都會へ出ることを考へる、之れは近時に於ける一種の社會的病氣であらうと思はれる又國家の政策上から云ふても面白くない現象で、人は都會にさへ居れば成功するに限つたものでもない、寧ろ艱難苦闘孤懸懸踏の多き都會に居るよりは、寧ろ田舎に居つて其土地の開墾に盡力して成功を爲す方が、國家の爲め亦人生の幸福ではあるまいか、一體舊大名華族杯も、維新の際には政策上東京府に貫屬を命ぜられた、けれども今日は、斯る必要もなき事故、東京に居る必要なき方は、舊領地へ歸住して地方の指導に任ずる方が、自己の經濟將た地方の爲めから云ふてもよからうと思はれる。

▲功成り名遂げて故山に老いんとす

余は近來頻りに此のこゝを思ひ、最早齡七十に達せんとして居るから、後進の進路を妨げないやう職を退き、郷里の加東には知らるゝ如く、同族も數十戸あり又親族も數多く、僅かの山林や田地も所有して居るから、郷里へ歸つて老後の仕事には幾分でも地方の爲めに盡したいと思つて、此頃隱居所の普請を仕掛けて居る、そこで加東邊の生産物は米一方で別に副産物がないから、何か副産の獎勵になるものはないかと思つて、幸ひ昔が今別に事業もやつて居るの故一番思つた云ふ方面に盡して見れば怎うかと言つて先般横濱の野澤組に「唐辛子」又は「絲瓜」を作ることを相談したり、或は孝祥真田のこゝを調べたと見たり、此等は幾らでも輸出が出来る、副業には適當であるから、二三年余の地所で試作して見やうと思つて居る。余も農家に生れて農家に育ち、夫れから永い間官吏となり銀行家ともなつたが、又元の農家になつて生れ育つた處で、自分の地所で自ら作つた米を喰ふて、寧ろ紅塵萬丈の俗界よりも武陵桃源の田舎に老いんと思ふのである。

●男爵の經歷

轉任す二年正月二等役と爲る十月大阪府大蔵に任じ外務局會計長と爲る十一月通商司權大佑に任ず四年正月通商大佑に任ず六月監督大佑に轉ず七月戸籍司十一等出仕と爲る八月戸籍權大蔵に任ず五年二月戸籍大蔵に任ず六年十二月國債大蔵に轉ず八年一月國債寮七等出仕と爲る是より主として政府準備金の運轉出納整理の事に任ず十年一月大藏權少書記官に任じ國債局勤務となる三月正七位に叙す十二年七月大藏少書記官に任ず十五年十二月勳六等に叙す十七年五月大藏權大書記官に任ず十九年一月出納局長心得となり主計局主簿課長を兼ね三月出納局長に任ず二十四年七月主計局長を兼ね八月主計局長に專任す二十六年三月預金局長を兼ね二十七年九月事を以て廣島に赴く十月大本營附と爲る二十八年十月功を以て勳二等に叙し旭日重光章及年金六百圓を賜ふ二十九年四月國債局長を兼ね三十年四月理財局長に任ず三十二年十月從三位に陞叙す三十三年三月貴族院議員に任ず四月臨時秩祿處分調査局長を兼ね三十五年十二月三十三年清國事變の功に依り金參千圓を賜ふ。君は各種の政務調査委員若くは銀行創立委員等と爲ること既に多く又帝國議會に於ける政府委員となること十回に及べり而して就官以來功勞を以て賞賜を受くること亦少しとせず故に君の多年其心力を國家財政上に致し拮据艱辛して其功績の顯著なるは朝野共に知る所にして固より記名者等の叟々を須たざるなり是れ記名者等の君に對して所感を同ふし欽仰して止まざる所なり。

務に當る後來益々其職責を盡し其功績今日に倍蓰するは記名者等の刮目して待つ所なり況や君は家道雍睦室家相和し子孫誼々繁榮す其慶福亦比類希なるをや記名者等の君を祝賀する所以のもの豈に偶然ならんや今贈呈する所の物は至て菲薄なりと雖も幸に之れを笑納し以て永好の紀念とせらるゝを得ば記名者等の喜何を以て焉に加へん茲に蕪辭を陳じ相共に壽觴を稱げて君を祝賀し併せて君の將來益々健康ならんことを祈ると云爾

明治三十六年二月六日

- 伯爵 井上 馨(前大藏大臣)
- 男爵 岩崎 久 彌三(菱合資社長)
- 石川 有 幸(元大藏省主税官)
- 池田 謙 三(株式會社第百銀行取締役)
- 五十嵐 敏 止(日本勸業銀行監査役)
- 井上 辰 九 郎(日本勸業銀行理事)
- 今村 繁 三(合資會社今村銀行頭取)
- 市來 乙 彦(大藏書記官)
- 長谷川 爲 治(造幣局長)
- 原 六 郎(東洋汽船株式會社取締役)
- 早川 千吉 郎(合名會社三井銀行理事)
- 橋本 圭三 郎(東京商會書記官)
- 林 益 三(大藏大臣秘書官)
- 原 亮 三 郎(日本銀行理事)
- 仁尾 惟 茂(東京商會局長)
- 種 積 陳 重(東京帝國大學法科大學教授)
- 種 積 八 束(東京帝國大學法科大學長)
- 得能 通 昌(印刷局長)
- 豊川 真 平(三菱合資會社銀行部長)

- 子爵 土岐 彌三(銀行理事)
- 波邊 國 武(前大藏大臣)
- 若槻 禮 次 郎(大藏書記官)
- 加藤 高 明(前外務大臣)
- 川崎 子 寛 美(銀行理事)
- 金 藤 正 義(日本郵船株式會社社長)
- 川上 直 之 助(日本勸業銀行理事)
- 田尻 稻 次 郎(會計検査院長)
- 武 井 守 正(貴族院議員)
- 高 橋 新 吉(日本勸業銀行總裁)
- 高 橋 是 清(日本銀行副總裁)
- 男爵 曾 福 祐 助(大藏大臣)
- 男爵 曾 田 壽 一(日本勸業銀行總裁)
- 男爵 曾 根 靜 夫(北海道拓殖銀行頭取)
- 男爵 曾 根 孝 吉(株式會社十五銀行頭取)
- 男爵 相 馬 永 胤(橫濱正金銀行頭取)
- 男爵 妻 木 賴 實(大藏技師)
- 男爵 大 倉 喜 八 郎(合名會社大倉組頭取)
- 男爵 大 谷 嘉 兵 衛(株式會社橫濱七十四銀行頭取)
- 男爵 安 田 善 次 郎(株式會社第三銀行頭取)
- 男爵 松 方 正 義(前大藏大臣)
- 男爵 益 田 孝三(井物產合名會社事務理事)
- 男爵 益 田 純 造(貴族院議員元大藏次官)
- 男爵 後 藤 新 平(臺灣總督府民政長官)
- 男爵 近 藤 廉 平(日本郵船株式會社社長)
- 男爵 阪 谷 芳 郎(大藏總務長官)
- 醫學博士 北 里 柴 三 郎(傳染病研究所長)
- 醫學博士 淺 澤 榮 一(株式會社第一銀行頭取正四位勳三等)

居つた。(福岡新田は今も來住村の内に加へらる)

▲男の養父故松尾七兵衛翁

男の養父七兵衛翁は、資性寛浩卓落で謂はゞ國士風の敢て小事に拘泥する人ではなかつた、故に男が養子となられると間もなく養母の訃となりしが、翁は又餘り家事には關係しないと云ふ風で、當年纔に十二歳の男に殆んど任かして居られた、最も男の獨斷では一切の家事が出来ない、そこで同家の爲めに先祖より相應に世話をして居つた人が四人あつて、此四人が番頭として男を補佐したのである、然らば翁は愼く家事を顧みられなかつたと云ふと、頗る大膽粗暴の人のやうに懷はれるが、又一面には最も細心で用意の周到な處があつた一例を挙げると、幼年の男に實務練習の爲めにと言ふて、常に各方面へ往復の書信杯は總て仰せ書きと云ふて自ら文章の意味を口述して代筆を命せられて居つた、成程之れは少年の爲めには千差萬別の事實も會得するから、従つて常識の養成にもなり、又手紙の書き方も解る實務練習には最も良いことと思つて、男も常に此方法を幼少な子供に命じてやつて見ることが、動もすると齒痒くなつて、自分が直に筆を持つて書く氣になると言つて居られる。

▲男爵の祖先

其の後明治三十六年十月二十日、日本銀行總裁被仰付四十二年十月二十日、同總裁重任被仰付、又三十九年四月一日、三十七八年事件の功に依り勳一等旭日大綬章を授け賜ひ、同四十一年九月二十三日、依勳功特男爵を授けられ累進して從三位勳一等に叙せらる。

男の生家中根氏は祖先より代々里正を勤め、地方の名門にして、今を去る約二百年以前火災に罹り、舊記は燒盡してしまつたので、果して同家の祖先が、何れから移られたと云ふことは判らぬが、兎に角同地方開拓の祖先として里人の崇敬を受けて居られる、夫れから又男の養家たる松尾家の祖先は現に信州伊奈郡に松尾村と云ふ處がある、元同地の領主であつたが、後ち武田氏か又は徳川氏の爲めに滅ぼされ、遁れて京都に住し、秀吉の中國征伐の際、三木の別所攻めに從軍せしものにて、其際別に感ずる處あつたと見ゆ、歸農して阿形村に住居し、地方の名族として、後ち姫路藩の領分に屬し、藩主酒井雅樂頭よりは、同藩士族に列し特別の資格を賜ひ、又加東郡の福岡新田と云ふ一箇村を除地として下賜せられて

兵庫縣人物史 男爵松尾臣善君

る、殊に日本外史或は玉ダスキ杯の國學書をも見て、自ら愛國の志しが勃然として起り、別に自分の榮達を圖るゝか、利益を獲やうと云ふやうな念慮は更になかつたが、國事多端の場合青年の身を以て無爲にして家に居るべき秋ではない、何とかして多少國事に竭して見たいと思つて、翁に對して、實は斯くくの次第であるから、身を挺して國事の爲めに盡して見たいからと、暇を請はれた所が、翁は今爾が家を出ては困ると言はれた、併し其時翁に實子が出来て幸ひ男兒であるから跡相續には差支なく、此幼兒の成長迄は都合によつては、男の實弟義之助氏(現今の健次翁)を以て更に第二の養子にするも可ならんと陳べられた、すると翁は直に承諾をして請ひを許され、翁は姫路藩に於ける佐幕黨でありしに拘はらず別に怒りもせられなかつたと云ふ風であつた。

翁は亦最も公共心に富んだ人で、姫路藩の爲めには八家の砲臺を築く資金を獻じ、其他同藩財務の爲めには色々力を竭し、殊に明治元年舊姫路藩は朝敵の名の下に正金拾五萬圓を罰金として朝廷に納付を命せられたが、此金額調達方を舊藩廳より兒島又右衛門氏と翁に仰せ付られた、現今と異り當時の正金拾五萬圓は、非常なる大金であつたが、熱誠なる翁は兒島氏と謀り之れを調達せられた、蓋し姫路藩の名分を全ふすると共に、本領の安帖することを得たるは全く翁等の功勞に依るのである、宜なり、舊姫路藩主は其功勞の爲め前に言つた如く福岡新田を下賜せられたのである。

又男も當時已に明治政府へ召出され、大阪在勤なりしを幸ひ右兩氏より依頼せられ、此金額を周旋せられたので、其節ふ風に行られたものであるから、自然正金の融通も利く復た利益も得て、恣くの如くにして領内の殖産を奨励し藩の財政に勤められたことが前後七年、其間侯の内密の用命も受けて厚く用ひられ、慶應三年侯に隨從して大阪に來たり、明治元年初めて朝廷へ召出され、大阪府裁判所係兼外國係を命せられた。(以來の経歴又は日本銀行のことは前に掲げたを以て爰に省く)

▲男爵の家庭

男は安政六年同族松尾五郎兵衛氏の女、秀子氏と結婚せられ、世にも珍しき金婚式は一昨年舉行せられた、卷頭に掲げた寫眞は、其際親族一同と撮影せられたものである、而して家庭に於ける男は、或時は嚴格に或時は和樂に、然かも決して禮儀格法を失するやうなことはない、是れ素より男の人格が然らしむる處ではあるが、又濫良にして質素且つ恭謙なる夫人の内助が大に與つて力がある、夫人は素封の家に生れ、淳朴なる田舎に純日本式の訓育を受けられた人であるから、婦人會とか舞踏會とか云ふ當世風の活動には或は不得手かも知れないが、祖先の祭祀一家の整理、子女の教育奴婢の待遇と云ふことについては、實に常人の及ぶことの能きない良夫人である。男は最も子福者で、四男七女がある、斯の如き圓滿なる家庭に生ひ立てる、長女虎子は醫學博士北里柴三郎氏に、次女芳子は外交官中川常次郎氏に、三女千代子は帝國生命保險社取締役北里斐男氏に、四女光子は興業銀行理事法學博士井上辰九郎氏に、五女静子は醫學博士柴山五郎氏に、六女知子は臺灣銀行理事法學士二宮基成氏に、養女まき

兵庫縣人物史 男爵松尾臣善君

舊姫路藩廳より男に對しては左の謝狀を贈られた。

當夏以來兒島又右衛門、松尾七兵衛を以て勝手方の儀に付及御相談候處、厚御周旋相成一廉御用辨相立、命天保山御同人數出張に就ても、種々御周旋に預り候段悉被存候、依之乍聊目錄の通り、被相賜候也。

戊辰八月

松尾 寅之助殿

(目錄五十條)

翁は、單に舊姫路藩の爲め而已ではなく、維新後森岡縣令の薦めによつて、蠶業奨励の爲めに桑樹の栽培を爲し、或は地方公共の爲めには、自ら率先して費を捐て、其他功績の見るべきもの甚だ多い。

●男爵維新以前の略歴

▲始めて伊達侯に謁見

男は前に述べた如く養家を辭してより専ら京阪の間に諸藩勤王の士と交つて居られたが、謂らく當時尊王佐幕又は開國攘夷杯と堂々と論じて居るが、何を爲るにも先き立つものは金である、畢竟實力なくして何事も不可能ではないかと、或時孫子司計の句や、徂徠の經濟書等を引いて大に論じられた然るに之れが英邁なる、伊達侯の耳に入つて、夫れは眞理である、大に面白いことを言ふと云ふので、初めて宗城公に謁見を許されたのが、今日の登龍門である、此れ即ち文久元年男が十九歳の時であつた、夫れより宇和藩の士族に列せられ同藩に屬して、重に國産の方に従ふこととなつた、そこで藩札を發行して、同地の物産たる、紙、木蠟、蠟と云ふやうな物を買ひ上げ、之れを大阪に輸送して正金にて販賣すると云

子(男の義弟の長女)は吉澤環氏に嫁して居られる、長男は即ち義夫氏で、次男は大阪商船會社の中根經三君、三男は三井物産會社の孟買支店の松尾武夫君、四男は松尾信夫君で目下醫科大學在學中であるが、已に三十餘人の令孫を擧げられ、子々孫々賑々榮赫、權々の觀を享け、家門の繁榮斯くの如く實に羨むべきである。

▲男は一面最も幸福の人である

男の事を處するや、誠心誠意少しも政略を用ゆることがなく、又私情を挟まず、慎重審議以て奥の奥迄窮した上でなければ手を下されぬ、而も姑息の弊もなければ亦コセツクと云ふ嫌ひもない、情に偏せず理に奔らず、圓滿にして諸般の指導施設に勤められる、其頭腦の明晰にして秩序の整然たることは、如上の経歴に徴して明かである。

要するに男が今日ある所以のものは、其誠實と熱心、而して堅忍奮勵、加ふるに天資の非凡なるものがあること、是れを十二歳にして一家の攝理に任せられたるに依つて見ても之れを知ることを得べく、亦卓抜なる手腕の人であること、推知し得ると共に、又一面に於ては最も幸福の人であること、名家に生れて名族に入り、名君に遇ふて空前の盛世に遭ふ、而も健康にして齡古稀に迫んで猶鏗鏘、既に金婚の式を擧げて一家相揃ふて健在、多くの子女は何れも聰明榮樂、全く世間の幸福は一門に歸したるの觀がある、思ふに樂只の君子、萬福の同まる處とは夫れ男の謂乎。



貴族院議員
東京火災保險株式會社長

男爵武井守正君

(四十三年十一月稿)

據傳、維新の志氣となり、結んで王權の大義となり、終つて世利民福の増進となる、而して親の此變遷の當つて辛酸困苦を嘗め、遂に其功を成し名を遂げて、聲譽を現在に擅にする者は武井男爵である。

男は姫路藩士にして、維新の際に於ける姫路藩は、諸種の關係上、佐幕黨として大義に背き名分を愆らんとせしむ、迫に其重臣に一派の人材あつて、克く補弼の任を盡し指導の良しきを得たる爲めに、辛じて名分を完ふすることを得たのである、而して其人材は誰ぞや曰く、河合惣兵衛同屏山を初め男の如きは即ち其一人である。

に叙せられ、國家の元老として推獎せらるべき人であつたらうに、惜むべし、佐幕黨の爲めに中途にして瘖れたるは、誠に悼惜に堪へざる次第である。

而して河合氏の如き維新の忠臣が、萬斛の怨を呑んで刑に伏したる志士の墳墓は姫路に在るも、誰か英魂を弔するものなく徒らに香花絶えて苦著く感慨の念禁する能はざるものがある之れを以て觀るも姫路人士の先人を祀り先輩を尊敬するの念慮に乏しきを證すべく、隨而先輩も亦後進の提擧に薄きを知るべきであらう。

著者は、せめて當時の志士を偲ぶべき微忱として、同士武井男の存生中に幾分の事實を聴き置くことの徒事ならざるを思ひ、男を本郷三組町の邸に訪問したのである。

▲男爵を訪問す

原六郎氏の邸宅は壯大にして、松尾男の邸は高雅、股野先

生の宅は瀟洒であつて、何れも其人格を表現して居る、而して武井男の邸宅は黒金の門構へ、人造石の高扉を以て繞らし何等の趣味も趣向もなく表面實利主義の如うではあるが、一度邸内に入れば却々乾燥無味ではなく、大廣間には富士山の大幅を掲げ、常信が百駒を描きし金屏風を廻らし、長押には一昨年表慶館に出陳して美術家を驚かしたる、唐時代の經箱が置いてある、男爵は世人の知る如く、蒔繪の蒐藏家で日本に於て男の右に出づるものは莫い、其蒐藏されて居る珍品佳物は五十組以上に達するやうであるが、近時世評の高きに從ひ歐米の美術家が觀覽を望むもの多く、之れを展覽せんが爲めに近く陳列所建設の計畫中である、以て男が實利以外の趣味を有して居られる事が解る。

播磨龍城氏の骨相學に依ると、男の如きは極めて智慧の分量に富める相恰を有して居られる、一見して謹厚篤實、而かも自然に具る權威があつて猛からず、話中對者をして恭敬の念を生せしめ、且つ一種の温た味を感じしむるものがある。

▲版籍奉還に關する一問題

男は少く精のある聲で明晰に語つて曰く、我が輩の事は別に書く程の事はないが、維新の際姫路藩が版籍奉還建議の半先者であること云ふ事を簡単に語らう。

當時を顧みれば維新の曙光既に發して王政古に復し、伏見鳥羽の一戦は遂に幕府の命數を絶ち、東北地方も亦平らぎ、中央集權の端緒漸く開けたれども列藩の諸侯が、猶其の封土を保ち各々國に割據して、朝廷の實權未だ全く牢固でない、此形勢にて永く轉じなかつたなれば、元弘、建武の轍を覆み

兵庫縣人物史 男爵武井守正君

維新の大業は功を一其に缺くといふ虞れがあつた、然るに幸にも明治二二年五月二十日に、薩長土肥の四藩が連署して土地人民共奉還すべく上書したので、列藩相繼で之に倣ひ、六月十七日其請を許されて、遂に封建制度は郡縣の古に復し、維新の鴻業全く成つた次第であるが、然るに姫路藩は此四藩の上表に先つて二箇月、明治元年十一月に諸侯の版籍を收めて、郡縣制度即ち廢藩置縣を建議したので、謂はば版籍奉還建議者の先である、其風采を詳しく述べ、之れが主唱者たる家老の河合屏山は、幼時養父河合守翁私立の仁壽山校に學んだ人で、當時頼山陽、松本奎堂、其他和漢の學者が同校に往來して居たから之に依て國事を談じ、常に王室の式教を慨き諸侯が土地人民を割據して朝廷は只だ虚器を擁するに過ぎぬとなし夙に之が恢復を圖るを以て任じて居た人で、養父守翁の隱居するに迫りて、家督を承け、家老職となり、文久二年大勢の迫るに及び京師に出て、吾々同志を指揮して居たが、藩の譴責を受け江戸に幽閉せられ明治元年に朝廷に召されて京都に入り、藩政の改革を命ぜられた、其時吾輩も藩の外交方を命ぜられ京都に居たが、或時屏山の云はれるには「今や王政古に復し、天下漸く平定に向はんとす、然れ共尚列藩の諸國に割據し、各自兵馬の權を掌握して實權は未だ朝廷に歸して居らぬ、此儘に推移せんか、何時謀反を企て、再び元弘建武の覆轍を見るやも計り難い、王政復古の實を擧げんに直に廢藩置縣を爲さざる可らず、從つて封土の奉還は最も急務とす、然れども薩長土の諸藩が、或は朝心を抱いて居るかも知れざれば之れを輕率に言出すことは出来ぬ、宜しく形勢を觀察して報導すべし」と云ふて屏山は姫路に引取られた。

開處で、當時近藤も史生外交係として京都に居つたので、二人共々列藩の動靜を觀ふて居つた、處が十月に至つて雄藩も亦細心なきことを確めたので、姫路に歸藩して、屏山に報告した、そこで屏山が藩主直之助公に説いて、藩儒菅野翁介に旨を含めて建議書起草せしめ、十一月初旬藩主の名を以て之を上書したのである、それから恰度十一月中旬余は行政官錄事に召出されて初めて明治政府の役人となつた。

然るに後藤藩議から容易ならざる建議であるから、更に趣意の詳細を申出でよと云ふ附箋で下げられた、そこで十二月に更に第二の建議書を出した處が、何事も沙汰がない、當時伊藤公は神戸に居られて、此事を聞いて非常に悦び、

諸議が愚圖々々として居るから態々京都に出掛けて、姫路の建議を何故に御許可にならぬかと喧しく當路に迫り、猶建白書も出されて居る、此建白書の原本は今尚岩倉家に存して居るさうであるが、伊藤公が建白の趣意は、姫路侯書を天朝に奉り自家の政權領土を擧げて奉還せんことを乞ふと、之を聞いて欣躍に堪へず書き出して、唯だ徳川幕府を倒した丈では諸侯自ら責を引ければ、諸侯は従に幕府の權威の己が上に出づるを恐むのみで、眞に王政復古を望むものではない、今や我國は海外諸國と並立して文明の政治を爲すには、兵馬の權を奉還せしめ全國の政治を統一せしむるならぬ、爰に於て姫路の處置最も急なるべし姫路には勅命を以て頗の通り許すべしと達し、姫路侯を公卿の列に加へ土地兵馬の權を奉還せんことを請ふの忠誠を嘉賞あらせらるゝ趣の勅語を賜るべしと云ふ様な堂々たる長文の議論である、之に徴して姫路が率先者たりしことが判るのである。

斯くて沙汰を待つて居る翌年正月二十日に薩長土肥の四藩が連署して奉還の建議が出る、他藩も亦之に倣ふて建議して許可になつた、然るに姫路藩には何の沙汰もない依て同月二十八日更に第三の伺書を出した、即ち昨冬來建言したると同様の趣旨を建議する諸藩もありと承る、右各藩の事を御採用になるなれば整藩にも同様の御沙汰を受けたとの意味であつた、處が頃日諸藩より建白の意味と相違して居るから御沙汰に及ばれぬとの附箋で返つて来た、併し別段違ふ處はないが滄桑するに四藩の朝廷へ御返し申す云ひ、姫路のは御引上げを願ひ度と云ふ丈の違ひである、开處で更めて二月十五日上書して六月十七日諸藩と共に御應許になつた次第である、之を見るに全く姫路藩の版籍奉還の建白は薩長土肥に先つこと二箇月、屏山の卓見は天下の形勢を一轉して四藩の上表を促すに至り、東北の平定に次いで、爲政家の胸程に幡まりと問題を解決したので、屏山の先見の明は、維新の鴻業を成就せしむるの基を拓いたと云ふても宜からうと思ふ。

而して斯かる勤王の志厚く、忠誠なる屏山の名が不幸にして没して居るのは全く藩閥の專横で、薩長肥土は勤王の魁である、是迄苦勞をして姫路の上表を



守正君

採用すると、佐幕黨の姫路藩に先鞭の名を濟さしめ、功を著はるゝと云ふ偏見から上表を留置して、其間に相談を纏めて出したものかも知れない、乍伊藤公に故伊藤公は偉かつた、公は此事を能く覺て居られて、先年吾輩に向つて封土奉還の建議は姫路が率先者であるが、當時直之助公は幼少である全體誰かの賛意であつたかと尋ねられたから以上の次第を話した處が、公は何んでも其建議書は餘程の美文であつたと記憶する、寫があれば見せて呉れよとのことで、種々詮議した處、先君のお手文庫の中に草案様のものがあつた、即ち之である(男は著者に示された)尙委しくは伊藤公の國家學會に於ける演舌や、此事に付ては三上博士が史學會で演舌して居るから見て貰つたら解る。云々

尙少しく附加して置きたいのは同志秋元兄弟のことで、兄が三郎兵衛、弟が正一郎、共に國學者で、兄は漢學の師範、弟は工學の師範役であつたが、弟は尙國學者で開書に依つて「早取丸」といふ船を造つて自ら船長となり、航海したことがあつた、其時の歌に
早取りの御船おるの朝汐に
願もみちてゆく心かな
と、それから其五丸、金貨丸を作つて、京都で病死したが、單に書籍而已に依て直に船を作つたと云ふ事は今から考へると却々才子であつたと思ふ、河合の返歌が
たへくの我玉の緒を付けて思ふ
晴れぬ夜ころの月やいかに
共に國事を議論したものである。

▲男其後の經歷

男は酒井家の家臣武井領八の次男で、天保十三年に生れ、兄正平氏は、維新後兵庫縣の稅務課長、後ち神戸市長で終つた人で、遺子が一男二女あつて、長女は郵船會社の加藤正義氏に次女は博士奥田義人氏に嫁し、一男逸之助氏は法科大學を出て、現に神戸電鐵に居られる。

男は幼少藩の好古堂に漢學を修め、秋元安民に皇典を學び後ち文學專業生として藩より遊學を命せられ、京都の宮原潛叟の門に入り、歸藩好古堂の授講を中付られ同時に河合惣兵衛の家塾に文武の學を兼修して居られた。

▲初めて正義黨に與みす

當時惣兵衛氏は藩内正義黨の首領で、大に尊王攘夷の説を唱へ文久二年藩主に建議して、秋元氏と共に京都に抵りて、各藩の有志と結託した、乃で男を初め其他の門下に命じて、名を遊學に託して京都に出で、各藩の志士と交を訂して大に主義の爲めに事を謀れとの指圖で、京都に出られたのが是れ即ち男が正義黨に參與しられた初めである。

然るに姫路の富豪紅屋又右衛門氏が、反對派の高須軍人を援けて同志の妨害をするに云ふので、河合傳十郎、江坂近藤氏と共に謀つて之れを殺した、其隙で藩命に依り幽閉せられ後ち許されたが他藩士と交することは嚴禁しられてあつた、けれども慷慨の心自ら禁せず、復亦名を遊學に託して京都に抵り、惣兵衛の寓居に居つて同志と共に事を議し惣兵衛の指圖で大和義舉の費用を調達したりして居られると、突然七郷落ちとなつた、乃で姫路に歸り同志を糾合して三條公等の密旨に依り大に事を謀らんとして居ると、藩命を以て西宮警備として派遣せられた、蓋し之れは藩が主として正義黨の分裂策であつた、此間平野國臣等が潜かに來たつて、生野義舉の事を告げ、姫路藩から出兵せられては困るから、之れを阻止して吳よと結託したさうで、故に同藩から生野へ出兵はしたが

交戦するには至らざりき、然るに男は藩から他藩士に交際して命令に背いた廉を以て再び幽閉せられて仕舞つた。

▲終に獄に下る

男の幽閉中元治元年に河合傳十郎等が、藩主に從ひ京都に滞在し、怎ふも藩論が姑息で志が行はれない、従つて憤慨に堪へないから、長州に往くと云ふ男も共に脱藩しやうとした處が、藩吏の爲めに其舉動を探知せられ、隣れ同志數十人は何れも藩獄に投じられ、遺憾ながら正義黨の經綸は茲に挫折して仕舞つたのである。

同年十一月悲むべし勤王の同志數十人は處斷せられ、河合惣兵衛、萩原虎六、江坂元之助、伊丹城源一郎、松下鐵馬、市川豊次の六人は死刑、河合傳十郎、江坂榮次郎は、斬首、男を初め近藤永田氏外三名は終身禁獄となつた。

▲出獄すれば天下の形勢既に一變

明治元年、廣澤兵助、岩下佐治右衛門、等が藩に迫つて強ひて放免せんことを求めたので、在監五年にして漸く釋放せられたが、出で、天下の形勢を觀れば、徳川氏は鳥羽伏見に破れ、東奔して藩主亦之れに従ひ、共に天譴を蒙つて江戸に在ると云ふ有様、依つて男は蹶起京都に至りて大に幹旋して俗論黨の處分を請ふて藩の歸嚮を一にし、先君は江戸に閉居せられて居るから、養子直之助公を擁して恭順を表し、木戸大久保の諸侯に縋つて、遂に一時賊名を蒙つて居つた姫路藩が本領の安堵と名分を完ふすることを得た、之れ全く河井屏

山を初め近藤翁と共に大に興つて力があるのである。

▲男が其後の経歴

明治元年十一月初めて行政官録事といふものになつて、翌二年東幸供奉の三條公に隨行して東京に往き、同年民政部官庶務司、民部省大録を拜命し、同年八月に白石縣權知事となり同四年平縣權令、同五年少外史として太政官に出仕し、次で權大外史となり、同七年内務少吏に、同年佐賀の亂鎮撫の爲めに大久保内務卿に隨行して、卿の命を受け九州に留まり、義勇隊軍資の整理を爲し、其後内務權大吏、内務權大書記官内務大書記官、農商務大書記官等に歴任し、十四年に山林局長に任せられ、十七年四月英國森林博覽會事務官長として英國へ出張して、英、獨、伊、佛、奧、匈等の各國を視察し十八年六月に歸朝して二十年非職となつた、二十一年十月鳥取縣知事となり、二十四年四月に非職、同年十二月貴族院議員に勅選され、同二十五年一月石川縣知事を拜命せしも赴任するに至らず之れを辭して實業界に投じ、其後明治銀行の創立



陸軍中將男爵 石本新六君

(明治四十三年十二月稿)

東京火災、帝國火災保險並に日本商業銀行を創立し、第五回勸業博覽會の審査部長、破産管財人、博覽會委員等其他の委員重役に擧げられ、現に貴族院議員錦鶏間伺候を奉じ、帝國東京、兩火災保險を経営して居られる。
男は氣品高尚、文雅に富み、和歌を能くし、幼時藩の秋元三郎兵衛並に大阪にては萩原氏に學び、現に本居豊顯翁に推敵を乞ひ、一日一首を詠するを以て日課の如くにして居られる、而も造詣淺からず詞藻豊富にして三唱するに足る。
要するに男の今日ある所以のものは、先輩の指導宜しきを得たるに因ること勿論であるが、又以て男が少々身を挺して國事に竭し、時勢の推移を洞察して、至誠一貫、努力奮勵の結果にして、如上の経歴は男の生涯を通じて國家に貢獻せる一斑を知るべく、明治四十一年九月二十三日特旨を以て男爵を授けられたのは、蓋し偶然ではない。
男に一男五女あり、男守成君は高等語學校に入りて、佛、伊語を修め今や海外留學中である、長女は理學士牧野鑑三氏に嫁して居られる。

我陸軍は多士濟々である、高才逸足の士雲の如く群がる中に於て、現に陸軍次官として帝國の軍政を司り、又次ぎの陸軍大臣として擬せられつゝあるものは陸軍中將男爵石本新六氏である。

昔者平氏に非る者は人に非る、而して今は長州の人間にあらずんば我陸軍に於て殆んど出世の出來ない時代である、況んや一國の軍政を掌握して之等幾多の俊才勇將を統轄するとは、到底企て得べき處ではない、然るに男爵石本氏は其身藩閥政府に何等因縁なき姫路出身一介の軍人として、遂に今日の地位を獲得したる而已ならず、陸軍大臣の後繼者として世に期待されつゝあるが如き、以て其非凡なる人物であることが解るであらう、勿論男は長州人ではないが長閑との縁因關係は甚だ淺からざるやうである、隨て世人は男の今日ある要するに長閑に歸化して彼等に迎合せるに因るものとす、然れども單に縁因や關係のみを以て其地位を得又之れを保つことが出來得るものとすれば、本尊の長州人は皆次官となり、大臣ともなることが出來るであらう、去れど幾多俊英もあれば、智者もあり、將た手腕家に富む長閑は勿論、多士濟々たる帝國陸軍中に於て、特に男一人が陸軍大臣の後繼者と目せられ、現に寺内陸相が朝鮮總督となつて以來、氏は次官として又事實上の陸相として以て我陸軍を統轄して居るのは、實際其器を證明するものである、故に彼の縁因や關係のみを以て輕々しく其人物を評するが如きは未だ人を見るの明なきものと謂ねばならぬ。

著者或日男を五番町の邸に訪問すると、時偶々男は病中に

て、日向りのよき一室に屏風を立て廻して褥中にあられた、激務の爲めか一箇月程以前より病氣となつて鎌倉に轉地療養し、マダ全快には至らないが公務上不止得歸邸せられて間もない時であつた、身體はよほど衰へて居られるが、霸氣と才氣は眉宇の間に充溢して居る、如何にも病癒に在るのが、モドカシさうに見わた。

▲男爵が病褥中の談話

男曰く兵庫縣下によき人物ありや、余輒ち思へて曰く、學者あり、才人あり、其他の人物少なからざるも唯だ慥むらくは氣骨の稜々たる人物に乏しき感あり、殊に學者は偉きが如くにして中には在外沒常識の士もなきに非ずと言へば、男は之を頷き、然り此迄日本の國民思想が幼稚であつたが爲めに自然學者を買ひかぶつたので、一時學士博士と言へば嫁に行く者も多かつたが、併し學者は其道には長けて居るが知らぬが實際俗物が多く、世の進むに従つて學士は既に箱が割けたが博士も又割け掛つて居る。

▲酒井家は富裕でない

夫より話頭を轉じて「君は一體姫路出身の者が地方後進の指導を仕ないごつ又酒井家が姫路の爲めにならぬと云ふけれども、マア老へて見賜へ、ソウ出來るものでない、何と言つても世話をとてうけのよいやうにと思へば金が要る、舊華族に金があると思つて居るのが抑々の間違ひで有る筈はない、夫れを説明するに前掲に維新の際に於ける封土承遺の時から談さなければならぬが、先づ華族の資産の重なるものは、其時に買つた公債である、當時の制定が毛利や島津は特別の關係で八公だけれども、普通三十萬石以上を俵持に、十萬石以上を伯府に、一萬石以上を子爵としたので、姫路は十五萬石と言つてゐたが實際は八萬石餘に過ぎなかつた、夫れを十分の一、十箇年分、計り八萬石を當時五年間の平均相場金で買つた、其相場が何んでも四割前後であつたから、四八三十二萬圓だらう、此れが酒井家の資産で最も他の藩には、此以外の資産もあつ

たらうが、中には出兵した藩もあるし、姫路は出兵はしなかつたが軍用金を徴せられたから、他に財産がある筈はない、此れ丈の財産で外に儲けをするでなし、其利息で遣て行くのだから、高が知れて居る、殊に時勢の進歩に伴ひ物は益々高くなる、金の利息は下がる、マゴクして居れば生活が出来なくなる、故に前途を觀望する時は伯爵の體面を維持するに却々困難で、安閑として居る譯には行かぬ事情もある、今度も邸内を電車が通るので地所を買取られる事になつた處が之は世襲財産にしてあるから、宮内省は地所の代りを入れなければ解除せない、此一時の振り替へにさへ、米令殿は困つて居る、恚んな風であるから到底姫路の世話杯は爲さん欲しても出来るものでない。

夫れから又舊華族の活動しないものは、舊領地へ歸住して地方の指導に任ずるのが自他の利益だと云ふ人もある、けれども、吾輩は之れも反對だ、なぜなら金のある人は兎も角、僅か三萬や五萬の世襲財産で、田舎へ歸つて見賜へ忽ち子供の教育にも困る、東京なれば自分の宅から電車でも通へるが、田舎から遊學すれば下宿代も要る、夫れから又東京に居れば、さほど體面も重んじる必要はないが、田舎に居つて昔の家來が意氣揚々として居るのに、殿様が錢湯屋へ行つたり、老飯を喰つたりしては體面が保てるものでない、此點より吾輩は舊華族の在京居住論を主張する。

ナニ我輩の經歷？夫れは次回にするが、又熊谷の兄にでも聞いて呉れ、其處に頼り掛けてあらう、あれは余の父が乙卯十月二日の大地震に變つた、余が二歳の時であるが、吉田松蔭先生と親交であつたから、先生が災後に書いて贈られたものである、夫れを語るさ水くなるから又次回に談さう。

男は著者の主張に一々反對された、反覆したい事もあつたが、餘り長座は病中の男に迷惑であらうと思ひ辭して歸つた而して男が病癒にあるの身を以て懇に引見せられたのは著者が最も感謝する處である。ア、道がに男は帝國の陸軍を統轄して居られる丈けに、貫目もあり而して又人に接して牆壁もなく街氣もなく、思ふ處は淡白に言ひ放つて憚らざる所他迄も軍人氣質である、又氣概もあり、雅量もあり、未來の陸相

として喝望さるゝも偶然でないと思つた、而して其個人としては洵に心易く欣慕すべき人である、殊に酒井家の辯明を數理の點から論じられる處は、男が武骨一偏の將軍でなく、頭腦の明晰な、社會の條理に委しく軍政的の智將であることが察しられる。

去れど男は決して暴虎馮河の勇を揮つて三軍を叱咤し、天下を席捲する底の豪傑ではない、然れども軍政的の智略才幹に至つては確かに當今の一異材にして、缺くべからざる國家有用の材である、同じ陸軍の中にも日清日露の大戦に他の將卒の犠牲によつて、高勳榮爵に浴し、所謂一將功成萬骨枯と云ふ功勞者は多いが、男の如きは緩急を問はず多年要部の激職に執筆して、遂に今日に迫んだ人で、其艱難苦勞の程も察しられると共に、我陸軍軍政上の一大功勞者として尊敬し、又前途に嚆望すべき人である。

▲男の略歴

男の先考名は延、字は龜齡、李蹊と號し、百五十石を食む學徳共に高く、少壯擢でられて姫路藩の年寄役となり三百石に加増せらる、總持寺管長奕堂禪師に私淑し、其識見一世に秀でたりしが、乙卯十月二日の大地震に二男一女と共に遭難して歿す、交友吉田松蔭先生甚だ之を愛措して、一編の悼辭を贈る、今尙男の家に藏して扁額となす、六男四女あり長は八左衛門(後に八咫)次を綱(陸軍中佐を以て歿す)次は姫路の熊谷黨郎翁にして、男は即ち其次に當る。

男は東京に生れ、維新前姫路に歸り、兄八咫氏の許に養は

れて藩校に學び、明治二年藩の貢進生として古市博士と共に東京に出で佛學を修め、後士官學校に入り拔擢せられて佛國に留學を命せられ、同國の砲工學校に入り在學三年、歸來砲臺建築に従事し本邦最要唯一の東京灣砲臺の如きは實に男と落合將軍の設計なりと云ふ、亞いで築城法取調の爲め伊太利



衆議院副議長

肥塚龍君

(明治四十三年十二月稿)

兵庫縣下政で人材に乏しからず、然かも就中肥塚龍君の如きは殊に超越したる人物である、氏は富貴を欲せず官爵を願はず、維新創草の際に當り、官尊民卑の陋風旺んる時代に於て、夙に民權を尊重し自由を主張して、操觚者としては筆陣堂々一世を風靡し侃々諤々以て代議政治を絶叫し、藩閥に抗しては大隈伯等と共に改進黨を組織して民權の擁護に努め爲めに政府の嫌疑に觸るゝこと前後三十年、其間終始身を逆境に處して未だ倦怠の色なく、志操益々固く意氣愈々壯、多年在野民黨の中堅となりて憲政發達の爲に挺身努力しつゝあるが如き、曾に我兵庫縣下の人物界を飾る而已ならず實に明

に派遣せられて視察研究する事二箇年、歸朝後直に陸軍省に入り爾來常に中央の要衝に立つて軍政に執筆せるは人の知る處、累進して今日に至り、三十七八年の功に依り特旨を以て華族に列し男爵を授けらる。

治の憲政史を飾るべき人物である、而して尙も氏に多とする所のものは、氏が公私多端の身を以て常に郷閭の事に腐心して怠らざると同時に、後進者の指導扶掖に努められる事である、是れ到底他に見るべからざる氏の美點にして、即ち又氏が崇高なる人格の一端を窺ひ得べく、同時に其人物に一層の光彩を添ゆるものである、時は昨秋偶々氏の恩誼を受けたる西播出身の在京青年が相會して氏の爲めに一宴を開催するに際し、著者も亦悦んで之れに陪したが、會する者五十餘名、何れも皆氏の指導扶掖に浴しつゝある人のみであつた、處が此間の關係は全然親子の如く慈愛を以て充され、初めて斯る

美譽に會するを得たる余は實に感慨無量であつたと共に誠に世に誇るべきの美譚として欣悦の情に堪へざるものがあつた其時會せる青年一同の爲めにもがなど、余の請へるに任せて席上語られたる氏が經歷の梗概は確に明治奮闘史の一頁を飾るべきものである。

▲氏の經歷談

曰く、余は掛保郡中島村の一農家に生れたものであるが、幼少の時から頻りに學問をして見たいと念ふたけれど、當時は別段學ぶべき學校が無く、幸ひ親族の中に相當の漢學者があつたので、之に就て先づ四書五經と云ふ様なものを教へられた、處が綱干の大覺寺の和尚が却々學者であるを聞いたので、此寺へ小僧となつて教へを受けて見たが殊々教へても呉れぬ、實際嗜程偉い坊様でもない様に思ふたので、何處か他へ行って學ばねばならぬと思つたけれど、素より家から學費を買ふことは出来ぬ、其時分は寺の坊様は皆學者であると思ふて居たので、又寺は慈善で人を養ふこともするから、一所お寺の居候になつて學問を仕擧ぎ、开度で大覺寺の和尚に紹介状を買ひ京都の永觀堂に小僧となつて住込んだのが恰度十四歳の時であつた、永觀堂では先づ北野の草庵泰然と加茂の神官山本など、云ふ儲者より漢學を授けられて居たが、後ち故あつて永觀堂を出て、更に高倉五條下の四念寺に入込んで、山田翠山と云ふ人に詩を學び、東寺の傍の吉條院に入つて忙山先生に就て漢學を修め、東圓師の門では専ら天台の學問を研修したのである、併とお寺は唯だ修業の踏臺にした迄のことで、決して坊主になる氣ではなかつたから、主として漢學を修習することに重きを置いたのであつた。

然るに當時世は漸次開化になつて來たので、最早漢學のみの時代ではない、須らく西洋の學問をせなければならぬことを悟り、是非東京に出て洋學を學ばんと思ひ、種々工面をして旅費を調へ、明治五年に初めて東京に出たのであるサテ東京へ出て見たが懐中に錢はなし、差詰め食ふことも出来ぬので困つて居たが、幸ひ京都の西山派の本山光明寺の大和尚が芝の中教院に居られたので其許へ行って復又居候となつた、所が面白いことには當時芝山内光照院の住職で俱

せしが、忽ち瓦解に逢ふて世人の嚮望を全うするに至らなかつたのは甚だ遺憾の極みであつた、今や衆議院副議長として重きを爲して居られるが、未だ大に志を伸ぶるの時機に達せず、終始逆境に在りて苦節を全うし、一念國家國民の爲め、將又憲政發達の爲めに盡瘁されつゝあるのは、洵に尊崇すべき人物である。

惟ふに氏をして之れを經濟界の方面に起たしめたならば、必ずや百萬の富を成したであらう、若し又學術界の方面に起たしめたならば必ずや第一流の學者となつたであらう、然れ共氏は政治を以て最も崇高なる事業となし一身の福利を顧みずして、政治生活に一貫して國事に奔命し、立法に參劃して憲政の發達に貢獻せる偉大なる其功績に至つては、永く没却することはできぬ。



兵庫縣人物史 藤井茂太君

陸軍野戰砲兵監 陸軍中將 藤井茂太君

(明治四十三年十二月稿)

舍論の大家として名高い人が毎日遊びに來て大變に氣煩を吐き、人間から御光が映すとか、空中を跳けるとか、俱皆一流の説を解へて如何にも氣障な坊主であつた、そこで余が師匠の許を得て其坊主と大議論を遣つたことがある、抑々俱舎と云ふのは現今印度地方で唱へて居る佛教の初門で即ち小乗の教である、蓋し未だ佛教の眞髓を窮めぬ教であつて、大乘の所謂眞如實相、花は紅、柳は綠といふ説から論じたら取るに足らぬもので、決して物質的に斯様な奇異幻影を教へるのが佛教の本意でない、佛教を亡ぼすものは大乘を窮めざる小乗の教である云ふて大に遣り込めたことがある、當時同窓の小僧で現今美濃の光龍寺の住職が今に其時の光景を話して笑はせることがある。

夫れから小石川の同仁舎に英學を修めて居たが、恰かも電信學校で生徒を募集し同校に入るものは官費で英語英學を學ばせるといふのであつたから、之れを幸に同校に入學して無事に卒業したが、其時分偶々大内實徳氏が「あけぼの」新聞を始めたので面白いと感じたから編輯に従事した、之れが抑も新聞生活に進入つた最初である、處が官費で電信學校を卒業しながら他の業務に従事するのは不都合であるといふので警察へ抽引せられたが、幸に寛大の處置によつて赦され其後各新聞に執筆し、懇くて私は筆戰論争の間に半生を終つたのである、其間明治十五年頃より十七八年頃は新聞條例と集會政社法の拘束で、身は探偵などに附廻され、實に言論は壓迫を受けて悲憤悲壯なる苦しみもしたやうな次第であるが、其間格別何等功績もなかつたけれど、常に藩閥政府に拮抗して言論の自由を絶叫して居つたが、大隈伯の内閣たるに逢ひて、遂に之が改正に努めたのは些少の貢獻があつたかと思はれる、其後は明治二十三年議會の開設以來芝區より選出されたこと一回、其他は兵庫縣より選出されて、今日尙議席に列して居るが、常に道徳にありて選舉者諸君の勢に酬ゆることの擧ぎを遺憾として居る次第である。云々

▲氏の夫人

氏の夫人は貞淑の譽れ高く、氏が未だ江湖に放浪せるの時代より多年の逆境に處して内助至らざるなく、殊に吾人が感謝する處のものは、常に縣下の書生杯が氏の門を叩くものあれば、夫人は之れを迎へて、保護親切至らざるなく、恰も自分の親族に於けるが如きものあるは、一は良人の意思を體するにも因るであらうが、又婦人の美德たる同情心に富んで居られる結果である、隨て其家庭は和氣満々として如何にも奥床しく見ゆるのは、以て淑徳高き夫人を想像し得べきである。

謝に堪へなかつた。

氏は常に憲政の擁護を以て任ずると共に、帝都に在りては市會議員、市參事會員として市政の革新に努力し、嘗て隈板内閣の時、特に東京府知事となつて帝都の大革新を圖らんと

黨以來苦節を全うして終始一貫せるものは、犬養氏と氏の外に僅か二三を數ふるのみである、以て政治家の本領たる主義節操の人たるを知るべく、吾人が愛國の志士として推稱する所以も亦爰にあるのである、加ふるに文藻あり筆を揮へば筆陣堂々、而して其三寸の舌端は又能く一世を風靡するに足る氏の如きは眞に政界の一偉材である。

誰れか言ふ兵庫縣下に武人なしと、築城典型の著者當年五
陵閣の驍將、而して又日清戰爭の發頭人として、雄名一世を
掩へる大鳥勇爵既に老いたり雖も、新たに石本勇を出し、
又藤井茂太、光五郎氏の兄弟を出す、而して石本氏の軍政上
に於ける、藤井兩氏の一時は陸軍に一時は海軍に、孰れも軍界の
重鎮として囑望されつゝあり。

兵庫縣下武人無しと謂はんや。
中將藤井茂太氏は博覽強記、語は數箇國に通じ、參謀次長
中將福島安正君と共に、本邦に於ける二大戦術家と稱せらる
實に我陸軍の雙璧たり。

氏嘗て獨逸に留學して朝歸するや、偶々我陸軍の恩師メツ
ケル將軍の歸國に追ひ、乃ち其任を踵ぐ、故に人呼んで東洋
のメツケルと云ふ、往年大演習に當り御前披露に指定せらる
る者は少將以上の先例なりしに拘らず、當時一大佐たる身を
以て地理の進講を仰付られ、破格の光榮に浴したる者も亦實
に氏なり、而して獨逸公使館付武官としては其英名を振ひ、
歸朝後陸軍大學校長となり、日露戰役に際しては黒木軍の參
謀長として參謀悉く機宜に適して空前の大捷を博し、黒木軍
の威名は以て敵將黑鳩公の心膽を寒からしめ、又幾十百萬の
露軍を戰慄せしめたる所以のもの、全く參謀藤井氏の功多き
に歸せずんばあるべからず、然るに戰後砲工學校校長となり、
更に又東京海軍要塞司令官に補せらるゝに及び、人或は之を以
て左遷されたるものと爲し、氏の失勢を揣摩して憤慨する者
なきにあらざりき、勿論陸軍に於ける長閣の跋扈は薩の海軍
に於けるが如く、殆んど陸軍を我物顔して横暴專恣に至らざる

莫く、故に身苟しくも長閣の直系なるか、否らざれば其縁因
を有する者に非らずんば、多くは英才を抱いて不遇にあるを
常とす、而して今藤井中將を見る、氏は固より何等の關係な
く、強ひて求むれば寧ろ薩派の關係深く、去れば戰後砲工學
校長となり、東京海軍要塞司令官に補せらるゝや、氏の地位と
境遇とに對して世間同情を寄するもの多かりしも亦偶然なら
ずと謂ふべし、然れ共砲工學校は砲工兵科將校に對して戰術
を攻究せしむる所、而して日露戰役に於ける經驗は我砲工隊
の威力と戰術に尙間然する所あるを發見し、乃ち之を革新せ
んと欲せば氏の力に俟たざるべからざるものあり、茲に於て
か氏をして此要職に當らしめ、以て刷新改革の實を全うした
る所以、又東京海軍は東都を扼せる樞要の地帯、一等要塞地と
して從來比較的人材を拔擢して之れに當らしめたる所、故に
氏の地位は世人の想像せるが如き決して失意の境遇には非ら
ざりしなり、果して四十三年の大更迭に際しては野戰砲兵監
として中央の要職に就きぬ、蓋し野戰砲兵監は工兵、騎兵、
重砲、輜重、兵監と共に五兵監として我陸軍の精華と稱せら
れ、其職に當るものは才識兼備の俊傑を以て擬せらる、亦以
て氏が如何に非凡の高材たるやを知るべきなり。

著者は中將の轉補を聞きて後三日、新宿大番町の邸を訪
ひ其轡駭に接しぬ、中將は黒紋付の羽織に謹嚴なる態度、辭
令の謙遜にして淳朴温和、些の街氣なく、全然田舎の一蒼翁
の如く、是が千軍を叱咤する豪傑とは認め難き重厚の君子人
なり、蓋し古來の豪傑皆斯の如くならざるは莫し。

▲中將の談話

又次に申して置きたいのは播州の青年はさうも小成に安んじて不可ぬ、大學
でも出るさ早や立派な人間に成つた様に自負して勉強せぬ、却や成振りが
る氣味がある、恣んな事では到底大人物にはなれぬ、吾輩などは未だ嘗て遊學
に往つたこともなく、東京に四十年計りも居るが未だ花見にも往つたことしな
い、人は日光を見れば日本の美術を語れぬと云ふが、余は側を通ることがあ
つても、未だ日光に往つた事がない、ナンでも人間は死ぬる迄活動せればなら
ぬ、而して人は習慣と規律が第一義である、吾輩も折々郷里の青年を連れ來つ
て世話をして見るが、最初軍隊的に規律を正して仕込ふと思ふと、何彼と虚を
構へて歸つて仕舞ふ、金の如きは決して送ることはならぬと親に云ふても送つ
て來る、終には親から小言を云ふて寄越すと云ふ風に莫迦氣たこと塞に困るに
云々

▲氏の經歷

中將は徐ろに語つて曰く「成程我々の祖先なり、先輩なりの事蹟を蒐
輯して之が散逸を防ぐと共に、兵庫縣の土地人物を紹介して縣下後進の理想を
高め團結を圖り、以て一勢力を培ひ、之を以て後進者の教訓に資し、且つ先輩
をして地方後進の啓蒙に努めしむるの美風を馴致せしめんとするの趣旨は、雙
手を舉げて賛成すると同時に又君の篤志に對しても感心する所である、是迄も
新聞なり雜誌なりが能く話をせよと、經歷を語れと云ふやうな事を言つて來
るが、吾輩は未だ話した事がない、蓋し彼等は單に人を煽動して虚榮を増長せ
しむる様な事計りを道るのである、然るに君の編纂は主張があるから面白い、
ドーも縣下の先輩或は資産家と云ふ様な人が、一向地方青年の指導といふこと
に腐心せぬ様であるが、何處でも同じであらうと思ふが、陸軍などでは殊に
先輩の指導と、後進の推戴とが相俟つて始めて仕事が可能である、然るに個々
別々になつて聯絡がなければ、却々困難で且つ骨が折れる、之れ地方勢力の必
要な所以である、而して兵庫縣は君の言はるゝ如く先輩に指導者もなき而已な
らず、亦地方一班の人が妙に卑劣な考へを以つて居る、例へば人が金儲けでも
するが或は榮達でもするを之を避へ之を厭ふのが人情である、然るに反つて是
を嫉むと云ふ甚だ悪い弊風がある、要するに之が團結心に乏しい一因であらう
と思はれる、且つ又地方の人が自ら地方を輕んずること甚しいやうである、
彼の義士大石氏の如きは實に曠世の大偉人にして世が文明に趨くに隨つて其の
偉大なる人物が益々發揮せられ、我々の祖先としては最も誇るべき人である、
而も縣下の人はその程に尊敬しない様である、兎に角地方の理想を作るには其
地の先人先輩の好事實を推奨すると共に、亦其古蹟や美術と云ふものを勉めて
保護しなければならぬ、先般も一寸公用で姫路に行つたが、我々の天下に誇る
べき彼の白鷲城が修繕せられて居るのを見て快感に堪へなかつた、聞く處に依
るに未だ完全に修繕も出来ない事であるが、斯るものは千古の紀念物として
其毀損朽廢を防がんには、矢張り其土地で保存の方法を講ずるの義務がある
若しも姫路市から白鷲城を除けば歴史的の紀念物として残る處無一物となる計
りでなく、又彼は姫路の一大美觀である。

▲縣下の青年に告ぐ

兵庫縣人物史 藤井茂太君

氏は萬延元年九月福本藩に生れ、幼少藩校に漢學を修む、
當時の先生は即ち同藩士の淺田貞次郎翁也、翁の談に依れば
當時氏は雪風牀雨一日として缺席したることなく、必ず毎朝
未明に提灯を携へ學校に來りて開門を待つを例とし、誠に感
心なる少年なりしと云へり、諺に梅樹は二葉とは夫れ氏の如
きを云ふ歟、其後氏の令兄義親氏が(義親氏は藩の選抜にて
大阪の青年舎に學び、後陸軍に入りしが明治二十年少佐に累
進して病歿せられたり)東京に在るを以て年始めて十四、父
義柄氏に伴はれて上京し、小石川の同仁舎及び猿樂町の順天
叫合舎等に學びつゝありしが、明治七年陸軍幼年學校に入學
せり、明治九年更に士官學校に入り、十二年陸軍少尉に任せ
られ、而して十六年陸軍大學に入り、十九年卒業して直に參
謀本部附となり大學教官を兼任し、二十三年拔擢せられて獨
逸に留學し、二十六年冬歸朝するや再び大學校教官となり、

二十七年日清戦争に際しては陸軍少佐として第二軍の參謀となり、翌二十八年凱旋するや再び大學教官に任せられ、三十年澳匈國公使館付武官となり、同年十一月大佐に昇進し、三十三年冬歸朝するや又々大學教頭に榮轉し、三十五年陸軍少將に累進して大學校長となり、三十七年日露戦端を開くや、輒ち第一軍參謀長として出征し、翌三十八年十二月凱旋、殊功により功二級金鷄勳章を賜ふ、翌年二月には陸軍砲工學校長となり、四十二年一月更に東京灣要塞司令官に轉補せられ同年八月陸軍中將に陞任し、四十三年十二月野砲兵監に轉補せられて現に其職に在り。

氏は如此常に中央の要衝に在り、且つ終始陸軍教育に貢獻して其功多大なるものと共に、出で、は三軍を叱咤し機略縱横、其學殖の深きは勿論、識見高く人格の高潔なる他に



海軍省艦政本部第四部長
海軍機關少將
藤井光五郎君

山來華奢にして銜耀、所謂「風雅雄」なる京阪の風潮に感染したる兵庫縣は、只管文弱の弊に陥り猿智恵を弄する小才子

共に陸海軍の逸材たる藤井兄弟を出したるは、又以て奇と云ふべく吾人は聊か人意を強うするに足る。

令兄茂太君現に野戰砲兵監陸軍中將として偉名あり、令弟光五郎君は海軍界に於ける少壯有爲の將官として、今や艦政部長の要職に在り寥々たる縣下出身の海軍軍人中の一異彩である。

氏は性沈毅にして夙に大志あり、嘗て姫路中學に在るや當時の同窓三上博士、小泉又一氏等と共に成功を誓ひ、近畿中國に海事思想の振はざるを慨し、四面環海の島帝國を如何んせんと、自ら奮て明治十六年海軍機關學校に入り、二十年業を卒へ翌年小機關士に任せられたりしが、如何にもして海外に留學して大成を期せんとするも其選に入らず、自費留學に決して資を淺田貞次郎翁に謀りたることありしが、折柄佛國にて製造の軍艦嚴島回航委員を命ぜられ、二十四年同國に航し無事回航して翌年歸朝、偉功を以て海軍大機關士に任せられ、日清戦役に際しては軍艦扶桑に搭乗出征して勳功あり功五級金鷄勳章を賜る、爰に於て氏が非凡なる手腕は當局の認識する處となり、幾何もなく擡擢せられて海外留學を命ぜられ漸く積日の本懐を達することが出来た、而して二十九年三月英國グラスゴー大學に入り在學中三十一年海軍機關少監に任せられ、熱心勉學の結果は三十二年三月 Member of the Institution of Engineers and Shipbuilders of Scotland に、同年六月 Member of the Institution of Naval Architects に、三十三年二月 Associate Member of the Institution of Civil Engineers に、同年三月 Member of the Institution of Mechanical Engineers に推薦

兵庫縣人物史 藤井光五郎君

多く匹儔を見ざる所、吾人は播州の地に氏の如き好將軍を出したるを洵に慶祝せんばあらず。

氏は天資英邁、頭腦明晰、加ふるに堅忍不拔にして奮闘の性格は遂に今日あるを致したる所以にして固より偶然にあらざる也、而も人ど爲り温厚にして沈毅、親しむべく然かも狎るべからざるの權威を有し、而して常に義士大石良雄を私淑敬慕して措かざるが如きは以て其人物の一端を窺ひ得べく徒らに自己の榮達名利に汲々たる世の所謂才子的の人物に非らずして、膽略あり、雅量あり、其器は以て將に將たるべく名利の外に超然として飽く迄死生國家に任せんとするに至つては、所謂英雄にして君子の資を兼ねるもの、眞に武人の典型なりと謂つべし。

に多く豪宕不羈の尙武氣象は一向に振はない、兎角生命惜しや金欲しや、酒と女には猶更目を細くするてふ播州の地に、

せられ、六十餘名の卒業者中、第二位を以て優等の成績を挙げ、世界の軍人をして驚倒せしめ、氏をして其名を天下になさしむると共に、日本海軍の一大名譽であつた、三十三年七月歸朝直に海軍大學校教官兼艦政本部員並に教育本部員に補せられ、三十四年吳海軍造船廠造機科主幹に補せられ機關中監に任せられた、三十六年横須賀海軍工廠造機部員兼機關學校教官大學校教官に補せられ、三十七年日露戦争の起らんとするや造船監督官として秘密の任務を帯びて英國に出張仰付られ、三十八年機關大監に任せられ四十一年二月歸朝、直に横須賀海軍工廠造機部長に補せられ、今回の海軍擴張計畫に付更らに四十三年五月英國に派遣せられ、同十月米國を経て歸朝、同十二月海軍機關少將に進み艦政本部第四部長として海軍省に轉じられた。

著者は轉任後數日氏を海軍省に訪ふ、一見堅忍不拔の象氣は眉宇の間に表はれ、霸氣充溢して而も海軍一流の亂暴なる風姿はなく、又恭敬にして蘊蓄の深きを窺しむ、著者は「縣下は海事思想に乏しく、何か青年の爲めに海事思想を鼓吹すべし、御咄を承りたい」と請ひしに氏は莊重なる口調を以て語るらく。

▲氏の海事談

海軍の事に就き何の話をせよとの事ですが、唯思ひついた儘を一つ二つ述べて見まじやう、二十七八年戦役頃迄は我海軍も微々たるもので之に對する國民の態度も亦頗る冷淡であつた。黄海戦争の後東京の某新聞に海軍の畫を出したが其中に軍艦から水雷艇を打ち出して居るのがあつた是は魚形水雷艇と水雷艇を間違へたので随分痛罵されたが海軍思想の幼稚であつた一端を窺ふことが

出来ると思ふ。日露戦争の頃には流石に一般海軍に関する知識も進歩して荷し新聞を読む程の人は機械水雷の危険や無線電信の效能位を知らぬものは無いやうになつた。併し今日でも我國民の海軍に對する注意と興味とは遙かに英吉利や獨逸に劣つて居るやうに思はれる。茲に一つの例を擧げて見ると、英吉利に海軍協會(The Navy League)なるものがある其目的はさうか云ふに英國内地に於る製造品の原料並びに人民日常の糧食の大部分は皆海路により輸入せらるゝのであつて海上貿易の消長は國運を左右するのみならず實に國民の死活問題であるからさうしても完全に之を保護せねばならぬ其れには優秀なる海軍力が必要である。併し斯の如き國家の重大問題を當局者任せにして我不關焉とすまじ込んで居る譯にはゆかぬ。民間に於ても海軍の後援たるべき團體を設けて飽迄も海權を擁護し他國から非の輕重を問はれぬやうにしなければならぬと云ふ趣意で創立せられたのである。同會の役員は何れも知名の士で會員には老若男女を問はずあらゆる階級の人々を網羅し時々講話幻燈等を催はし出版物を頒行し或は造船所の見物軍艦の拜觀等を奨励して全體に海軍思想を鼓吹し又海軍問題に就ては爲政者を警醒するに勉め其言議は常に輿論を指導する程の勢力を持つて居る。

獨逸の海軍協會(Flotillenverein)は尙一層盛んなもので日露戦争活動をして居る。獨逸海軍が近時驚くべき勢を以て發展したのも全國海軍協會が大に與つて力あるのだ。我日本に於ても斯の如き團體の設立を見る程度まで一般海軍思想を發達せしめたいものだ。

日本は英國のやうに世界の各方面に領土を持つてゐないが本州の各島嶼並びに臺灣朝鮮滿洲樺太相互間の交通は船舶によらねばならぬのであるから如何なる場合に於ても此等各地の聯絡を確保せんが爲には海軍力の必要なる事勿論である。又一面より見れば數年の後には巴拿馬運河も開通し西比利亞鐵道の複線も出來上る事なれば世界の競争場裡に立たうとするには適宜に海軍力を擴張せねばならぬ。然るに列國製艦の方針は巨艦巨砲主義に向つて猛進し二三年前迄列國海軍の標準艦たりし「ドレッドノート」型も今日では第二流に落ちんとし現に製造中の軍艦は二萬五千噸乃至三萬噸の如き尨大なるもので之に裝する大砲は口径十二吋乃至十四吋と云ふやうな驚くべき威力のものになり速力も之に伴つて向上すると云ふ有様であつて尙今後ドコ迄進歩するか分らぬ。其れでコン

な大きな船を我國にて製造し總ての點に於て歐米各國に遜らぬやうにするには技術上充分の研究を送け多大の經驗を積み又之と相俟て各種の工業を發達せしむるの外は無い。

終りに臨んで兵庫縣の青年諸君に一言したい。我兵庫縣は南北に海を控へ五港の一たる神戸を有し又四面環海の淡路を含み海洋とは縁の深い處であるにも拘らず一最も私は播州の山の中で生れたが古來海上で名を揚げた人は天竺徳兵衛位のもので今でも海洋に関する業務に従事し若くは工業界に出身しやうと云ふ人は割合に少ないやうに思はれる。最も處世の途は種々雑多で如何なる方面に向ふも餘々の勝手ではあるが海軍に入り三萬噸の大艦を操縦し又商船に乗り世界を股にかけて若くは海上の浮城とも云ふべき此等の船を製造する技術家となることもまた人生の一快事であらうと考へる。云々

兄中將の暢達は寧ろ堅忍なる學殖の修養大に與つて力があるが、氏は修養も深いけれども眞に天稟の英才である、春秋尙遙かに今後に於ける氏が發展活躍の偉大なるものあるを疑はず。



貴族院議員
工學博士 古市公威君

(明治四十三年十二月稿)

本邦に於ける工業界のオーストリチーとして國運の開發に貢獻少なからざる古市公威君は姫路藩士古市藤十郎(琢郎)又は孝とも云ふ)氏の長男にて安政元年閏七月十二日江戸蠣殼町の邸に呱呱の聲を擧げられた、元來同家は厩橋時代より酒井家に隨從して氏の祖父藤之進氏は同藩の元締役となり、上府の臣であつたが父藤十郎氏が農兵組織の爲めに姫路に在りしを以て氏も亦幼少姫路に移り、藩校考古堂に文武の教育を受け、殊に大師流の弓術を學びて先代熊谷氏と共に失申しを申付られ、其後十二三歳の頃石本男と共に江戸に出で、藩校に入り、次いで父の先輩たる西洋文學者柳川春三氏の紹介を以て辻新次氏に就いて佛學を學び、又開成學校の創設と共に入りて同校の生徒となつて居られたが、時維新の事變に際して江戸詰めの士族が何れも歸國することとなりしを以て、氏も亦方向を定めんが爲めに一旦姫路に引取られ、間もなく藩の

兵庫縣人物史 工學博士古市公威君

貢進生として石本男と共に選拔せられて開成第一中學に入り之れより秩序的に佛學を學びぬ、折柄文部少輔九鬼氏の海外留學生處分のことあり、氏は乃ち明治八年九鬼氏の改革後に於ける第一回の留學生として佛國留學を命ぜられ、エコールモンジュに入學して、エコールサントラルの豫備科を修め、翌年エコールサントラルに進み、同大學を卒へてエンジュ、ニウル、アール、エ、マニフ、アクチュールの學位を受け、更に巴里大學に入り卒業して、リッサンシユ、エス、シャンヌの學位を授けられ、明治十三年歸朝と共に直に内務省に入り、翌年大學理學部の講師を兼ね、其後内務省御用係技師並に工科大学教授となり、同十九年工科大学長に任せられ、二十年内務省土木局長に轉じ、二十一年工學博士の學位を授けられ、二十二年山縣内務大臣に隨行して歐洲に至り二十三年歸朝後直に土木技師となり、同年貴族院議員に勅選せられ、三十一

年遞信次官となりて、三十四年辭職し、後ち又三十六年末松本莊一郎氏の後を承けて鐵道作業局長となり、同年京釜鐵道總裁に擧げられ、勅旨を以て帝國大學名譽教授を仰付られ、累進して正四位勳一等に叙せらる、又元韓國鐵道監理局長官となり、四十一年辭職其功によつて元韓國皇帝より大勲章一等を賜り、四十二年更に東亞興業會社*



昨年七月歐米に至り同十二月朝歸せられた。氏が本邦工業界の泰斗として既に今日迄土木工藝に貢獻せること枚擧に遑もないが、就中信濃川の改修は其心血を盡ける一大紀念物であらう、蓋し斯界の學識經驗の廣汎多様なこと吾國の學者中氏に比肩すべきものなく、而も多年斯界の耆宿として扶植したる勢力の甚大なる尙も土木工學の肩書を有するものにして常に氏の膝下に跪かぬものはない位である、彼の暴慢なる後藤巒符でさへ氏に對しては慥に一敵國の觀がある、而して氏は亦行政上に非凡の手腕を有して居られるが、若し鐵道院總裁として全權を與へ氏の自由に措置を施さしめたならば庶幾くは我國の鐵道政策が爲めに面目を新た

にするであらう。氏は弓町に住するの故を以て其争ひや君子と云へる語を引いて不爭と號し詩文を克くす、又謠曲に興味を有して造詣深く風々入品の感あり、人と爲り磊落爽快にして温容掬すべく毫も自ら街風がない、去れば其羽振りの利くのも強ち氏が先輩として許りでなく、全く其人物に心服するに因るのである、兎に角亦臭い姫路の地に氏の如き親分的の人物を出したるは萬縁叢中的一点紅を認めたる感じがあると共に又實に以て縣下の誇りである。

▲氏の家庭

氏の夫人幸子は房州富浦川名氏の女、夙に才媛の譽れ高き賢婦人、七男三女を有し大の子福者である、長男は明治十八年の生れであるから、三六は十八、又六、卒へて別子銅山に入り、長女喜子は醫學士瀨川昌世君に嫁し、其他は目下夫れく修學中である。



古市公威君の家庭
*蹈三略を引いて六三と名けた杯は實に奇抜である、四十二年工科大學鑛山科を



帝室博物館長

股野 琢君

(明治四十三年十二月稿)

翁の邸は赤坂仲之町、杉九太瀟灑なる門構へで、庭園は山を負ひ、奇岩怪石を以て崖を成し、崖の下には池を掘り、大きな鯉が潑潑として、満園種々の趣ある樹木を植ゑ、風光明媚雅掬すべく、一口翁を其邸に訪ふ、庭に面せる一室に口下部東作氏揮毫の清潔遼深、三條公の邀月書院と題せる扁額に、常信の一軸を掲げ火鉢から書棚何れも支那風の物ばかり、翁は虎の皮の上に屏を布ゐて、黄八丈の儒者羽織を着て紫檀の机に凭り、端座庭園を眺めて居られる、七十三の老齡であるけれども、道は物外に超然として優游自適、清世の閑人を以て自ら居る儒者だけに、テキパキとして健全なるものである。

翁は播州でも他の出身者と異り、必ず年に一度は展墓勞歸郷される、殊に龍野の方面には先生の門人も澤山あるから、皆悦んで之れを迎へる翁も亦地方の後進は我が子の如くにして啓蒙に意を注がれる、誠に親密なもので温情溢る計り、隨て翁は頗る郷里の事情にも委しく、著者を見るときサモ親しう

▲翁の談話

「どうも播州にもよい人が少い、併し是れは地勢の然らむる處で仕方ない、昔から都會の優美な地には人物が出ない、例へば日本の歴史を見ても、遠三三州は昔は織田豊臣徳川氏の如き大家傑が輩出したが、其後徳川時代になつて參勤交代の通路となり、隨て江戸なり京阪なりの華美な氣風が傳播すると共に、自然人物は出なくなつた、彼の彦根藩の如きも幕末徳川の麾下では一番強いと云はれたけれども、もも川越に居つた時代には比べたら、京都の風雅なる氣風を見習ふて次第に弱くなつたものである、維新の大涌來を行つた長州の如きも毛利侯は廣島に居つたものであるが、若し彼れが依然廣島に居つたならば今日の如く人物は出なかつたらう、けれども徳川時代に長州の一番不便

な處に移された爲めに、自然健全な氣風を涵養した結果澤山人物も出たのである。

而して地勢の關係が播州邊の人は兎角小成に甘んじて仕方がない、少し役人の端くれにでもなるか、又少し學問でもするか、或は少し金でも出来たら直ぐに之れに安んじて仕舞ふが、蓋し學問の如きは生涯學んでも尙及ばざるものである、況んや他の事業に於てをや、之れは諸人は人物が小さく慾が少ないのであると思ふ、君子は利を語らずと説かれてあるから、慾と言へば語弊があるが併し慾も私慾と公慾とある、私利私慾に超つては不可ないが、公利公慾は飽迄望む大に抱かれねばならぬ、是れは播州地方の青年には大に戒勸して貰ひたい。

▲翁の祖先

余の經歷を語れと云ふのが、イヤ余の經歷は物にはならんよ、嘗て作杯も何か纏めて置いて呉れいと云ふけれど未だ談じたことはない、併し古人も父母を顯はす孝の終りなりと云ふてあるから、余の事よりも先づ母の事蹟を一通り語ることじやう。

余の家は六代以前の延幹と云へる人が、もと掛東郡の四日村に居つたが、儒者として新知百石を以て脇坂侯に召抱へられ、次が玉川、次が順軒、次が傳揚で、傳揚は二十九歳にして夭折し一男一女があつて、男を三郎と云ひ其だ學問嫌ひの人にて、十八歳の時京都へ修學に行つた處が、同窓に高松の者で醫學生業と云ふ者あり、それと懇意になつたのが抑々の誤り、古より儲と云ふれば貧しく醫と云ふれば富むと云ふことがある、故に儒者たらん事を志すよりも學を學ぶがよい、若し高松に來れば何時にても世話をすと言はれたので、堅く其言を信じ夫れから心得違ひをして、家に歸り代々傳へてある書籍を馬に三駄持出して之れを賣り飛ばし、高松に行つた處が世話はして呉れず、大阪で流浪した爲めに、藩の掟により家が斷絶する事云ふので嘆び返して更らに勘當した、而して藩の參政長尾三郎兵衛の五男五郎作と云ふ人が、少々文武に長じて居つたので、藩主の目録養子として、家女に配はせ股野家の相續を仰せ付けると云ふことになつた、處が此五郎作と云ふ人は大に之れを悲しみ、且つ謂らく、幼少より學業に骨を折るのも學業を積んで、自ら獨立するが程他家へ養子となつても立派な家へ行きたいからである、然るに竹芝な股野家の相續をして上士

▲翁の經歷

夫れから十九歳の時大阪に出で山本弘氏の塾に入り、二十歳の時塾長となつたけれども、何んでも自分以上の士が澤山居る處でなくば慢心する處があるからと思ひ、幸ひ父が江戸詰りとなつたので二十一歳伴はれて江戸に來り、藤森天山の塾に入る間もなく、或る夜のこと先生を幕府から捕縛に來た、然し先生は既に遁れて居られた後で無事に濟んだが、何分余は老中の臣であるから退塾して二十二歳の時、安積長齋の門人となつて聖堂に入り、恰度故高杉晋作と一年間机を並べて居つた、二十四歳の時聖堂を退き、伊勢の齋藤拙堂並に土井先生を訪ねて龍野に歸りしが、不幸母は病瘵中で余が二十五歳の正月に歿しられた、其翌日父が奉行となり余は儒者となつたが母が之れを知らずに逝かれたのは今に遺憾に思つて居る。

借此時分から尊王攘夷の議論が喧しく、探索方と云ふので京都に出た、之れが國事に奔走した初めてであつた、龍野は内心勤王であるが何分老中であるから表面佐幕で、幕府を歸順せしめんと、余は周旋方と云ふもので各地へ打合せに行たりして居ると、長州征伐が始まつた、山家流の兵法によると親子同隊で出征せぬ原則であるが、父は人馬奉行、余は外交方長尾は大目付、潜は馬廻りで親子親族一度に出た、何分二股であるから勤王佐幕の兩派に介在して却々苦勞をした、二度目の長征は無名の師であるから出兵の不可なる所以を建白したが、永井主水正から嚴達で餘儀なく先手丈を廣島迄繰出した

の家に生れながら中士の格に下がるのは實に残念である、之れを断つて貰ひたいと叔父を以て哀願した、處が父三郎兵衛は嚴格な人であるから之れを叱つて云ふには、汝に學問を修めしむる所以は所詮君に忠親に孝ならんが爲めである然るに君命によつて親が之れをお受けしたのであるから、若し此命に背くまきは即ち君に不忠親に不孝である之れに従はざれば勘當する、嚴命だから遂に不仕得養子となつた、之れが即ち余の父である「先年八十三歳で歿した、遺軒と號し詩藻は随分長けて居つた、歿後遺軒詩集として其編纂を、沈山と湖山と黄石に託し、題字を故三條公と伊藤公に、序文を東野と中村慶宇に判下を長三州と一六と日下部東作に屬して頗る贅澤なものを持たう」。

▲賢母の龜鑑此母にして此人あり

然るに余の母は却々勝氣な人で、父は目録養子に來た人である、何んでも男系の余に股野家を再興せしめなければならぬと一心に余を引き伸ばすやうにして、誠に信仰に富んだ人であつたから、余が成長を神佛に祈り、殊に勿體ないことには、余が生れてから十七歳の元服する迄毎朝十時迄は鹽物を斷食して所許して下まつたのである、けれども子供心には之れを知らず、忘れもしない或る時正月の元日に母が雜煮餅を喰はずに餅に茶を付けて食ふて居られるから不思議に思つて尋ねた處が、祖母が云はれるには爾は何も知らぬであらうが、母は爾をして成長後股野の家を興さしめんを神に祈り鹽絶ちをして居られるのであると云はれて、初めて氣が注いだ、夫れから十七歳の五月に元服をしたが、元服は大禮であるから祖母も母も切に悦んで下さる、其時何れも大騒ぎをやつて酒を飲んだけれども、子供の時から酒を嗜む癖のあつた余は一滴も飲まなかつた處が、夫れを不思議に思つて母から訊かれるので、實は今日迄御心勞下まつて庶務で元服を致さした之れを謝する爲めに、今後向ふ三年間禁酒致しますと云ふた處が、祖母も母も大に喜び母は櫻草を喫ふて居られたが、直ぐに櫻草を二つに折つて夫れでは母も嗜むな櫻草であるけれども此櫻草は廢めにすると云はれた、實に女ではあるが總て慈の如く意志の強い人で、余の今日あるは全く母の賜であつて、慈しみ深き當時を懐へば自ら感慨に堪へない次第である。

蕨兵が既に敗れて退陣したので、其跡始末を付けて歸ると、備前兵が姫路を誅たんとして既に龍野迄攻め寄せて來たと云ふ騒ぎ、然るに藩主は江戸に在るから、それを迎へんが爲め江戸に行たけれども藩主は歸らず、開う恚ふして居ると世は治まつて來た。

乃で明治元年と成ると神祇官が出來て、大教宣布に付大典受取方各藩より一人上京するやうにこの達して、之れを選擧した處が父が高點で余が次點であつた、然るに父が辭したので余が江戸に出で、三年の春迄居つたが何の沙汰もない、伺書を出して見た處が主典の福羽美静が各藩の者を集めて、修正中であるから待てと云ふ、其時分の川柳に「馬車に乗る福羽備官の口車乗り損うて何と宣教、杯と皆が惡口を言つて居ると漸く發布になつて受取つて歸つたが、間もなく廢藩置縣となり四年に、神祇官が教部省となり、乃で十等出仕に召出されたが長官は大木文部の兼務で、余は兩省の合併を主張し其建白をした處が遂に合併になり余は罷免せられた、時に長尾が人民必携と云ふ本を拵へる計畫中で之れを助けて居ると余が寢に合併の建白に就いて本願寺より突き込まれたから之れが辯解書を出して居る中に翌年法制課が出來て法制局となつた、其後九年に法制局となり、十四年に太政官權大書記官に轉じ、十八年に伊藤内閣の會計局長となり、二十年に記録局長に轉じ、二十二年土方宮内大臣の時同省規則の制定に付宮内省に入りて法制課長となり、同年勅任に進められ、久邇山階、兩宮殿下の別當を兼ね後内事課長に轉じ、二十三年陛下に供奉して名古屋の大演習より吳佐世保に往つた、日清

事件の時廣島に出張し、三十二年に帝室博物館長に任せられ赤坂離宮御造營主事、内大臣秘書官長を兼ね、勳一等勅任一等に進められ今日に迫んで居る譯である云々

夫れから著者は翁に揮毫を請ふた、曰く近來西洋說で百二十五歳迄生きると云ふ説が流行するが、余は東洋說で百二十歳である、之れが即ち余が七十歳自壽の詩であると言つて卷首に掲げた一詩を與へられた。

翁は、號を藍田、字は子玉、幼名玉太郎、又は行藏と云ひ後又今の琢と改められた、最も文事に長じ詩藻に富み、其文其書筆墨蒼古真に漢魏の遺墨を帯び、吾が漢學壇の一異彩である。



醫學博士 井上通泰君

御歌處寄人

(明治四十三年十二月稿)

山紫水明の地は山來文人を産み碩儒を出す、我播州の地亦水清くして風光頗る佳なり、去れば古來幾多の文人を出し又詩人に富む、之を先きにしては儒學の中興と稱せられたる藤原醒窩あり、美術家として酒井抱一、詩人には河野鐵兜あり、今は復た御歌處寄人醫學博士井上通泰氏を出し、斯くて

播州の山河に又一段の精彩を加へたるを覺ゆ。
氏は神崎郡田原村の鴻儒松岡操の次男幼にして井上碩平の養嗣となり、醫を修めて帝國大學に入り眼科を専攻す、明治二十三年業を卒ゆるや直に大學の助手となり、二十六年姫路病院の眼科部長に聘せられ、二十八年岡山専門學校の眼科部

長となり居ること八年、三十五年職を辭して東京に赴き、内幸町に眼科病院を建設し以て今日に迫る、四十年八月論文を提出して醫學博士となり、眼科醫界の泰斗として名噴々たるものなり。

氏は亦た單り刀圭界の大家たるに止まらず、性文雅風流、幼にして國學を嗜み歌を國富重比古松波遊山に學び香川景樹に慕ひ國學を本居宣長に仰ぎ、所謂明治調を唱へ出藍の譽れ高く、畏くも陛下の御詮衡によつて明治四十年八月勅任待遇御歌處寄人を拜命せり、當今斯る光榮を有するもの黒川、本居、鯉田翁と共に僅に四氏に過ぎず、氏の歌道に於ける素より造詣の深きものあるや勿論なりと云へども、初めて五首を詠じ、高崎正風男をして讚嘆措く能はざらしめたるが如きは又以て天稟の才藻あるに由らずんばあらず、世の歌人と稱するもの多くは徒らに古代簡樸の風を憧憬して時代思想の推移を閉却し、法三章時代の態度に回らんとする、謂はゞ一種の物好骨董者流の多きに反し、氏が獨り明治調を唱へて、時代に調和せんとするが如きは次で其識見の高きを見るべく、又其才華の卓絶や想ふべき也、蓋し是れ歌道以外學殖の深きにあらずんば到底企て得べき所に非らず。

氏は又古書畫の鑑定に於て、頗る卓抜なる眼識を具ふ、氏が鑑定し批判を加ふる時は、何人と云へども之れを動かすこと能はず、殊に景樹と蕃山に至つては蓋し氏の右に出づる者なく、即斷輕妙を極む、曰く「古人の墨痕には其精神が躍動す、故に此精神に接すれば一見自ら明かなるものなり」と故に氏は普通畫家の繪を見、書家の筆蹟を見るものと異り、其

兵庫縣人物史

醫學博士井上通泰君

ある。

明治四十一年支那各地を巡遊し親しく彼地の美術古跡を探り、葦航遊記の著がある、又鏡歌餘響の一篇は日露戰役中の詩集にして、其他の記事詩鈔文集等多く何れも發して詩となり文となつたものを讀めば、精彩自然に煥發して雷霆電掣天馬空を行くが如く明珠盤に去るが如き趣きがある。

明治文運の進歩は學者博士も澤山あるが、物質的學問は之れを別として、人格の崇高と高潔なる性情に至つては、何うしても孔孟の教を守つて居る人に限るやうである、翁の如きは則ち其最たるもので、洵に現代の君子人と謂つべきである。

筆者の精神を見るが故に毫も識別を誤ることなしと云ふ、蓋し斯くの如きは他人の學んで得べき所に非らず、以て其蘊蓄の深きを知るに足るべし。

當世の學者滔々として何れも皆名利に戀々たり、獨り氏は當世の學者と其選を異にし、胸中には奪ふべからざる高遠の理想と確信を有し、權威を具へ、而して別に亭々たる見識あり、人を愛し人を導き門下多くの俊秀を出すを以て名あり又最も愛郷の念に厚く、卷頭掲ぐる所の題詠は、氏が夢に郷里に遊び、更らに歸東せんとして多くの知己門下に送られ別れんとするに當り乃ち此一首を詠じ終れば夢忽ち醒む一場の夢猶記憶に存せりと、著者の乞ひに應じて與へられたるもの如何に懷郷の念に切なるものあるかを察するに足るべく、嘗て東京、在郷者間の連絡を執らんとして奔盡する所ありたるが如き、氏が一面には頗る情の人たるを知るべく、而して又氣品の高きこと學者中稀に見る所、以て人と爲りの一斑を窺ふに足らん歟。

鏘々たる氏の兄弟

氏に兄弟五人あり令兄松岡鼎氏は、曩に醫科大學別科を卒へ下總葛飾郡布袋町に於て開業し、次男國男氏は柳田家を胃し、法科大學の出身にして、法制局參事官たり、少壯有爲の士として目せらる、三弟輝夫氏は美術學校の助教として藤原時代美術の蘊蓄深きを以て稱せられ、季弟靜夫氏は優等を以て海軍兵學校を卒業し現に埃太利大使館付武官として大に前途に嚙望せらる、斯くて兄弟五人相揃ふて共に天下の材た

るは世に未だ其例を見ざる所實に一門の榮と謂ふべし。

●氏の祖先

▲眞繼立齋傳

氏名は維恕、字は忠卿、幼名を清五といひ文化七年掛東郡網干に生る、父は申川主水とて神東郡の人、家世醫を業とし、一とせ網干村の内平松村に於て開業せり、然るに同村字横濱村高田某主人死して一女あり、強いて入嫁にせんことを謀る、氏止むことを得ず之れに従ふと雖も他姓を旨すを附せず、依然申川姓を稱す、男女の子四人あり、氏は即ち其季子なり、二歳にして父を哀ひ故あつて大阪の町人に不通の養子となる、然るに後假父の死によつて兄主水君をたよりて故郷に歸り、兄主水、名は繼、字世神州と號す、醫術を學び、初め攝州荒原郡に開業したりしが、天保の初め徳里に歸る、其勤めに従ひ漢籍を學び、後には詩人と稱せられ、郷學明倫館の教授となり師史の講義をなし頗る達辯なりき、天保二年の頃申川迄と改名し神東郡なる松岡左仲とよばれる、醫師の女に配し其姓を旨す、(女小鶴は申川立元の姪孫はれて左仲の養女となる)翌年六月一男子を生む、之れ則ち操先生なり、かくて天保八年養母桂氏亡す、九年七月養父左仲突然病を離世せり(ソノ事情は小鶴女史の著南窓篇に審なり)故に氏が松岡の養子となりしは横か七年間に満たざりとなり、後眞繼姓を旨し明治七年生野に歿す、子なし、眞繼一に到るる人家を繼ぐ。

▲縞衣女史の傳

氏風に勤王の志あり、高山彦九郎蒲生君平の人を爲り慕ひ、亦他家の姓をづくをばら復姓して、通稱を立齋又登と改め、陶庵と號す、菊花を手培して栗里に擬す、性客を愛し詩人墨客馳騁墨客の一枝を扶むもの皆門に踵る、彼の生野義舉の士平野國臣、美玉三平、河上瀧一の輩何れも氏に寄る、而して事敗るの後義舉の鞠間にあふたりしが、智辯を以て難を免る、明治元年官これを奏し双刀を佩するを許し士族に陞すといふ。幕所は生野町、本妙寺、法號は智廣庵庵日蓮居士、明治七年八月、享年六十五。女史諱は小鶴、別號なし、結衣は其假名のみ、其現に事ふるや孝、其夫に於

- 培遠風詩話歌好 樽外花來蝶舞新
- 徒送事端消白日 空送物候爽青春
- 定知山畔多幽趣 瓊玖爲投雪水濱

▲松岡操傳

天保三年六月十二日播磨國神東郡津川村に生る父名は至、母は家の女名は小鶴、通稱初め賢次後操と改む名は文、字は子順、號を雪香と云ふ晩年約齋と改む天保九年(七歳)故ありて父に別る、これより專母に育せらる。天保十二年(十歳)始めて詩を賦す。弘化元年三月(十三歳)加古郡に行き梅谷左門に就いて漢學を修む。同二年四月(十四歳)姫路藩好古堂に轉じ角田心藏を師とす。嘉永三年(十九歳)飾東郡木場村三木某に從ひて始めて醫道を學ぶ。文久三年三月(三十二歳)姫路藩町學校熊川令師範仰付けられ醫業を廢して姫路に移る。明治三年十月(三十九歳)廢藩置縣の爲職を辭す。同年十一月林田縣敬業館教習に補せらる。同五年一月(四十一歳)林田縣を辭し家族を携へて郷里に歸る。同六年十一月(四十二歳)飾磨縣立龍野更化中學校二等助教を命ぜらる。同十年十一月(四十六歳)多可郡荒田神社祠官拜命。同二十二年九月下總なる長男鼎の許に移り同二十九年九月五日下總國東葛飾郡布佐町にて歿す年六十五。

帝國大學教授 史料編纂官

文學博士 三上參次君

世に學者の數は少なからずと雖も眞に學者的の學者を求めれば、文學博士三上參次氏の如きは指を屈すべき其一人である。

兵庫縣人物史 文學博士三上參次君

るや眞、其人を爲りや烈、歿するに及んで私に誼して孝貞烈女と云ふ、(父諱は勇字は義輔、左仲と稱す、爲人恬淡無慾、慈仁にして學を好む、神東郡津川村の人、家世農たり、左仲に至つて醫を以て業とし、最傷寒金匱の二論に精しく傍ら約學算法に通ず、年五十を過ぎて男子なし、申川至を養ひ以て女史に配す)女史幼より多病、深閑にあつて外人と接せず、年二十七始めて婚す、其人志適はず、屢勉して巾幗を執る、一男子を生む、即ち操先生なり、後父左仲其眞人を逐ひ女史の志を奪はんことを、女史矢て曰く、妾不敏と雖も亦道を聞くに與る、再願して家聲を汚すに忍びず、其妾の業に至つては妾志を勵まして之れに任ぜんこと、左仲之を許し老を扶け業を執る、又二年にして歿す、時に兒甫めて九歳、日々自ら字適をとりて句讀を授け又小詩を賦せしむること毎日一首、兒十三にしてよく白文を誦し、詩も又見るべし、乃ち加古郡安田村の醫、梅谷恒徳氏に從ひ醫を學ばしむ、後仁壽山校及び姫路に轉寓す、其地皆南方にあり女史日々閑に倚つて南窓す、遂に自ら其詩文を編輯して南窓篇と曰ふ、篇中曰ふあり「托幽情於野詩布丹心於燕巖」其序自ら父に孝ならず夫に順ならざるを以て二罪とす、篇中曰ふあり。「嗚呼余既抱二巨罪、不能順於親不能信於夫、尙何恃區々之諒哉、孟子曰不能三年之喪而慍小功之祭放飯流歎血問無齒決是之謂不知務、如余者豈能免哉哉」遠近傳觀して嘆美するもの多し、姫路藩廳これを聞き代官吉澤周平をして之を賞せしむ、藩の文學角田君も亦母子の勤苦を奇として兒の爲めに學資を給し勸めて洋宮に入れ生員に列す。

女史の所に寓するや人或は目して、其の端、陽に操行を表して陰に醜態なきを得んやと、女史之を聞き憤悶累日、詩を作りて神祠に掲ぐるに至る。女史の詩文虚飾を惡む、一字一句必實際に於てす、肝膽を吐露して後已む、後清の施愚山が説詩粹語を讀む亦其説あり、蓋暗合なり。女史明治六年十月十五日を以て卒す、生文化三年を距ること六十八。女史深く佛家六趣輪廻の説を信す、友人三木公達朱學理氣の説を主張す、往復數論上下、彼此皆漢文を以てす、終に一步を譲らずして止む。女史未嘗て學ばずして詩歌皆觀るべし、今其春日寄外の詩一首を録す。漸覺韶光滿四隣 烟霞病柳似桃人

敬神勤王の志深く漢學の傍國書佛典に通ず文章詩歌能くせざるなく頗る趣味を解す然も性情淡にして物に拘はらず晩年に至りても銀銅兩貨の貴賤を知らず以て其一斑を窺ふべし。弘仁三年年十五、姫路にあり一詩を賦す、曰く 橋浦瀟々酒五更 鴛鴦夢斷冷如水 翠思去盡賞歡雨 戲句裁衣分一燈

春日書懷二首

- 學書學劍不還家 每遇青春感歲華
 - 謝夢醒來池上草 燕支滴盡雨巾花
 - 悲鳥聲斷雲偏濕 老樹風生日又斜
 - 想君倚門情愈切 神川南去路三叉。
 - 五載周旋觀國光 百年德澤正洋洋
 - 津宮日永花凋謝 官舍春深馬食場
 - 文庫剩分郵候軸 經筵近接令侯香
 - 消埃期親君恩渥 不是機禽謀稻梁
- 妻名はたけ子、加西郡北條町尾芝利七の女なり、聰明強記又仁俠にして屢々人を救ふ、明治二十九年七月歿す年五十六。子八人あり今存するもの五人即ち井上博士の兄弟とす。

氏は慶應元年神崎郡船津村に生れ、八歳の時姫路藩士三上勝明氏の養子となり、明治十年縣立模範小學校を卒業し、當時養父勝明氏が同郡砥堀村桃李小學校の校長たりしを以て、

氏は已に十三四歳の交、父の缺勤には代つて教鞭を執つて居られたと云ふ、實に幼にして拔群聰慧郷閭呼んで禪門と稱して居つた、其後同校の教師を命せられ教鞭を執りつゝありしも、素より大志を抱ける氏は決して田舎教員として甘んずるものではない、故に其傍姫路中學校に通學して明治十三年に之を卒業した、然るに養父勝明氏は一家を提げて北海道へ移住せんとする計畫を立て、従つて氏も亦農業を専攻せんと志し、東京に出で、駒場農科大學入學試験の爲めに、通文學舎に入り英學を學んで居られたが、性來種々の軍書或は其他總ての文學書類を好み、殊に八犬傳や三國史などは暗誦して居つた位であつた、ソコで或る人より己れに適する方面に志すを以て成功の一要素であることを諭され、氏も亦大に自覺する所あり、斷然方面を變じて帝國大學文學科に入り和文科重に歴史科を専攻して明治二十一年に特待生となり二十二年優等を以て卒業し、國史研究の爲め更に進んで大學院に入り編年史編纂助手を命せられ、二十四年に尋常師範尋常中學高等女學校教員の檢定試験委員に擧げられ、同年九月文科大學の講師に任せられて引繼ぎ今日に至れるものである、又二十四年に女子高等師範の講師を囑託せられ、而して復た同年市俄古博覽會出品日本略史の編纂をも囑託せられたことがある、二十五年に文科大學の助教授となり、二十八年日本史料編纂委員を命せられて今日に及べると共に、三十二年には大學教授に進められ、國語國文學國史の第二講座を分擔し、同年更に史料編纂掛主任を命せられ、又同年博士會の推薦に依つて文學博士の學位を授けられ、三十四年に國史第一講座を分

擔し、同年國語調查會委員古社寺保存會委員を仰付られ、同年七月獨逸漢傑に開催せる第十三回萬國東洋學會會議委員として参列し、十二月に歸朝、三十七年年表草案調查委員及び教科書調査委員仰付られ、同年八月高等官二等に陞叙せられて勅任教授に進み、三十八年史料編纂官を兼ね同年更に史料編纂係事務主任を命せられ、四十一年勅旨を以て帝國學士會員仰付られ、四十二年十二月勳三等に陞四十二年一月從四位に陞叙せらる。

氏が閱歷の概略は以上の如く、目下擔任せられある日本史料の編纂は文事的方面に於ける我國空前の大事業にして氏の下に八十餘人の學者先生が従事して居られる、實に明治昭代の大事業なると共に又氏に採りては畢生の偉業と謂はねばならぬ、而して氏が富賤なる學識と相俟つて明治の文明を飾るべき一大紀念物として後世に矜るべく、又我國史の不朽と共に千歳の後裔氏の功蹟は誦はるゝであらう、蓋し氏は天稟の英才にして其精力は絶倫、學殖の豊富なる本邦史學界の泰斗として既に定評のある所である、而して性は温厚篤實、其生地を異にせるを以て、姫路藩士たりと雖も所謂姫路根性と云ふ忌むべき所は毫もなく、地方青年の誘掖に努めて居られる處は洵に多とすべきである、蓋し播州には人物を出す事少なしと云ふが、歌學界の泰斗井上通泰博士、陸海軍に藤井兄弟而して和辻博士と史學界の泰斗三上參次氏を出したる神崎郡の山河は爲めに一段の光彩を添ゆると共に、又之れを以て天下に誇るに足るであらう。



顯本法華宗管長

大僧正 本多日生師

(明治四十三年十二月稿)

維新以來西歐文物の輸入と共に思想界の混亂となり、竟に歴史的空前の大汚點を印するに至れり、而して之れが原因に就いては多々あるべきも、一は宗教界の萎靡として振はず、古來幾多の宗教家が指導救済の爲めに百難千苦を意とせず、身を忘れて我國體の美を助け、人心を啓發し徳性を涵養せられたるが如き宗教家なきに因るべく、殊に佛教徒に斯る大罪人を出したるに至つては教化布道を以て任じて居る、宗教家として其責を免るゝことは出来ぬ、而して吾人は宗教の頹廢を歎き其責にある教徒の墮落を憤慨すると共に又爰に至らしめたるものは一は國家社會の罪であると思ふ、何となれば渠等宗教家と雖も人間である以上は人間の生活は仕なければならぬ、或は人を率ゐんとすれば人に長たるべき相當の體面も保たなければならぬ、人心の歸嚮すべき殿堂の修築も必要である、然るに渠等の財産たる朱印地は沒收せられ、信教自由の結果は信徒は離散する、爲めに殿堂は毀損し生活は困難となり勢ひ墮落せざるを得ない、偶々不埒な者が出れば社會は

兵庫縣人物史 本多日生師

宗教家であると最も之れを酷遇する、今日の職業中宗教家程割の悪いものはなく、従つて有爲の人物は何れも還俗する、詰り依然宗教家として殘つて居るものは生活に汲々として居る有様である。

本年の地方官會議に於ける、平田内相の演舌によれば社會改良國民思想の改善は偏に宗教家の力に待たざるべからざることに言及して居る、遅ればせにも爰に意を致せるは吾人の欣ぶ處にして、宜しく宗教家を遇するに道を以てし、國民の指導に任じたなれば偉大なる功果があるであらう、而して之れに任ずべき各宗教家の教理が多くは出世間的に偏して時勢を閑却せるは吾人が遺憾とする處であるが、獨り本多日生師が少壯にして偉大なる人格を有し且つ精力絶倫最も活氣ある日蓮宗の管長として夙に國民思想の啓發に任じて居られるのは之れを多とする所以である。

師は姫路藩士國友家に生れ、十三歳にして野里妙龍寺に得度し、同寺の住職兒玉師に就いて佛學を修め、岡山の源泉學

立憲新聞社に入り傍ら六合雜誌及び七々雜報等に筆を執り後ち備中高梁に至り、同地の教會に在つて傳道に従事する事二年、雲照律師と教諭の結果同地方民の迫害を受けて後ち福音新報社に入り、又太平新報を創刊し、次いで東京に出で、浮田和民氏の後を承けて基督教新聞を經營するに至つた然るに氏は當時熱ら思へらく、西洋人の牧師傳道師と稱するものが往々人格の卑劣にして誘惑に陥るものあり、之を人格の點より論ずる時は日本の武士道又は儒教の方が遙に優つて居ると斯く考へて氏は耶穌教を信ずると共に、日本の武士道並に儒教の人格馴養を以てせんと欲し盛んに三者の調和を唱へ、而して洛陽俱樂部を設けて故大西祝、内村鑑三、押川氏等と共に専ら基督教の研究に従事して居つたが、内村押川氏等が米國に渡るや氏は一轉して青年教育に志し、山形縣に英學校を起して之れが教頭となり、初めて精神教育なる題下に説示したるもの即ち立志の礎として發刊せられて居る後ち新潟縣北越學館の校長として青年教育に従事し、復東京に戻りて神田青年會館に講演せるもの、是れ即ち編輯して出版せられたる修養録である、後ち熱ら感ずらく、凡そ身體の自由を得ざれば畢生の事業を爲すに足らずと、明治三十二年斷然職を辭して著述家となり、而して世の歴史なるものが、或は宗教の爲めに、或は政治上の壓迫により、眞の事實を記述せるものなきを慨し、鎌倉に閑居して、世界人類歴史の調査研究に着手し、各種の方面より世界の歴史と稱するものを讀破する事數千卷、五年の星霜を費して、遂に氏の著萬國史となつた譯である而して、其著書の價值に至つては茲に喋々する迄もなく

世に噴々として歓迎されつゝある所である。明治三十八年東京神田橋に日本教會を設け、之れが機關として、雜誌「道」を發行して居られる。

▲氏の教理と其傳道

氏が傳道の趣旨とする處は、全然基督教其もの、傳道ではなく、之を日本化して、日本的基督教として我國態國狀に適應せしめんとするのである、故に其言ふ所は世間の基督教且信者とは大に趣きを異にして居る。

氏曰く我が黨は、耶穌を見ること諸聖賢に齊しく、之れを特別絶對の人格と見做さない、乃ち假へ基督なくとも我黨の宗教は存在するもので、若し基督を絶對の人格と見做すを以て基督教でありしれば、我黨は基督教ではない、併し我黨は憚んな事は論じない、唯我黨は信神、修徳、愛隣、永生の四條を奉じ之れを行爲に施さんと思ふのである、故に我黨は洗禮の儀式に代ふるに宣誓記名に更り、又説教前後に誓書を讀む代りに中庸でも論語でも差支ないとするのである、又聖書の中にも到底常識を以て信する事の出来ないものがある、余は最初聖書の改定を唱へたが今日に於ては左様な姑息の事は云はない、唯聖書の一部を、諸聖人の教訓に據り所謂不朽の道、不磨の眞理を説明する一書を編纂する事に決議して居る云々

▲令弟松年博士の略歴

氏の令弟松年氏は、十四歳の時大阪に出で亞いで東京明治學院に入り、札幌の人和田建三氏に依つて札幌農學校に入り昆蟲學を専攻して後ち獨逸に留學し歸朝後明治三十四年農學博士の學位を授けられ、引續き同校の教授として昆蟲學界の大家として喧稱されて居る人である。



酒井伯爵家家令

近藤 薰翁

(明治四十三年十二月稿)

▲翁が維新前の略歴

明治維新は確かに世界に於ける一大變革である、而も斯る一大事業の遂行は當時幾多志士の熱血によりて成つたかを懐は、吾人此盛世に會して轉た敬服と感謝の念を禁するを得ない、斯かる香々しき志士の分子は姫路に於ける河合惣兵衛の一黨にして、而かも此一黨の多くは當時の犠牲となり、今や生を完うするもの僅に武井男と近藤翁あるのみ。

翁は嘗て姫路に住し多くの名譽職に推舉され、或は會社、銀行事業の經營主宰の衝に當り、翁の扶掖せし點は蓋し尠くはない、斯くて舊主酒井家よりの懇請により今や家令として忠勤を抽んで居らるゝが、郷里姫路を去りしは實に明治三十五年で日尙淺き丈けに、常に郷閭の者とし云へば悦で迎られる愛郷の念今も尙ほ何等の渝りを見ないのは誠に床しき次第である、翁は既に古稀の齡に達しながら最長、性極めて活潑にして洒落、親しく著者に對して當時の事蹟を語らるゝやう。

維新の際に於ける一條はナカ／＼一朝一夕の談では盡せぬが唯一端を語るに辛酉、壬戌の交際王親夷の熱四方に鼎沸して、諸藩有爲の士は先きを争うて京師に蟄集し、天下の形勢漸く念を告げんとした、然るに酒井家は幕府譜代の臣殊に親戚の關係もあり、従つて徳川氏の意に背反する動作は出来ない云ふので藩論多岐に涉り、河合惣兵衛、秋元正一郎氏等慷慨の餘り、京都に抵り尊王攘夷の運動を躍起となつて行つた、而して歸來大に論究したものであるから、藩主も遂に心を動かさし、河合惣兵衛外數名を京都に派して機宜に應ずる處置を命じた、予も又此一行に加はつたのが抑々の始めである、而して諸藩の志士と結託して尊王の大義を論じ、幕府に攘夷の決行を迫つたけれども、當時幕府は攘夷の内訌を受けて居りながら逡巡として事を決せないものであるから、惣兵衛氏は之を憤り或る時、同士七人親しく姉小路卿に謁して赤誠を吐露し、將に所決せんを請ふた處が卿は固く其の懇請を制し、既に三條卿と共に宮中に謁議して一橋に迫りしに、激慮の動すべからざるを覺り、數句の中に決行せんことを奉答して居るから姑く其時機を俟つべきを諭され、且つ酒饌を賜つて其志を慰せられた、之れより引續き吉村寅太郎等と謀つて公武合體尊王の實を擧げんことを學府院に建議し且つ色々痛論して居つたが、同年七月に禁裡の警衛を

命ぜられ本館等に駐屯し居るも、會津藩が守備職を名として威權を弄するものであるから、藩の山本某に爆烈彈を製せしめて會津の本營を燒拂ふなど云つて騷擾を囑したことがある、夫れより八月に七卿が勅助の身となられた時、吾々姫路の同志は三條公に扈從して妙法院に退き、卿等は親兵を率ひ朝命を俟つて、會津を討つとの命があつたから、直に戦備を整へた處が、變じて長州へ下られる、其時桂小五郎が公に隨行して別れる時に、予を喚んで跡に京都に止まり、禁裡の動靜を偵察をして報告を怠らぬとのことであつたから、予は宇和島藩士に裝ふて八日の間給御門に潛伏して其見聞した事實を密報に努めて居るも、九月に野々上宰相から退京の宣告を受け、已むなく伏見大阪を彷徨して形勢を窺望して居れば復た退京を命ぜられた、此時藩主は老職であるから幕府の命で入京せられるので、大阪に謁して速に攘夷の議を決し奏聞せらるゝやうに謀めたけれども、其議は容れて果されなかつた、其後藩命で旅行を禁止せられ姫路に居つて陰に諸生を奨励して居つたが、元治元年に幕吏が急に來つて一黨悉く捕縛せられて獄に下り同年十二月二十六日に何れも處分せられた(處刑の人名は武井男の語中に審なれば爰に略す)

夫れから予は其執行を受けて居るも恰も明治元年の春廣澤兵助、岩下佐治右衛門氏から藩に追り遂に釋放せられて家に歸つたが偕て出て見ると天下の形勢は頓に一變して居る、最早頼みとする先輩は殺され、之れに反して在江戸の俗論黨は動しするも不徳の行動に出でんとするので、専ら武井等と共に鎮撫して藩論を一定し之れを具申した、其後參與の廣澤、岩下、木戸、大久保の諸氏に請り藩政の改革に力めたこと云ふ次第にして維新前後の事柄は概ね叙上の如くである(其他總て武井男の談話と大差なきを以て之れを略す)

▲翁維新後の經歷

其後の經過は明治元年十一月に家祿を復舊せられ行政司、公用人、外交係を命ぜられ同三年權少參事に任ぜられ以て行政判事、刑判判事、民政奉行に任ぜられ、同年軍事改良の意見を具して藩主の容るゝ處となり、鹿兒島に赴き西郷、野津、篠原其他の人々の助力を得て兵制を研究し歸藩其制度を改革して居るも、同四年に廢藩置縣となり其屬に任ぜられたが最早斯く大勢が變革した以上は國の實力を展ばさなければ空論では不可なり、殊に其頃は官尊民卑の風が

旺んであつたから、之れは時勢の弊害であることを感じたものであるから官吏生活を断念して辭職した、同五年に英國人ハルトリー氏と特約して大阪に書籍販賣店を設け原書の販賣及び印刷機械を購ふて印刷業を起したが、不幸火災の爲めに挫折した、更に同十年阪神の紳商と計つて兵庫新川に米商會所を創立し同十一年に舊藩へ公債證書を交付せられたから之れを資本に二三の人と共同して三十八國立銀行を創設し事務取締役に擧げられ、同十二年縣制の施行に就て初期の縣會議員に當選し更に議長となり、二十二年に須磨病院を設立して二十五年には品川彌次郎氏からの懇望を容れ衆議院議員候補者となり大に暇つたが遂に失敗に歸した、同年兵庫の運河開鑿事業の計畫を樹て後株式組織にて取締役社長となり經營の衝に當つて將來に於ける抱負もあつたが會社内訌の爲めに之れを罷め、同三十年に播磨紡織を創立して取締役に擧げられ多少地方實業の上に心血を凝ぎつゝあつたが、三十五年に遂に酒井家の家令を申付けられたので固辭したけれども容れられないから御受けをして今日に達して居る次第である、

翁の説く處大略以上の如く、翁や少壯身を挺して勤王國事に盡瘁し辛うじて其生を完うして維新後地方の名譽職に擧げられ且つ諸種の實業を創立經營し、老いては主家の爲めに幼主を補佐して家運の隆昌に力を致す、實に翁の如き公生涯を經來りたるは稀に見る處にして其國家社會に貢獻せる大なるものあるを見るべく、宜なり三十五年九月特旨を以つて從五位に叙せられたるは在野の一老翁としては破格の光榮にして即ち維新前後の功績を嘉賞せられたるなるべく、寔に翁の如きは明治の先輩として畏敬すべき人である、

翁に一男三女あり、長女は粟谷大佐に嫁し二女は石廣英一氏に、三女は石澤氏に嫁し、男靜朗君は早稻田出身にして第三銀行に在り。



三大書家 前田 默 鳳翁

翁は龍野藩士、幼名を利吉と云ひ、後圓と改む、幼にして聰慧、同藩の上席家老職脇坂紹雲は氏の才を愛し、召されて侍曹となつた、紹雲人と爲り頗る寛浩にして國士の風あり、且つ謹嚴にして苟も藉さないと云ふ質で、最も文教に通じ當時天下の名太夫と稱せられたる人なりき、故に常に氏を膝下に諭して云はるゝやう『人は凡常の名利を趁はず毅然として節義を守り、天下を以て心となし且つ勉めて世を益すること、心を懸ねばならぬ』と要するに氏が今日ある所以のものは、實に紹雲の薰陶に依て刺激されたものであると言つて居られる、其後廢藩となるや、明治四年十七歳にして東京に至り

少壯氣滿々勃然として同志を糾合し、鬱陵島奪取を謀つたが、遂に中途にして破れた夫れよりは氏が意を滿たすべき大問題も一寸見付らない、何としかして多少國に盡したいと心懸けて居つたが、幸にも或る時佩文韻府の古書を得た、恁は即ち支那古典の書にして、康熙帝の勅選に係り全部二百六卷より成り、張王書以下七十五學士の纂修したものであるが、未

だ本邦に於て翻刻せられたるものがない、爰に於て氏は之が翻刻に志し、前後四年の心血を凝いで、遂に明治二十年に風文館より出版するに至つた、實に斯る短時日を以て斯る大出版を爲したるは、水戸の大日本史に亞ぐ一大事として盛んに世の賞讃を博したる而已ならず、若し之が原本を購うに於ては一部百數十圓を要したるものであるが、氏の翻刻によつて僅に四十圓を以て之を頒つことを得るに至り、我學界の爲めに貢獻せることも實に甚大なるものである、

氏は亦幼にして書を能くし、嘗て龍野人と號して居つたが佩文韻府の出版を終ると共に、風文館を閉鎖して其閉館式を擧げたるは、當時世人が氏の行を奇とした處である、之より氏は自ら號を默鳳と改め、支那に漫遊して益々書道の研究に励め、造詣愈々深く遂に今日斯界の大家として世に推稱されるに至つた、其著、書鑑三十二卷、書海十四卷、五體字書十二卷、印文學五卷、行草字彙十二卷、書畫研究法二卷、東和和字稿書訣六卷、書學捷徑二卷は何れも書道の指針として大に世に行

はれつゝあると共に亦氏が蘊蓄の深きを知ることが出来る。然れども氏は世の所謂、書、畫家と其選を異にし素より書を以て世に處する人ではなく、寧ろ書は君子の末技であると斥けて居るが、性來流俗に抗する狷介不屈世に容れられざる仙的人物の奇行家であるから、當世風のこととして氏の氣に喰はないこと計り、其後目覺しき事業も見付らぬものであるから、書畫を揮うて一世を茶にして送つて居る、而も其書道は六朝に通じ筆力雄健本邦の三大書家と稱せらるゝ而已ならず、其豪宕なる人格が紙背に躍動して居る處は、恰も古英雄の筆蹟に接するの趣がある。

佩文韻府の翻刻は蓋し没すべからざる氏が一世の事業たりしと共に、又立志編中の美譚である、當時斯る尨大なる出版を行つた處で此を購うものは、僅に一千人にも足らぬ状態であつた、故に事業半にして缺損の見え透いて居る事業であるから、其時之を中止すれば苦痛はない、之を遂行すれば出版後に赤裸となる而已ならず多くの負債も生じ一層の困憊に陥る事を自覺した、然るに氏は精神一到何事か不成と云ふことを思ひ出し、其決心を固むると共に其事業を遂行した、世に之程善き金言はないと言つて居られるが、成功して損の行く事業を世の爲めに遂行した處に氏は人格は窺はれるのである。



代議士 改野耕三君

(明治四十三年十二月稿)

我が國が維新の革命によつて政體を一變し、彙には縣制の實施となり、亞いで憲法は發布せられ議會は創設せらる其間已に三十年、而して政治家を以て任じたるもの枚擧に遑あらず、而も多くは一時の虛榮に止まり、素志を變じて獵官を事とし、或は實業界に入る等依然として主義主張の爲めに進退

し、世の政論家として國政に參劃せるの人は未だ幾人あるであらうか、近くは兵庫縣下に於ても縣會議員として或は代議士として選出せられたるもの幾百人なるを知らず、而も多くは主義なく主張なく、且つ自己を知るの明なく、單に肩書の虛榮に渾身の浮身を賣して人の煽動に甘んずる輩にして、今

や慘めなる世の敗殘者となつて折檻の間に朽ちんとするもの比々皆然らざるはない、然るに代議制の創始以來縣會議員として將た代議士として、間斷なく議席に連り、終始一貫在野の政治家として國政に參與し、確固たる主義定見の下に憲政の發達に貢獻して居る改野耕三君の如きは稀である。

氏が今日に至れる所以の一は、氏の立脚地たる揖保郡が嘗て小選舉區時代に於て絶對の有權者に富み優勝の地盤たりしに依ると雖も、又以て多年衆望の繁る處氏が如何に名望の籍甚にして、且つ手腕の凡常にあらざる事を、證明するに足るであらう。

氏は別段系統的學問はなく隨て學者ではない、又氏を言論家と云ふことも出来ぬ、然れ共氏は確かに智者である、同時に才子である、それも世に所謂小利口の才子肌でなく、英邁なる素質あり、人格のある才子人である、應對の巧みにして談話の上手なる、且つ最も物を透察する明のある人である、或は氏に稜々たる氣概、又は膽力を需める事は出来ぬ、隨て將に將として機略縱橫、人心を收攬し、統轄すると云ふ術者

の器にあらずとするも、當世風の事務家として、方面の將たるに餘りあり、されば大臣としては兎も角次官としては最も適材であらう、其明晰なる頭腦は頗る數理に長じ豫算委員として、將た決算委員としては、國民黨の武富時敏氏と共に、政府の誤魔化しの利かぬのは改野君である、例年議會に提出される尨大な豫算案が、四百餘名の議員中碌に解し得るものは稀である、而かも一度改野君の前に提供せらるれば直に要領を得るので、豫算委員、決算委員としては、議會に於ける唯一有要の材であるとは、何人も否まぬ所であらう、氏の如きは寧ろ政治家としてよりも更に實業界に起つて、會社重役となれば如何なる大會社の經營でも、社長として専務として恐らく遠算のない適材であらう。

氏は明治十七年縣會議員に擧げられ、常置委員となり、二十三年議會の開設と共に、衆議院議員に當選し、爾來引續き選出せらるゝこと九回、夙に自由黨を標榜して幹事となり、政友會組織以來幹事の要職に在り、政友會中に於ける威名と共に衆議院議員中の鏘々たる人材である。

奮闘の明星
後藤毛織株式會社

後藤恕作君



●大井町の開拓者

東京府下大井町は元大刀合原と稱し茫漠たる原野にして、茅草脚を没し、蕭條たる狐狸の巢窟であつたが、今や都下に於ける一大工業地として、紅塵の街衢となり、大井町と改稱せられ、大倉社大工場は日夜を別たず、黒煙濛々として沖天に漲り、電氣あり、瓦斯あり、其嶄新面目を眩せしむるものがある、之れ即ち後藤惣作氏が、爰に毛織物工場を設置せるの賜にして、數千の町家は氏の工場に依つて、衣食しつゝあるのである、故に人呼んで後藤町と云ふ、元より偶然ではない、而して後藤とは抑々如何なる人歟。

▲後藤惣作とはソモ如何なる人歟

明治の元老井上侯爵が、本邦の實業界に推奨して措かざる處の人物が三人者ある、曰く武藤山治、曰く鈴木藤三郎、曰く後藤惣作氏である、就中武藤山治氏は高尚なる學歴を有し、紡績界の霸王たる鐘紡に入り、斯界の泰斗として今や盛名噴々、而して氏が人格竝に事業經營者として手腕の卓越せるは、滿天下の認むる處である、然れども技術上の手腕に到りては之れを専門家に俟たねばならぬ、更に鈴木藤三郎氏に至つては、身を一菓子屋に起し、氏が發明の腦力は、専門家と云へども及ばざる處であるが、而も事業の經營者として餘りに手腕の辛辣に過ぎ、例令日本製糖會社を組織するや自ら代議士買収の蝨を作り、日本醬油會社を設立するや、有害物を混淆すると云ふが如き、其の權謀術數は、識者の指彈す

る處である、然るに獨り後藤惣作君に至つては、身を僻陬に起し、系統的の學歴を有するにあらず、而も本邦に於ける毛織物製造の卒先者として、自ら製造の技術を研究し、遂に我國の一大工業となし輸入を防壓して國益を圖る、其實際の技術と經營の手腕を兼ね、而も心事の公明にして身を挺して國家工業に貢獻せんとするに至つては、蓋し前二氏を兼ね備へたるものであらう。

▲氏が少壯奮然東京に赴く

氏は揖保郡天満村に生れ、父を與平治と云ひ、酒類仲買を業として居られたが、十一歳母を喪ひ、十二歳又父の追ふ所となつた、爰に於て氏は大阪に出て、居留地カベルジ商會に入つて小童となり、後レアルジュ、ビエーフ商會に轉じ、大阪の商人扇谷五兵衛氏が、同館に關係ありて、深く氏の才を愛し、厚く同氏の保護を受け、後更にキルペー商會に入つて店務を執つて居つたが、折柄明治七年中の島に紙糖製造所が設立せられ、同商會員眞島讓一郎氏之れが所長となるに及び、氏の境遇を憐れみ抜いて同所に入らしめ、情誼の甚だ切なるものがあつた、而して一日氏を慫慂するに、大阪の地は到底大事業を爲すに足らず、須く東京に赴けとの切なる勸告であつたから、氏は奮然志を立て、東京に至りしに、幸ひ當時森有禮氏が米國より歸朝して大に有爲の少年を愛し將來卓偉の人材を養成せんとするを聞き、直に人を介して、森氏の侍曹となることを得た。

▲毛織物製造の動機と研究中の苦心

少額の給與を受け、辛うじて歸朝したと云ふことである。

▲數度の失敗と氏が奮闘

歸朝するや、知人マカテー氏、氏の窮を憐み、清國公使何如璋氏に介して其通譯に登用せしめられ始めて二十金の月給を受け、マカテー氏の沖繩史編纂を補助して衣食の資を補ふに至つた、けれども氏は素より官吏生活に甘するものではない、其間實に煩悶して居ると、折柄清國在住中の知己谷ヶ崎清吉と云へる人が横濱に於て羊皮の柔革製造を開始した、氏は之れを機として廢物の羊毛を利用して原料となし毛絲紡績業を起さんことを説き幸に之れが承諾を得て共同事業となし、更に長野縣の辻某と云へる人が其の熱心に感じて五百圓の出資を仕て呉れた、其處で駒込の阿部邸内に乾柔舎なる工場を設け、初めて舊式の紡錘によつて之れを績がしめ、以て毛織物の原料を製造するに至つた、此即ち本邦に於ける毛絲紡績の濫觴にして明治十三年一月である、然るに時機尙早にして氏が遠大なる抱負を以て開始せる此一新事業も豫想の成果を見る能はず、遂に之れを中止するの已むを得ざるに至つたのである、其後氏は又四ッ谷の某氏より資金一千圓を仰いで縮布の機場を設けたが是又數月にして失敗した、然れ共何とかして素志を貫徹せんものと、偶々銀座の米倉と云へる人に宿昔の志を語つた處が同氏は大に其説を贊し、明治十三年八月佐倉の山崎保氏と共に金二千圓を出資して呉れた、是に於て氏は之れに要する原料を購入せんとして、當時淺草に

而して同年森氏の清國全權公使となるや、氏も亦之れに従ふて、渡清せしが、間もなく森氏は歸朝せられ、氏は乞ふて同地に留り、支那語學の研究に従ひつゝありしが、偶々清國各地に於て産出せる羊毛の常に外國人に購ひ去られ、更に製品となつて東洋に輸入せらるゝの國家の經濟に於て頗る不利なるものあるを觀て、不如、此原料を以て製絨毛織業を起し以て國益に資せんにはと、之れ即ち氏が今日あるの動機である、夫より引續き同地に留つて、之れが研究に着手したりしが、而も森氏に別るゝや自活の途を立てねばならぬ、幸ひ舊知の米人ハーリントン氏が化學者にして染料のことに精しく、北京の同文館に聘せられて居つたので、同氏の助手となり、専ら染液化合の方法を研究した、蓋し斯は他日毛織業の用に供へんが爲めなりき、然るに不幸ハーリントン氏が病氣の爲めに職を辭し、氏も又解僱せらるゝこととなつた、抑々氏が同文館に在るや、極めて菲薄の給料にして、氏が此間に於ける辛苦艱酸は實に其極點に達し、身に衣なく、口に常食なく、僅に一片の元氣を呵して其身を支持し、流離困憊の中に染法の秘訣を習得したのである、其堅忍不拔の志は以て青年の模範となすべく(全體氏は幼にして孤となり、常に貧窮の間に身を處して轆轤落魄の生活を仕た人であるから、食物の調理、衣服の裁縫等、皆て他人の手を煩はしたることなく洋服の如きは、現今に至つても、自ら之れを裁縫すると云ふことである)而して當時同文館を解かるゝや、直に歸朝せんとしたが、悲しいかな永く薄給に衣食して一錢の蓄へどもなく、遂に公使館書記官鄭永寧氏、其他本國出身の人々より

横濱より羊毛を齎し來り肥料に供して居ると云ふことを聞いて、之れを買入れたが誠に微々たるもので到底需用を満すに足らない、其處で觀農局牧羊場の羊毛五千斤の拂下げを受け、業を創めんとしたが其羊毛は貯蔵年月を重ねたもので多く其用をなさぬ、爲めに非常なる損害を來し、重ねて失敗に歸せんとしたが、折柄嘗て北京に於て交際ある北京公使館書記加藤秀一氏が歸朝したので、氏に諮つた處が、同氏が洋銀千枚を出して之れに加入を承諾した、爲めに更らに芝罘白金臺町に羊毛製絲社を新設して専ら絨氈段通の製造を創め、而も前過に鑑み經驗を得ること多く従つて成績稍々見るべく、明治十四年に及び内國勸業博覽會に於て進歩二等賞を授けらるるに至り、嘗て氏が苦心研究の毛織物は、爰に初めて製造することを得た、然るに又復困つたことは之れが販路である内地で之れを鬻がんとするも當時何人も顧みるものはない、米國に見本を送つたが其價格甚だ低廉で此又製造の費用を償ふに足らない、氏は爰に於てか又々失望の淵に陥つたのである、夫れから止むなく絨氈や段通の製造は一時之れを見合せ、専ら水兵のメリヤス、襟巻及び靴下類の製造をして僅に事業の命脈を繋いで居つたが、時なるかな明治十五年に海軍省より襟巻數千本の修繕を命ぜられた、是れ即ち内地製造毛織物上納の嚆矢にして、次で輪絨氈を製して宮内省の買上げを蒙りたる等共に吾國に於ける輪絨氈製造の濫觴である、爰に於て先づ氏が事業の萌芽は發した最早之れで一と安心と思つて居ると却々そうは行かない、意外にも同十五年頃洋銀相場場の變動は海内の經濟界を攪亂して破産の慘禍に罹るもの頻々、

るに至り再び恢復の曙光を認むるに至つた。

▲工場に移轉と業務の擴張

偶々横濱同社に於て大崎村に在る毛織工場を賣渡さんとするや、氏は即ち之れを買受けて茲に赤染毛織物の業を興し襟巻及毛絲の製造を擴張し其他種々の毛織物を發明して、初めて大發展する事となり、石井某の賛同を得て二萬圓の合資組織を以て東京毛布製造會社を創立し明治二十年横濱グロツセル商會より一臺の紡績機械を買入れ鍾量三百六十織機一基八馬力を備へたが不幸にして二十一年の恐慌により販路壅塞して至大の損失を醸すに至つた、そこで翌年海軍の銃砲用毛布を製造せし一毫の利益なく二十二年の末には資金二萬圓は蕩盡したる而已ならず尙巨多の負債を生ずるに至つた、是に於て石井某は此事業を断念して其社務の全斑を氏に付與して之れを顧みない、而も熱心なる氏は獨立經營を爲して漸く二十三年頃より着々恢復して二十六年より社運勃興日進月歩の好況を呈し、石井氏に向つて前の出資を償還し且つ之れに三萬圓の謝金を呈することを得たる而已ならず、氏の製品は一層社會の歡迎する處となり京阪兩地の有名なる毛織物商人は聯合して信友會なるものを組織し氏の製品販賣の特約を爲すに至りしを以て、二十七年には更に規模を擴張して機械百二十餘機二十一臺を増置した處が又々同年日清戦争となり販路忽ち閉塞して再び蹉跌を招かんとするの虞れあるより英敏なる氏は、軍需品の製造に従事し反つて莫大なる利益を收得した、此間に於ける氏が商運の興隆顯著にして、二十九年

提携者の山崎米倉の兩氏も又之の禍中に投じて仕舞つた、加ふるに加藤氏は再び北京駐在を命ぜられて赴任したので、氏は自ら孤城を守らなければならぬ、實に此間幾多の波瀾曲折と闘つたが、而も堅忍不拔の氏は毅然として奮闘を繼續し引續き事に當つたのである。

▲後藤 赤

氏は嘗て清國在留の時より染液の秘法を研究すること爾來一日の如く、特に緋金巾の染法が未だ我國に行はれざるを慨して、此れが發明に勉めて居つたが、或る時色素「アリザリン」を獨逸より取寄せ、之れを試みた所が極めて良成績を得た、爰に於て毛織物の一部に加へて、木綿赤染の業を初めたりしが此亦木綿は後藤赤と唱へて海内太物商の激賞する處となり、遂に大に世の嗜好に投じたのである。

▲毛織物の新發明

天の大任を斯人の下さんとするや先づ其心思を苦しむと云ふことがあるが、此言は實に氏によつて一層適切に感せしむるもので、天は又何所迄氏を苦しむるものであらう、折角苦心慘憺たる舊據の羊毛製絲社の工場は明治十七年九月暴風の爲めに破壊されて仕舞つた、然れども堅忍不撓の氏は又々恢復の策を圖り、假りに工場を修築して染液の部は一時中止して羊毛製絲を専らとなし、是より研究の結果は人工毛革メリヤス、毛布、ヲーステット、の如きものを發明して之れを售つた處が幸にも品質の良好なるより、遂に大に世に用ひらる

の末に至つては五十萬圓の資金を有するに至つたこの事である。

▲ヲーステット梳絲製造の嚆矢

是に於て明治二十七年資本金二十萬圓を以て日本毛布株式會社を組織して尨大なる工場の建築、機械の据付等を終り陸海軍の用途、市場の販賣に供する毛布の製造を營み來りしが多數集合體の大事を爲すに足らざるを知り、自ら大半の株數を獨占し、二十八年ヲーステット梳絲紡績を開始せんとして此の機械を歐洲に注文せしに、歐人は吾が國に技師乏しきを難じて失敗を取らんことを願慮し色々勸告したりしが氏は自ら信する處あり、遂に二十八年三月梳絲千錘の機械を獨逸より購入し氏自ら之れが技師となり非常の好成績を示したのである、元來梳絲の製造は吾國に於ては未だ端緒だも開きたるものなき新事業であるから氏が之の技術に至りては内外の賞讃して措かざる處であつた。

▲工業視察の爲めに歐米漫遊

氏は二十九年一月工業視察の爲めに海外の航遊を企て歐米各國を巡覽して同年五月工業上の新智識を齎して歸朝せられた、初め其程に上らんとするや、氏は留學の修養充分ならざるの故を以て、佐野三氏の歐洲に航するを機として氏に同行を乞ひ相携へて横濱を出航したのである、而して桑港に着くと同地の豪商、アイザック兄弟商會が元同地の工業界を睥睨し數百萬弗の資本を以て設立せる、カリホルニヤ製絨會社が倒産の非運に陥り、同機械を賣却せんとするを聞いた、而も此機械は原價三十萬弗以上にして精緻輕捷なものであるが今は之れを數萬弗にて賣却すると云ふ、氏の爲めには途上の寶玉、歸途に於て之れ

を購入せんことを約して終に市俄吉、紐骨を経て歐洲に向つて出發した、然るに倫敦に着いた處が故あつて佐野氏と其袂を別つに至り氏は全で啞者が絶域に棄てられた如うなものである、止むなく獨逸のハンホルクに在る知人を訪はんとして、同地に至る迄自分の胸間に紙片を貼つて、ハンホルク行記と、沿線の驛長に傳遞を乞ふて居つたが、在英三井物産の渡邊次郎氏が其困難を察して嚮導として小舟を附けて呉れたので大に安心をなしたと云ふことである、此他洋行中の奇談が頗る多いが、之れを略するとして、再ハンホルクに着いてイリス商會のホルム氏と共に獨逸聯邦を視察することとなり、氏が親切に通譯の勞を執つて呉れた、ソコで先づブレーメンに至り、三四の羊毛問屋を調べて各工場を視察せんとしたが、多くは拒んで視ることが出来ぬ、僅に右の羊毛問屋を介して、ブレーメン製造所を一覽し、翌日伯林に着して公使青木周蔵氏に謁を通じ各製造所視察の便宜を求めたが公使は名を多忙に藉つて面會を謝絶した、けれども氏は獨逸の毛織紡績製織の事業は最も我が今日の國情に適當するものであるから、爲めに應々來遊した旨を告げて、再三懇請したけれども、公使は遂に峻拒した、然るに元九鐵の技師ロムセル氏が種々斡旋して呉れて二三の工場に至つたが皆拒絶せられ、ソコで一方便を設けて表面織布の買入に託して以て内部の製法をせんものと、有名な、ルードルフキウネ氏の製造所に至り、數種の機械を購ひ繰羅紗及び平面羅紗の工場を視ることを得、同氏の紹介で、カーハットの工場を一見したが氏が日本人であるから謝絶せられ、進んで肩掛けの製造所に至り代價八千圓の物品を購入して其工場を視、後ホツケル氏の織物會社を一覽し、同所主人に伴はれて織物學校の詳細を參觀することを得た同校の參觀は氏を益したるもの極めて多く、歸朝以來今日に至る迄應用して利益を得たことは甚だ少なくない、次いで婦人の裝飾物製造所を一覽し天竺絨、毛切絨、メリヤス製造所の如き、或は模倣毛布製造所絨織の仕上場等各一覽して、ブレーメン製造所の招待を受ける等其製造場を見ること數十箇所多きに及び、猶太人の工場に至りては、工場に織物の畫圖を探り之れを利用して、將來米國向きの輸出品製造の資料に供せんとし、殊にゲテルベックに遊びては各種の工場に就いて毛織染の方法を研究し（歸來之れを應用して工業界の一新生面を開くに至つた、蓋し從來吾國の工業家は、絶て之の方法を知るものなく時に之れを模倣して成績完全ならず、人皆之れを憚みとして居つたが、現今國

造して之れを引取り、工場を二萬五千餘坪となし、鐘數六千五百、馬力六百を算する一大工場に擴張したのである。

▲資本家の壓迫

氏は是より先き、口清戰役の起るや三井物産の手を経て、馬政局へ鞍下毛布を納入し、又同社より支那及各國輸入の原料羊毛を買入れて居つた處から、同社の益田孝氏と協議して歸朝後同三十年より三井物産に對して氏の製品の委託販賣を協定し、當時三井より三十萬圓を限度として出資するの約束を以て、三十三年迄繼續して來たが、三井の毛織課長磯村氏が、他に轉じて後繼者が販賣方法を誤り、多くの製品滯滞して、金利倉敷等増嵩し、不渡手形を受け入れ、之れによつて氏の損害に歸せしめたものが三十八萬圓に及び、終に三井と解約をすることゝはなつた、然るに一面明治三十二年に氏の工場は家族の合資會社として、同時に三菱銀行より七十萬圓の資本を借り入れ、經營して居つたのであるが、偶々前記の悲運に據つて、三十四年に貯藏の原料價格百四十萬圓を八十五萬圓に處分し、三井物産の方では製品價格三十八萬圓のものゝを、僅か十八萬圓に賣却したと云ふ始末にて、合せて七十五萬圓の缺損となり、後清岡邦之助氏が、三菱の代表者として入社し、氏も又自ら業務擔當となつて、専心整理すること共に經營して居つた處が、滿一箇年ならざるに、更に三菱に對して二十三萬圓の負擔が増加した、其處で止むなく氏が多年苦心慘憺經營擴張し來つた處の、氏の生命たる該工場は一切を擧げて、三菱に提供を迫られ、氏は爲めに元の木阿彌とな

製の色織一般の市場を支配して輸入品を防壁するに至つたものは、全く氏が此行に於ける研究の賜である（後轉じてケムニツに至りサクソレ、ハトマン氏の機械製造所を視察した、是れは氏が獨逸航行の唯一の目的にして、同地は同國一等の毛織物製造地である、細大之れを巡視して其壯觀に驚き大に得る處があつた、留留七日、再びハンホルクに出て、同地ラウシエ會社の招きに應じてコーミンゲ製造所を一覽し、更にケムニツに次げる工業の勝地として綿毛交織を以て名ある、レミツションに至り其見本羅紗織物の多きを購ひ、ラインバーに至りては、フランネル及カシメル製造所を視察した、カシメルは由來吾國のモスリン製造に適當するものであるから拒絶せらるゝあるに拘はらず、懇請して熟視其秘法を窺ひ、次でケムニツに歸り代價六萬圓の機械を購ひ、アールミストの、フランネル、メリヤスの工場を視て機械數を購入する等、爾來各地の工場を巡視して己に其大半を了つて居つた處が、偶々獨逸工業同盟新聞が、目下當國の製造工業を著げんが爲めに、東洋人一名來つて各所の工場を巡視して居る、是れ當國製造者の最も排斥すべき剛敵であるから、必ず之れが窺覽を許すべからずと云ふ怪しむべき記事掲載した、スルト各工業同盟の團體は同時に俄各地に飛ばして全國各地に此事を告知したものであるから、止むなく氏は急に歸朝の決心をなし、ライン河を渡りてコロニンに至り、船管製造所を一見し、ヘルメスターを経て、白耳森に入り、佛國巴里に着し、仔細に其工業を視察して、倫敦に歸り米國紐育に着し、同地卸小賣仲買の商關係を視察して同年五月二日に歸朝したのである。

▲歸期後の大計畫

歸朝後從來の事業を見ると悉く幼稚にして歐洲各國の工業を視察し來れる雄大なる新思想は殆んど兒戯に類するが如くである、是に於て歐洲にて購ひ來れる器械の着するや、百般の改良を加へ、尙嘗て桑港に於て購入を約したる、アイザック兄弟商會の機械を二萬弗を以て買ひ受け、後技師五名を派

り、殆ど衣食にも窮するの境遇とはなつた、故に氏の親戚知己は集合して氏の爲めに説いて曰く、畢竟斯る境遇も全く三井三菱の壓迫に依るのであるから、如かず三井三菱に哀願して之れに服従したなれば、之れ獨り一人の利益なる而已ならず家族を初め數千の職工は皆爲めに活路を得るであらうと然れども猶介不屈硬骨稜々たる氏は、敢て資本家であるからと謂れなく屈するものではない、故に微笑して曰く我が多年心血を濺いで作り上げた處の機械器具は横暴なる債鬼の爲めに奪取せられた、然れ共彼等と云へども余が毛織業の抱負と手腕は奪ふことは能きぬ、余が生命だにあるならば、必ずや獨力回復するの時がある、斷じて彼等に服従願使さるゝに忍びない、直に弊履を捨つるが如くに工場一切を提供すること共に爰を退去して品川の硝子工場跡に移つた、是れ即ち明治三十五年の五月である。

此時に當り年來使役し來つた處の職工を放任するに忍びず更らに獨力絹ショールの製造を始め、他より一萬圓の資本を借り入れ、殘餘の毛織機械を拾集して現今大井町の鐘が淵に四百餘坪の工場を起し、白毛布を始め必要毛織物の製造に着手した處が、幸にも非常の好況を呈し日露戰役の起るや、軍用毛布の製造に着手して更にシモンエバスより紡績機械を、ラスベ商會より諸器械を購入して大々的に擴張の結果は、三十八年に九十萬圓、三十九年に百二十萬圓の賣上げに達し、同年四月資本金三百萬圓を以て更らに後藤毛織物株式會社を組織した、世人が氏の大々的手腕と人格を認識したのは即ち此時である、何となれば三井三菱は金力を以て高壓的手段を

加へ、氏を願使して毛織物業を興断せんとするの計畫であつたが、硬骨なる氏は之れに應ぜざる而已ならず、自ら更に獨立して而も其附近に於て事業を興し、旭口騰天大發展を來したるに拘らず、三菱が壟斷した處の工場機械は萎微として振はないと云ふに至りては、何と快心の事ではないか。

▲同會社の現状と工場整理

其後氏は改良に改良を加へ、大々的規模を擴張して今や工場敷地三萬餘坪我國に於ては未だ富士三菱製紙所の外に應用せざる、モント瓦斯、サキソン瓦斯の動力を利用し、七千錘の織器を据付け、數千の職工を準備し、其工場機械の設備の刷新にして、整頓せることは遙に歐米の毛織物工場を凌駕するの概がある、編者一口氏を訪問して親しく氏と共に同工場を參觀したが、原料羊毛の自働巡環器によつて晒され或は染色しつゝある、或はオイルドルフ注油機によつて、油を注いで散亂を防ぐ處、又は屑絲の製毛機並に真空の乾燥室、原料の自働供給器、自働のミール、製紡機、整經機、自働の糊機、ガーネットの屑絲直し等、其完全なる設備に至つては一驚の外はない。

▲氏の同情と職工の待遇

更に茲に特筆すべきことは、氏が技術上の手腕と職工の待遇である、氏は前にも述べた通り多年困苦窮乏に堪へて、毛織物業の研究をした本邦の元祖であることは勿論、従つて斯業に關する一切の技術は何れも氏自ら手を下さないものはな

い、詰り氏が自ら研究して之れを職工に授けた人であるから工場を巡視しても細大となく其長短を指摘する、随つて他の工場會社の如く、技師任せとは趣きが違つて居る、故に同會社には技師も技師長もなく、氏自ら社長ともなれば、事務長ともなり、又技師長技師技手ともなつて、之れを處辨し、斯くして他の會社に要する技師技師長の俸給は之れを各職工に配與する、故に一人の月給は僅に數千の職工を慰めることが出来る、氏は又多年辛酸困苦の生活をした人であるから他人に對する義理に厚く、人情に通じ、殊に職工に對しては自ら共に居る全くの家族主義である、故に職工の氏を見ること慈父の如く、他の會社等に於ける職工の如く壓制監禁のものとは雲泥の相違である、之れを他の會社に觀るに職工は全然機械の如く、彼等も又快々として樂しまない云ふ有様で、轉た同情に堪へないものがあるが、氏の工場に至れば、各職工何れも怡々として樂しみ自ら業を勵んで居る、洵に理想的の工場にして、同工場には全く工場法案の必要もなければ又社會主義の容喙する餘地もないと思つた。

更に業務の擴張を圖つて居られるが、尙將來に於て發展の偉大なるものあるは、蓋し氏が如上の經歷に徴して之れを疑はぬ。
▲真正の實業家青年者の好典型
以上叙し去り叙し來りたるが如く、氏は全く堅忍不拔力戰奮闘の結果遂に今日に至れるものにして、彼の一朝の風雲に乗じて一攫萬金の巨利を博し、或は權門に媚び、勢家に諂ひ

又は政府者と結託して不當の利益を貪りたるが如き、卑劣醜汚なる當世風の實業家とは大に其選を異にし、而も事業は他迄國家的にして、幾多の艱難を闘ひ、幾年月の勞苦に耐へ、悍然として萬難を排し悠然として百事に處し、而して能く不撓不屈の精神を持続し來りたるもの、所謂風に傲るの老松、濤に擊たるの巨巖、寔に是れ人界の偉觀にして、氏が性行の一斑は、當今の弊風たる薄志弱行の青年者が好典型として敬仰すべき人である。



電光將軍 龜田介次郎君

冒險は男子の一大偉業である、人世五十浮世夢の如し身は蟬蛻を學んで生を大塊に寄す、坦々たる大道を踐むも一時にして、崔嵬たる高山を攀るも亦一時である、軟風千里平波浩漾の長江に泛んで悠々鴻雁に伴うと、激浪狂濤天を蹴り巖を嚼むの大洋に航して、風雷雪霰、變波極りなきの偉觀を賞するものと、其風流は果して何れであらうか、險難平易、共に人世の行路であるとすれば、寧ろ其險を冒して以て其奇を探るの佳致あるに如かんやでないか、深嶺大澤の人跡到らざる

が如き地に、虎穴あらば進んで其虎兎を得べく、亦碧流千仞の深淵に、蛟龍あらば入つて其領珠を攫む、而して虎子と領珠を獲れば、是れ冒險の報償にして、即ち男子の偉績又此より壯快なるものはない。
龜田介次郎君は印南郡會根村の素封龜田五市郎翁の次弟にして、相當なる遺産を受けて優に實業に従事するの資力を有したりしに拘はらず、旋乾轉坤の偉才は、邊隅の小天地に踞踏として一生を空することを好まず、騰躍の志は猛然として

終に少々堂島に抵りて投機市場の人となつた、然るに事志と違ひ僅に數年の間に於て殆ど全資力を蕩盡するに至りしが、他迄堅忍にして亦飽迄剛毅不屈の氏は、更らに颯爽を大都に伸ばし以て一大雄飛を試むべく、意を決して蝸殼町に募入し一勝一敗身を危機一髪の間處して、輸贏を轉瞬の間に決し一大活戦の場裡に立つて戰酣なる事四十年、其間神籌奇策遂に其功を奏し雄然として一方の部將となり、電光將軍の綽名を以て、聲名隆々其雄を天下に誦はるゝに至つた、蓋し世の相場師と稱するもの、一時聲名の赫々たるものあるも多くは之れ浮雲の如く霧消して、其の大を終りに全うするものは稀である、然るに氏の如きは近時成金黨と稱するものと其趣を異にし愈々麻も得て愈々大に、遂に終りを全うせるに至つては、其間自ら其手段の尋常ならざるものあるを想見するに足るべく、氏をして一言に評すれば相場師の實業家である、故に世の投機者流の如く浮華豪宕の態度にあらずして、寧ろ吝嗇に近き保守的の性を具へて居る、之れ即ち氏が今日ある所以であらう。

氏が經歷の詳細を擧ぐれば、必ずや龍拏虎擲、筆端雲起り風生するの奇觀やあらん、亦掀天翻地、日月に薄く鬼神を驚かすの偉績もあらんと、著者一日氏を訪ふ、然るに『氏曰く余は少年の頃より頗る危険の事而已を好み、投機を以て殆ど生命と心得、一日たりとも之れを離れては一向に快味がない故に四十年來常に危機一髪の間のみ出入した、而して近來病癖にあるを以て親族より最早断念してはどの勸告もある、けれども之れを止めては生きて居つても無意味であるから今

に引續き行つては居るが、其間随分困頓流離の境遇に陥つた事もあれば、又揚々得意の時もあつた、併し要するに余が一生は冒險の歴史であるから、世の青年子弟に讀ましめては、反つて架空の妄想を誘起する媒介となつて其一生を誤らしめる事になる、故に折角であるが如何か記載せぬやうにして貰ひたい』云々

近時聞く處によれば、印南郡には氏を初め二三投機界の成功者を出したるが爲めに、同地の小學生徒に向つて未來の方針を問へば異口同音、相場師になると云ふさうである、之れ實に山々敷一大事にして、此れを以て觀るも地方先輩の感化程世に恐るべきものはない、併し人の通有性として投機心のあらざるものもなく、故に吾人は明りに之れを矯むるの愚なるを知る、然れども氏の如きは畢竟幾萬人中に傑出せる一人にして、而も神籌畫策萬人の企て及ぶ事の出來得ざる才幹あり、加ふるに生死窮達の境に出入して千辛萬難、遂に病を醸すに至るも尚且つ身を忘れて苦闘せる、其性行其苦心は到底他の凡庸の測り知るべからざる處である、故に之れを是れ察せずして妄りに其轍を追はんか、必ずや失蹊敗跌亦起つ能はざるに至る、乞ふ讀む人心せられん事を。

▲愛甥寅吉君

氏は翁の愛甥にして五市郎氏の次男である、東京高等商業學校を卒業して、今やカプトビル會社にあり、翁と性行を異にし着實一偏傍ら翁の家政を補佐しては居られるが投機心杯は毛頭ない、溫良にして常識に富み後來大に囑望すべき新進の實業家である。



東京株式取引所仲買人

加藤 徳三君

一動一靜機を窺ひ、一進一退利を争うて、輸贏を轉瞬の間に決するものは、是れ投機界の常である、蓋し勝を占むれば忽ち榮達巨富の身となり、敗を取れば直ちに窮辱赤貧の人となるのである。

縣下の出身にして漂然東都の投機界に遊び出し、遂に一方の霸王として一時斯界に時めきたるものは、濱野、龜田、加藤の三氏である、濱野の豪放、龜田の沈毅、而して氏は是の兩者を折衷した人で、兎も角邊陲の加古郡より裸一貫で身を起し、神算妙籌一時兜町を席捲して、更に進んで事業界に入りり世間の耳目を聳動せしめ、花々敷活動を演じた氏が半生の經歷は、到底凡常の企て及ばざる才幹のある人であることを證據立てゝ居る。

然るに盛者必衰の道理は萬有の免れざる處で、況んや投機界に於てをや、氏は一朝事業界の失敗によつて、近時杏として不遇にあるものゝ如くではあるが、而も氏の英邁豪毅なる成敗によつて其志を動かすやうな小人物ではなく、現に東都

の市場に活躍して居られる、氏の如きは苟も性情を有する以上は必ずや、捲土重來往時の殷盛を繰返すことは餘り遠き將來ではあるまい。

氏は加古郡別府の産で同地の北儀といへる商家に丁稚奉公を勤めて居つたが、齡十六の時、故あつて附近某旅館の養子となつた、時に同旅館に宿泊した大阪の某肥料屋がある、蛇は寸にして人を呑む、氏は弱冠ではあるが志常に遠大を極め何とかして出世の端を啓かんと専ら此事をのみ心懸けて居つた際であるから、此の肥料屋に對しても販賣上種々の獻策を施して大に歡心を求めた處が、肥料屋も又氏が機才を愛し遂に販賣の一部を託する事となつた、託された氏は勿論腹に一物ある上の仕事であるから早くも肥料屋の與みし易きを看破し、遂に幾分の米穀を提供して、尠なからざる肥料の貸與を請ひしに肥料屋も之れを諾し、直ちに同地の酒造家橋本某に諮つて五十俵の米を借受け、船便に託して大阪の肥料屋に送り豫約の肥料を積送ることゝ日々待つて居つたが一向に送つ

て來ぬ、遂に氏は自ら大阪に抵りしに圓らざりき同肥料屋は破綻に瀕して、今や之れが前後策につき額を鳩めて凝議して居る眞最中である、事情を聞けば氏が送つた五十俵の米は何とか挽回したいと思ふて、堂島で相場を張つて居ると云ふ、斯くの如き有様であるから其の不徳を責むるも最早遅い、乃で更に同肥料屋と協商の上、米相場に手を出し二兩三步の米を買つた處が、又之悉く失敗に歸した、斯くの如くにして初めて定期界の趣味を覺わ、其の後十八歳の時初めて堂島に仲買店を開いて大に輸贏を決したが、更に重ねて失敗する而已遂に裸一貫となつた、最早大阪の地も成功の餘裕がないので飽迄堅忍なる氏は遂に東京に向け出發せんと決意し、色々少許の旅費を調へ海路を東上せんと思つて神戸に來ると、一人の友人が共に東京に行きたいと云ふ、而して彼は無一物である、止むを得ず氏が用意の旅費で徒歩することとし、漸く十有一日を費して着京した、着くと同時に兄の知己なる蠣殼町の細河伊平氏を訪ひ事の始末を具さに語りて知友と共に同氏方の食客となり、傍ら店務を助けて居つたが、常に胸中自から多大の劃策を抱藏せる氏は、遂に二十歳の時(明治十年)初志を貫くことが出來て、蠣殼町に一仲買店を開いた、爾來奮闘活躍變通の偉才は、能く商機に投じ、遠觀の眼光遠く人の意表に出で、戦へば捷ち攻むれば取り陸然として奇利を博し、明治二十五年頃には一方の雄將として語はるゝに至つたのである。

叙上の如き結果に依り巨多の富を贏ち得たる氏は更に事業界に遊泳を試みんと欲し、麥酒醸造技師鮫島盛氏が醸造の事

を以て氏に謀るや氏は之れが資本家となり、湯島に醸造所を設けて熾に事業を開始せしも、當時尙ほ嗜好の幼稚なる時代なりしかば、爲めに該事業は不幸失敗に終つた、夫れより百三十二銀行を獨占して自ら社長となりて之を經營し、更に水産株式會社を創設し、傍ら札幌製糖會社及び東京麥酒會社、並に品川銀行等、幾多の大會社を創立して自ら社長重役となり、或は房總鐵道社長東京商業會議所議員、仲買人組合委員等に推舉され、一時聲望隆々たりしも種々の障礙のために、遂に失敗に終りしは單り氏の爲め而已ならず亦事業界の爲めに遺憾とする處である、故に氏の敗衄は決して定期にあらずして孰れも事業界の失敗である、而して其起因する處多々ありと雖も、一つは何れも氏の着眼はアマリに早きに過ぎ、所謂時代の調和を缺いたからである、然れ共氏の創業に依つて現今成長して居る會社及銀行の多きを見るも、氏の功蹟や蓋し没すべからざるものがある、而して氏が氣骨の稜々たる眞に男らしき男である、嘗て氏の破綻當時に於ける自己の資財は擧げて之れを債權者に提供して毫も遺す處なく、其心事の光明なる行動の壯烈なる、大に世人の同情を博し今に一つの美譚として傳へられて居る。

斯くの如く幾多の浮沈曲折を辿つた氏は、今や再び兜町に仲買店を設けて輸贏を決して居られるが、氏が前途の光明は蓋し叙上の經歷に徴して之れを疑はない。

辯護士 平岡萬次郎君

世の中には兄弟打揃ひ傑出して居る者も往々見る所であるが、其人物性格より風采其他總てに至る迄相酷似して居る平岡氏兄弟の如きは未だ曾て見ざる所である。

氏は即ち定太郎氏の令兄にして印南郡志方村の一農家に生れ、夙に學問に志し、東都に出で、専修學校に入り、明治十六年卒業して直ちに東京に辯護士を開業して居つたが、後石川縣專門學校の講師に聘せられて二十一年迄教鞭を執り、同年再び東京に戻りて辯護士となり以て今日に至る、氏は故高橋健三氏と交り甚だ深く、明治三十年郷里より選まれ代議士となるや故神輿知常氏と意氣相照し、遂に同氏を介して進

歩黨に入り、其後引續き當選する事四回、常に雄健なる主義主張によつて終始して居る人である、氏が人格及び其識見の衆に秀抜して居ることは既に世に噴々たる所で、故高橋白侍や、神輿知常氏等との交り深かりし一事を以てするも其一斑を知る事が出来る、頭腦は明晰で性は温厚篤實、東京辯護士界の先輩として鏘々たるものである、又能く青年子弟を愛撫し、地方青年の東京に出づる者總て氏の門に雲集すると云ふ有様肥塚龍氏と共に地方青年の指導者として推稱せられて居るが如き、地方の爲め又後進子弟の爲め甚だ多とすべき人物である。

樺太民政長官

平岡定太郎君



(明治四十三年十二月稿)

播州の地は維新の際に於ける風雲の落伍者として主觀的人物に乏しく、従つて地方勢力の振はざる所以である、之れ

吾人が常に憤慨する處、今や偶々新進有爲の行政官として平岡定太郎氏のあるを歡ぶと共に氏の將來に向つて大に囑望す

兵庫縣人物史

平岡萬次郎君

平岡定太郎君

る所以である。

氏は平岡萬次郎氏の令弟にして、夙に東京に遊學し明治二十五年帝國法科大學を卒業し、其成績頗る優等なりしを以て寧ろ學者たるに適すとなし、頻りに之を德憑するものありしも、氏の性癖氣に富み大學の偏隅に生字引となつて生を畢るを潔とせず、茲に於て直に内務省に入り、尋いで徳島縣參事官、栃木縣警部長、内務省書記官兼衆議院書記官、高等文官試験委員、内務省參事官等を経て更に、廣島、宮崎、大阪府の書記官に歴任し、後福島縣知事に進み、前樺太長官熊谷喜一郎氏が、施設を誤り爲に朝野の反對を受くるや、氏は前内閣の末路に當り、原内相に拔擢せられて其後任となる、然るに内閣は更迭し氏の任亦久しきに涉ると雖も、何等の批難もなく、又失政もなき所を以て見れば、其手腕勢望の程も推して知る事が出来る。

元來樺太は發展の望み少しとして目されたる所、然るに氏が一度長官たるに及び、各種施設の歩を進め、着々として進歩發展の域に向ひつゝあるは、之を國家の爲に賀すると共に亦氏の功勞を多とせねばならぬ。

時偶々帝國議會の開會中、氏が上京せられたるを聞き、編者は日本郷丸山町の寓居に訪問したが、其態度と云ひ、應接振りと云ひ、性の濃厚なる上に磊落にして且爽快、一見舊知の如く克く語り克く談じ、殊に播州人には珍しい氣骨の稜稜とした人である。

左に氏が樺太經營談の一斑を掲げて、一は氏が長官たるの紀念となし、一は世人の參考に供さんとす。

▲氏の樺太談

樺太も着々發展して來ました、財政に就ても國庫金の補助は五十萬圓であるが、歳計總額は二百萬圓を超過して居る、其主要財源として、漁業並に郵便鐵道等の收入である、而して本縣經營費は比較的多額の觀あるやうであるが是れ島勢未だ自治體を組織するの域に至らず、隨て内地に在ては當然府縣町村の如き、自治體的の性質を有する經費が半を占めて居るに因る、故に余は自治的要素の培養には最も努めて居る處である。

樺太の經營上施設すべき事業は固より鮮くはないが、鐵道の敷設及港灣の修築は最も急務である、今や拓殖鐵道も其緒に就き、第一期線たる豊原大泊間(二十五哩)は愈々十一月六日を以て開通した、又四十四年度に於て更に豊原より北海岸たる榮濱間の全通を見る豫定である、尙進んで伏瀧支線を敷設(十三哩)し、拓殖と相俟て貨物の吞吐港たる大泊に應急的設備を行ひ以て海陸の連絡を謀り、更に豊原を中心として四海岸との連絡、夫よりマエ山道を越る東西兩海岸を貫通せしめる積りで其他は何れ十數年後の施設に譲らなければならぬが、豫定線完成の時は拓殖移民に與ふる便益の至大なるものがあるであらう。

港灣に就ては余は大に胸算なきに非ざるも、應急策としては既設港灣に必要なる改修に止むる方針である、即ち大泊港は將來築港の前提として該市街の南濱に防波堤を築くべく近々工事に着手の考へにて、眞岡港の開港を企望するものあれども同港は岩嶺多し之に反して、其南方二十哩のトコホ港は避冬と云へども凍結せざる而已ならず、内地との連絡、附近に産する石炭其他物資の搬出上缺くる所なき其港なると共に、北方なるウシロロも亦中分なき其港で、將來西海岸の二大真港として大に發展するであらう。

移民は年々三百戸の計畫であるが、其約半數は保護金を受取り逃亡し或は北海道等に行く者があるから計畫通りに行かない、來年度より七百戸宛移民せしむる計畫であるが、是れさては約半數を減し得れば成功である。

漁業の漁區は其漁獲期たる四五月に於ては其實買價格は三倍位に騰るし、權利の賣買を目的とするもの多く、實際漁業に着手せず中途に漁權を放棄するものが多い、從來樺太漁業と云へば、鮭鯉鱈の捕獲を目的としたものであ

るが、本年より冬季水上漁業の法を發明し、雜魚の捕獲に従事するもの漸次増加して來た、蓋し樺太漁業の一進歩である。

石炭は樺太總に於て試掘中であるが、其試験の結果は稍良好にして、約八萬噸の産出を見るに至り、一噸に付約三十錢の利益がある、併し餘り大規模にやれば、失敗の虞れがあるから、當分は現狀を維持する積りである。

又化學工藝は乾餾、蒸餾、醸造の三方面に、其歩を進め、醸造は調査の結果其成績の良好なるを確めたが、蒸餾は今一期試験を要するし、自然分秘法は、強壓搾取法に劣り殆ど二割の差があるやうである、乾餾は目下工事最中であるが、最も森林を消化する力と、移民に對する影響の甚大なることは乾餾に及

北海道拓殖銀行の首腦者

頭 取 美濃部 俊吉 君
副頭取 永濱 盛三 君

(明治四十三年十二月稿)

物に新陳代謝の理あり、而して今明治財界に於ける人物を通觀すれば、第一期時代は既に去り、今は第二期人物の時代にありと雖も、然も代謝の期漸く迫り、而して第三期の新時代を迎へんとするに當り、轉た人材の乏しきを感じざるを得ない、然るに此乏しき人材の中に於て嶄然として頭角を顯し現に重きを爲すのみならず、前途に對して多大の望みを囑せられつゝあるものは、北海道拓殖銀行に一は頭取として、一は副頭取として翩翩しつゝある美濃部、永濱兩氏の如き先づ確に指を屈すべき人物である。

兵庫縣人物史 美野部俊吉君 永濱盛三君

美濃部氏と永濱氏とは共に播州の出身にして同じく明治の時代に生れて明治の教育を受け、共に歐米に遊んで世界的の智識を吸収し、何れも實務上の經驗あり手腕あり、頭腦も亦明晰、今や相並んで北海道拓殖銀行を統裁し、隱然我財界に重きをなしつゝあるは、明治財界第三期人物界の爲に意を強うするに足る而已ならず、復我兵庫縣下の後繼的人物として縣下人物界の爲に慶祝の至りである。

著者は或日美濃部頭取を日本橋青物町の同行支店に訪問して頭取室に導かれると、幸に永濱氏も上京中で、兩氏相對し

何事をか相談中の所であつた、美濃部氏は年漸く不惑を越
わたる許りであるが、頭髪は白髪々々、併し顔付は頗る若く、
而して中々議論の多い人である、編者の主張に一々反對せら
れたが僅に一つだけ功成り名遂げたものが郷里に歸住して地
方の爲に盡力すると云ふことは大に賛成である、僕も松尾男
の如うに成功したなら屹度高砂へ歸ると云ふ事は今から君に
約束をして置くこの事であつた、夫れから此機會を利用して
我國の寶庫と稱さるゝ北海道のことを少しく紹介して置くの
も世に裨益する所あらんと思ひ、即ち余の北海談を需めるに
應じ徐ろに語つて曰く。

▲美濃部氏の北海道談

彼の和蘭國に於けるが如く海面より低い土地にして尙人工を以て完全に開
發せられて居る所を見れば、人工の如何によつては北海道も隨分開墾の餘裕は
ある、而して先づ現今の處で開墾を爲し得べき豫定の面積は僅か百五十町歩
で既に開拓せられたるものが僅に五十萬町程であるが、現今の状態では之を開
墾すると言つても何れも森林を伐採して其跡を開くのであるから開墾するより
は寧ろ木を伐り拂ふのが困難の有様である、而して運搬の便利上多くは露中伐
採を常として居るが、雪の五六尺も積つて居る處を伐るのであるから雪に埋つ
てある部分に残る、こゝになる、故に雪融け後になるに到る所に其樹木の幹が現
れて来る、恰も開墾後の年數を知らんさするには此木の株の腐り加減を以て判
断することが出来る、而して其伐り倒したる木は運搬の不便は利用の途なく、
諸り廢物に歸しつゝあるのは洵に惜むべきことである、山林の如きも濫伐の結
果最早材木が盡きたるやうに言ふ人もあるが、今は現今鐵道の便利ある地方の
みで、根室から後志方面に至らば未だ人跡の至らざる處が澤山ある、現に角北
海道の開墾と言ふこゝに就ては運搬の便利を與へるのが最も急務である、十月
頃の雨期に至れば泥濘馬腹を没する云ふのが單に支那人の形容詞のみではな
く實に北海道の状態を穿ら得たるものである、故に物の運搬處ではなく、第一

樺太、旭川、小樽、函館の五箇所に存し一般銀行業務と農工銀行とを兼ねた如
うなものである、預金も七百五十萬圓程あるが、何分政府の保護があると共に
監督も又伴ひ、而して拓殖上の機關と云ふのであるから、最も其方に留意しな
ければならぬ又株主へは相當の利益のあるやうにと思へば、三方に姑があつて
却々骨が折れます。

兩氏共に春秋高く郷里を出で、年未だ淺い、從て事情にも
悉しければ又趣味も多く、郷里に對する訓戒談もあれば發展
策や刺戟談なども承ることが出来た、而して談は尙深々とし
て盡きず、果ては竹馬の友から近伍の太郎兵衛や、八兵衛の
話し迄が出て増々もなければ懸隔もなく、心易く打寛いての
快談に心酔して時の移るを覺えず、電燈が點されて後二時間
にも及んで辭し歸つた。

▲美濃部氏の略歴

世に兄弟打揃ふて傑出して居る程誇るべきものはない、之
れを播州に就て見れば、藤井兄弟、井上兄弟、松村兄弟、平
岡兄弟と共に美濃部君の如きは其尤たるもので、氏は明治二
年に高砂に生れ、博士達吉君の令兄であるが、家は代々醫を
業とし、氏も亦小野中學を終へて第一高等中學豫備科に入る
や、醫學に志して獨逸學を修めてあつたが、一度本科に進む
や、漸氣満々として醫業の如きに満足せず、男子須らく主動的
人物となつて社會に雄飛せざるべからずと爲し、更に英學を
修め帝大政治科に入つて二十六年に卒業し、直に農商務省に
入つて商工局工務課長となり、二十九年六月商工視察の爲に
派遣せられて歐洲諸國を巡察し、三十年四月歸朝するや時恰
も限板内閣の官制改革に際して同年六月農商務省參事官に任

兵庫縣人物史 美濃部俊吉君 永濱盛三君

人間の歩行が却々困難である、之を思ふと英國が加奈太の開拓に就て人跡もな
き所に横断の大鐵道を敷設したが、道が偉い所である、交通の便さへ備はれば
如何なる處へも人が入込み、隨て富源は自ら開發さるゝ譯である、北海道も開
拓使時代に種々の事業を奨励して現に亞麻及び甘藷の栽培、砂糖、麥酒の製造
と云ふ同時代の遺業がある、而して此等の事業を起すには却々澤山の金を費し
たものであるが今日より考ふれば經營の順序を顛倒した道り方で、之等は寧ろ
後廻にして其金を以て鐵道を敷設するなり、又は保護して敷設せしめてあつた
ならば、同地の開拓を促進したる数はより大なるものがあつたであらう。

と語り居る所へ給仕が用事を傳へて来た、今度は更に永濱副
頭取に就て又種々の有益なる話しを聞くことを得た。

▲永濱氏の談話

氏曰く北海道は他國の殖民地に比較すれば短時日の間に人口の増殖した點に
於て大に成功した方である、アイヌ人は怎うも濟度が仕難い色々として教育を
施し、現に師範學校を卒業したものが二名とあるさうであるが矢張り駄目の
様である、此種は別として現今の居住人口が百五十餘萬、内農業專門が五十萬
其内自作が二十一萬、小作が二十二萬、自作が七萬餘で傾向は宜しい方で、
漸次小作が減じて自作者が殖れて来た、此外に農業業者が十五萬人、之は自
作が八萬小作が四萬餘自作が二萬餘である、物産の重なるものは水産と材木
と農産物とで四十一年末の調査によると米が參百六拾四萬圓、大豆が參百萬圓
小豆が百八拾萬圓、粟麥が百六拾五萬圓、燕麥が百七拾萬圓、菜種が百五拾萬
圓、馬鈴薯が貳百四拾萬圓、甘藷が百拾萬圓と云ふ有様、水産の方では、鮭が
參百八拾萬圓、昆布が百拾萬圓、鱈が百拾萬圓、鱈が七拾萬圓、鮪が五拾萬圓、
即ち農産總額が千四百萬圓、水産が壹千萬圓許である、そこで拓殖銀行は北海
道の金融機關として同道の開發に資する爲め設置されたもので、最初參百萬
圓の資本であつたが美濃部頭取の時代になつて五百萬圓に増資し拂込額は現今參
百五十拾萬圓である、株主からは時々拂込を要求されるが併し拂込額に對する五
倍の債券を發行し得べき特權あるを以て、現在發行しある七百五十拾萬圓の外に
壹千萬圓の發行餘裕を存して居るから、今俄に拂込の必要もない、支店は東京

せられ、尋で商事課長に轉じ工務局工務課長を兼ね又農商工
高等會議員に擧げられ、三十一年十月會福農商務大臣の秘書
官となり、三十二年九月特許局審査官兼書記官秘書に任せら
れ、三十三年七月には巴里大博覽會事務委員を命ぜられて商
工業の視察を兼ね、再度歐米各國に派遣せられ各地の取引所
を調査して、三十四年四月歸朝するや、大藏省に轉じ、翌年
九月大藏書記官に任せられて秘書官を兼ね、同年十月銀行課
長專任文官普通試驗委員日本興業銀行監理官となつた、然る
に當時既に創立せられてあつた拓殖銀行が創業の時代にあつ
て行務未だ揚らず、加ふるに時の總裁會福氏が病瘵に臥して
行務を見ること能はず、爲に同行の基礎は完からずして社會
の信用は甚だ薄く、或は危懼の念を抱く者も少からざる状態
であつた、爰に於て同行の基礎を固め社會の信用を恢復せん
には須らく新進有爲の手腕家に俟つべきものありとなし、乃
ち四十二年六月擢てられて同行の頭取に擧げられたのである
氏が一度頭取となるや其該博なる智識と敏腕と加ふるに誠實
にして熱心なる施設經營は直に世の信用を恢復すると共に増
資を斷行し、會福時代の信用を挽回したる而已ならず、今や
興業勦業と相並んで北海拓殖上の唯一金融機關として世に重
きを爲すに至らしめたるは全く氏の手腕に依るものである。

▲永濱氏の略歴

飾磨郡は郡として土地も廣く交通の便も夙に開け又教育も
比較的早くより開けてあるに拘らず人物を出すこと甚だ少き
感がある、最も在郷の人には他郷に比して有志者も多いが何

れも郡内の人物で到底廣くは通用爲ない手合計りであるが、此間に於て永濱氏の如き天下的有爲の高材を出したのは同郡に於ける一粒種として尊重すべきである、氏は年齒尙少壯であるが秩序的の學問もあり、才もあれば識も深く主義もあり理想もある、實に氏の如きは單り日本内地丈けではなく文明の中心たる歐洲に行つても革變時代の朝鮮でも北海道でも官海でも實業界でも適く處として可ならざるはなく、世界的通用人物と云ふてもよからう、今氏が經歷の一般を窺ふに、明治四年に備前郡谷外村に生れ、二十八年帝大政治科を卒へて直に大藏省に出仕し主計處となり、同年高等文官試験に及第して長崎熊本等の稅務監督局に歴任し、後主計官となつて理財局國債課長に擧げられ、又參事官となり文書課長を兼ね、三十三年四分利付外債募集の舉あるや英佛に派遣せられ、本邦の經濟狀態、信用程度等の紹介に力めて其功を奏し、三十五年七月に歸朝されたが是我國より直接財務官の外國に出張したる嚆矢である、歸朝後再び國債課長、銀行課長を兼ね、後韓國統監府稅務總長



參與官に任せられ、高等官二等正五位勳四等に叙せられ、韓國に於ける稅制組織に就いて貢獻したる功最も多く爲に元韓國皇帝よりは勳一等大極章を賜つた、而して四十二年上半期の同行總會に於て其副頭取に推舉せられたのである、蓋し本邦に於ける實業界殊に銀行界に在りては其何れを見るも金力によるか、權門によるか、兎に角其首腦者に至りては老朽の人が多い如うであるが、獨り北海道拓殖銀行が新進有爲の學識才腕家を主腦者に戴いて居る盛のは將來に對する同行の發展上大に慶賀すべきことである、殊に美濃部君は謹厚篤實永濱君は濃厚圓満、同郷同窓の出て其交りは管叔の如く肝膽相照し双身一體歩調整一以て同行の發展期して待つべく、同行の爲に其人を得たるを悦ぶと共に我國經濟界の爲に之を祝せんとするものである、而して兩氏は共に春秋尙遙にして大に未來に富む人である、去れば前途益々奮勵更に偉大なる成功を齎されんことを。

東京帝國大學教授 法學博士 美濃部達吉君

我邦國法學者として將た少壯大家を以て令名噴々たる美濃部達吉氏は、北海拓殖銀行頭取美濃部俊吉氏の令弟也、幼に

して聰明穎智、神童の稱あり、明治十七年纔に十一歳にして小野中學に入り同中學の廢校となるや、時棚橋一郎氏の成立

學舎に學び、翌年第一高等中學に入りしが、一時病痾に侵され郷里高砂に療養すること二年有餘、明治二十六年健康舊に復して再び第一高等學校に復し、翌二十七年帝國大學政治科に入り、三十年卒業せり。

大學卒業後の氏は直に内務省に屬官となりしが一木喜徳郎氏は氏が才を愛して寧ろ學者たらしめんとし、拔擢せられて明治三十二年海外留學を命せられ、獨英佛の大學に在りて専ら比較法制史並に公法學を研究して、同三十五年歸朝するや法科大學教授に任せられ、翌三十六年大學總長の推薦に依りて、法學博士の學位を授與せらる。

東都法科大學は當代學者の叢淵にして、而も穂積博士の憲法、美濃部博士の行政法は實に大學生の競うて講筵に陪するのみならず、已に學界に推重せらるゝ所、氏の著述に係る、日本行政法、行政法、比較法制史、日本國法學の如きは蓋し

近來の名著として如何に其蘊蓄の深きものあるかを知るに足るべく同時に國法學界に於ける少壯大家を以て目せられ、昨四十三年帝國學士會員に選ばる。

倘し夫れ彼の往年人生不可解として華嚴の瀧に投じたる似非哲學者藤村操が失戀の女敵、菊池大麓男の女を娶りたるの故を以て、世人が氏を目して學問の擁護に據るものありと爲すが如きは謬れるの甚だしきものと云ふべし、氏が英邁なる秀才として既に内務省屬官時代に於て、一木博士の知る處となり拔擢せられて海外留學を命せられたるを以て見れば斯る世評は偶々氏が怨府の佳人を娶りたるより、藤村操に同情せるもの、唇より漏れたるものならんか、吾人は累の氏に及べざるを悲しむと共に竊に同情に堪へざる也、年齒少壯謹厚篤實一見學者風にして大に將來を囑望するに足る。



文學博士 辻善之助君

史料編纂官

姫路は山陽の樞地として又播州の一都會、往年十五萬石の城下として天下に其名を成したるものである、然るに人材の

出でざること何ぞ今日の如く甚だしきであらう、現在姫路の人物中に數へられても、石本男や古市博士は江戸の生れ、三

上博士は神崎郡にして、現に姫路に出生した人物として一武井男ある而已である、而も之れ封建時代の人で明治の新教育を受けた新人物は殆どない、之を以て見るも如何に姫路人士が進取敢爲の思想に乏しく、其氣品の劣悪にして又青年の墮弱的なるかを察知することが出来る、然るに新進の學者として博士辻善之助氏を此地に出したるは眞に群雞の一鶴とも稱すべきであらう。

氏は姫路市辻善三郎氏の長男、幼にして才氣勝れ前途に望みを囑されてゐたが、明治三十二年文科大學歴史科を卒業し其在學中専ら我國の佛教史、殊に佛教と政治との關係を研究して遂に其蘊奥を極め、四十一年我國佛教の本地垂迹説起源に就て論文を提出し、遂に文學博士の學位を授けられた、蓋し從來垂迹説の起源は奈良時代に於て唱へられたるものとなせしが、氏が考査研究の結果藤原時代より鎌倉時代にあることを最も的確に闡明せられたるは、各大家の稱讃措かざる處である、氏今や三上博士と共に史料編纂委員として、徳川氏時代の編纂主任として従事せられて居るが、其知識の該博は我學界に於ける少壯大家として嘖々たるものである。

氏は亦酒井家の家史編纂をも囑託せられて居るが、別項に掲載せる河井寸翁傳は、即ち編者の乞を容れて寄稿せられたるものである。

氏人と爲り温順最も學者的の素質あり、而して春秋尙遙に高く、世間の氏に期待する甚だ多きと共に氏も又必ず世人の期待を空ふする人ではない、若し氏に蘊蓄を傾聴せんとするものあれば、勉めて之を披瀝せらると云ふ、最も親切なる人

書云ふものは皆偽書である、兩大師の事蹟の中にも本地垂迹思想のあらはれたものあるを認めぬ。

六、慈覺大師及智証大師についても亦同じ。

七、藤原時代に入つて恐らくは延喜の前頃から、本地垂迹思想は起つたらしく見ゆる、本地垂迹説の起源と云ふ問題に對しては、即ち此一項を以て答へる

八、藤原時代に起りたる本地垂迹説は、源平時代を経て鎌倉時代に入つて、漸次に其教理的組織を大成したのである。

東京印刷會社社長 星野錫君

「欲斬奸臣星野乾八首」と云へる貼札は維新騒動の際に姫路市中に散見したる所なり、星野乾八とは即ち星野錫君の先考なり、氏は姫路藩の逸材として夙に重用せられ、上府の臣として、國家老の高須準人と相並んで佐幕黨の巨魁たり、彼の勤王派の棟梁河合惣兵衛以下を處断せるが如き、主として氏の方寸に出でたるものなりと云ふ、斯く勢望隆々たるものありしが故に勤王派の忌む所となり、奸臣星野云々の貼札の如き、即ち此一派の所爲に出でたるものなり、然るに世は明治の維新となり幕府の倒るに及び、河合氏等の殘黨は氏を目して不倶戴天の仇敵となし、曩日の怨みを晴すべく氏及び清水三九郎を江戸に於て捕縛し以て姫路の獄に下す、爰に於てか昔日の權勢忽ち地を拂ひ憐れむべし唯朝夕死を待つ運命とはなりぬ、然るに幕府の總大將板本鎌次郎、大島圭介等が黒田清隆の爲に宥さるに及び、氏も亦釋放の身となれりと雖も家祿は既に沒收せられ、食ふに食なく、加ふるに四面敵視の

である、左は則ち編者の需めに應じて説かれたる氏が談話の一節である。

▲氏が本地垂迹説起源についての一節

神佛同體、本地垂迹説、即ち本地、即、無始無終の絶對的なる佛は、權りに人間界に化現して衆生を濟度せんが爲に神とあらはれる、我國の神祇の本源は皆佛菩薩で神佛同體の本地垂迹説は奈良朝の時代に形成せられたと云ひ云ふ思想より起り、後佛教の教理より解釋して極めて煩雜なる垂迹説となつた而して從來の説では神佛同體本地垂迹説は奈良朝の時代に形成せられたと云ひ或は行基菩薩が始めたとか、萬胤の俗神道大意を初め、神道に關する世の常のものには皆此説である、また兩部習合、山王一實の神道の如きも從來は空海最澄が按出したやうに言つてある、けれども、奈良朝の頃には垂迹説はあつた、たゞの神佛調和の企まへ、わづかに穿しかけただけであつて、空海最澄のころにも垂迹説は形成せられてなかつた、其説のできかけたのは、尙夫よりすつと後の藤原時代に入つてからの事である、そこで、大神宮諸雜事記、元亨釋尊東大寺緣記、壇經抄東大寺要錄等の各種の材料によつて考査すれば、垂迹説は平安朝の末より鎌倉時代に亘りて漸次に發達し、一歩々々其精密の度を加へ、本地を定めること細かになり、また天台眞言の各宗教義と聯絡を有するやうになる有様もだんだんと進み、ついに山王一實及兩部習合神道の組織を大成した事は歴々として見る事ができる、余が所説を綜括すれば

- 一、行基が本地垂迹説をつくつたこと云ふ事は、後世より云ひ出たることより事實でない。
- 二、奈良朝時代には、未だ垂迹説の唱へられたこと云ふ形跡を認めぬ。
- 三、神佛習合の企は大師神道の爲めの必要上、一時の權宜から按出せられたものである。
- 四、弘法及傳教大師の時代に於ける神佛習合の思想は、まだ本地垂迹を考へる迄に發達して居らぬ。
- 五、弘法傳教大師の神道と稱する、兩部習合、及山王一實神道は、後世に於て發達したものを、遂に上せて兩大師に附合したものである。兩大師神道の著

九、神佛習合思想發展の跡について其要を摘示すれば、左の通である。

神明は佛法を擁護する。神明は佛法を悦ぶ。神明は佛法によりて苦惱を脱する神明は衆生の一である。

神明は佛法によりて悟を開く——神即菩薩なる——神は更に進んで佛となる。神は佛の化現したものである。

以上は單に一節に過ぎぬ、詳細は中學雜誌第八號に掲載せられてあるから、之を見て貰へば解るであらう。

姫路に住する事不能、遂に江戸に出で、悲惨なる境遇に生を終るに至れり。

氏に三男あり、長は則ち星野錫君にして、次は受負業を以て名高き鏡三郎氏、季は海軍中佐村上銀吉氏なり。

氏は幼少にして印刷業に従事し、後東京印刷株式會社を創立して之れが社長に擧げられ、終始一貫一代一業主義を保持して邦家の文運に貢獻せる所多し、頭腦は甚だ明晰にして性は活達勇敢、初め逆境の中に人となり爲に頗る義侠の思想に富む、曩に東京商業會議所議員に擧げられ、現に副會頭として東都の實業界に重きをなしつゝあり、蓋し當今實業界に立ちて少しく地位名譽ある者、徒らに多種多様の事業に關係するを以て名譽と爲し以て肩書の多きを誇らんとするの弊風あり、然るに氏は飽迄も一事一業に精力を集中して他を顧みざる所、雖て氏の性格の一般を窺知するに足るべし。



珍木屋

木村春東翁

日本風の建築に紫椋黒檜等の唐木を用ひ初めたるは維新以來のことにして之れを清國より輸入して用途を奨励したるものは木村春東翁である、東京に於て珍木屋、又は醜木屋と云へば直に知れるのは木村翁である、翁は斯くの如く商業に於て一機軸を出したる而已ならず、幼より蘭學を修めて醫を學び、當時和蘭醫師として世人に仰景せられ、又一面に於ては徳川幕府に仕へて維新戦争に従へる慄悍なる武人であつた、然るに世は維新となつて徳川氏の敗衄に迫り再び醫師に復し更に後進の洋醫が我國に踵を接して興るを觀て已に其職にあらずとなし、轉じて實業界に入り材木屋となつたと云ふ、誠に香しき過去を有せる迫に武士的精神を以て氣骨の稜々たる義俠あり同情ある最も欣慕すべき人である。

▲翁の經歷

翁は飾磨郡今在家に生れ家元と井上と稱し管公左遷の時隨從して來れる同地方草分けの舊家にして我國に初めて茶樹を

栽植せるは翁の祖先であると云ふ、代々地方の郷士として里人の仰敬厚く、翁は十六歳の頃初めて醫を志し備前片上の光岡と云へる醫師の弟子となり、當時醫を志すもの何れも長崎に抵りて蘭醫の法を修めたりしかば、翁も又長崎に至り釜澤文柳に就て蘭醫の學を修め居る事四年、町奉行高橋主計頭に從ふて大阪に來り、緒方洪菴の食客となり居ること數月、更に江戸に出でんと志し京都の三隅大隅守と云へる醫師に燒印を乞ひ、三州吉田に至りて旅費に窮し同地の堀内と云へる醫師に蘭醫の術を授けつゝありしが、偶々旅宿に於て親族に邂逅し餘義なく同行して大阪に戻りたりしも、嘗て長崎にあるの時佐倉の佐藤泰然並に伊東玄卜に紹介状を受け居りし爲め如何にもして東都に至らんものと、再び松平因幡守の用人となり遂に江戸に至り、直に暇を乞ふて伊東玄卜を訪ふ、然るに玄卜は事を構へて面會せざりしかば、翁は怒つて立ち處に紹介状を裂き、夫れより佐倉に佐藤泰然氏を訪ひ弟子たらんことを乞ひしも容れられず、餘義なく引返したりしも囊中已

に一錢なし、偶々旅宿の主人が負傷せるに遭ひ之れを治療して幾何の報酬を受け、此より各地を遍歴して後江戸に歸るや嘗て流浪中越後長岡に於て三井家の店員某を治療したりしが某は前日氏の勞を徳として三井家に紹介せしかば、三井家より衣服其他を調度して笹筒町に開業せしむ、之れより各藩の用醫として大に用ひられたりしが、其後維新戦争の起るに及び幕府に召されて幕兵の軍醫となりて各地に轉戦し、幕軍敗衄の後官軍の追窮甚だしく捕へられて斬罪に處せられんとせしが、氏の人と爲りを受して特赦せられた、其後京都の病院に在勤せしが維新の開國と共に吾國に後進の洋醫驟起するを觀て醫を断念し、茲に明治九年初めて日本橋數寄屋町に材木

店を開き、始めて紫椋黒檜の床柱を製し其他諸種の珍木を賣り初めたりしに忽ち時好の投ずる處となり、從つて自己の店舗を初め上野博物館に陳列所を設けて盛に廣告展覽せしが販路益々開け遂に今日の成功を見るに至つたのである。
翁は最も愛郷心の厚い人で店員等は何れも郷里の青年を用ひ其店舗に至れば全く播州に在るやうな想がする。
息甚三郎君夙に海軍に入り佛國に留學して今や海軍少佐として海軍省の秘書官兼東郷大將の秘書官として少壯令名の噴噴たるものあり、翁今や七十九歳尙鏗鏘として壯者を凌ぎ悠悠として閑日月を送つて居られる。

貿易商

故松村清吉君



縣下出身の人材にして其名を東都に成すもの、孰も學者官吏の方面に多く未だ單身獨行實業界の成功者に至つては甚だ稀なり、獨り故松村清吉氏の如きは本邦實業界の先覺者として令名の噴々たる、眞正の實業家否な眞正の成功者として、

兵庫縣人物史 松村清吉君

縣下出身者中の一異彩ならんか。
氏は林田藩士にして、本姓は安永氏父を平太夫と云ふ、嘉永元年一月に生れ、年甫めて十一召されて藩侯の近侍となり父の江戸詰となるに及んで伴はれて江戸に來り、下谷妻戀坂

の本邸に移る、此年不幸にして父を喪ひ、居ること約半歳、慶應二年公用を帯びて京都に至る、時恰も幕末に際し尊王攘夷及佐幕開國の論盛なるの秋、氏が炯眼早く既に立國の國是は商工業にあるを看破す、然れ共國內の事業は以て其素志を滿たすに足らずとなし、廣く諸外國と貿易を開始せんとは氏が年來の宿望なりき、然れ共之に従事するに當りては汎く海外諸國の人情風俗及語學研究の要ありとなし、當時横濱にありて貿易業者の牛耳を執れる居留外人に就き、親しく研究すること年あり、氏が勤勉力行會得する處決して尠少ならざりき、偶々函館駐在獨逸領事の知遇を享け背ひ共に事を謀り、茲に氏が成效の曙光を認むるに至れり。

明治八年愈々業を横濱市太田町に創め。主として工業藥品の販賣を營む、當時本邦の化學工業は頗る幼稚にして殆ど觀るべきものなきを慨し、一面海外貿易に従事すると共に一面更に化學工業の發達進歩に力を盡す、明治二十八年同志二三と力を協せ、東京府下王子の帝室御料局の事業を繼承して合資會社王子製造所を起し、拮据精勵漸次規模を擴張して、翌二十九年遂に關東酸曹株式會社を設立し、工業藥品の製造を營む、爾來十有餘年終始一日の如く取締役の任にあり、社務の中樞に參與し誠心誠意社運の隆盛を計り、劃策經營以て現今の盛大を致し延て一般工業の發展に貢獻し、今や一部の藥品は輸入を仰がずして能く内地の需要を滿たし得るに至れり本邦に於ける斯業の發達觀るべきものある實に氏の力に賴るもの多しと言ふも敢て過言にあらざるなり、氏は又横濱硝子製造株式會社の専務取締役として、拮据經營着々其蹟を擧げ

業務日に進み以て今日あるを致す。

氏が個人の事業は主として工業藥品を直接諸外國より輸入し、曾に其間に業を營むのみならず、本邦商工業の開發に貢獻すること頗る多く、就中石鹼製造業が今日の發達を來せる實に氏の力に俟つもの多しと云ふべく、又製紙業につきては往年駿河半紙の如き帶黄色の紙を僅に製出し得るに過ぎざりしが、原料紙及各種漂白劑を輸入し、其品質に改良を加へ純良なる改良半紙の製出を觀、而も其産額年々増加し曾に内地の需要を滿たすのみならず盛に海外諸國に輸出せられ、今や静岡縣下の重要輸出品の一となれるが如きは其最も顯著なるものなり、隨て氏が營業は年と共に發展し、明治二十二年には東京に支店を設立し益々販路の擴張を企圖し、苟も煙突の發ゆる處、氏の得意先ならざるはなし、以て其業務の一般を知るに足らん、氏又廣く諸官省の用度を辨じ常に實直勤勉を以て稱せられ、曾て其信用を失ひしことなく、就中明治二十七八年戰役の際鉛の上納を請負ふや七圓内外の價格は忽ち暴騰して十六圓以上となり其損耗言ふべからず、此時に當り若し尋常一様の商人ならんか直に保證金を拋棄して契約を破り以て眼前の巨損を免るべきも、氏は斯の如き卑劣なる非愛國の行爲を肯んせず、曰く軍需品を納むるは國民の義務且つ名譽にして商業上の信用に關する大なり、這般の損失の如き敢て顧慮する所に非ずと遂に其上納を全うせり、上下擧げて氏を嘆賞せざるものなし豈美ならずや。

身布衣より起つて文武の最高位に立ち天下の樞機に參するものは是を政治家中の偉人と稱するを得んか、空拳善く商業の

▲當主精一君

氏は明治十六年九月生る、夙に横濱商業學校を卒へ一年志願兵に服役し豫備少尉たり、夫人稻子今井氏の出、淑徳高く琴瑟相和し、姑に仕へて至孝なり、氏は父の業を繼ぎ營業の主宰者たり、父清吉氏病を得て藥石に親しみ年を過ぐる半歲餘、再び立つ能はざるを覺るや、四十二年二月業務組織を變更し、合名會社松村商店となし、氏に託するに其代表社員を



機勢を制し富巨萬を集めて勇を財界に奮ふもの之を實業界の大人物と稱するを得べし、而も悲哉二豎の冒す處となり、再び立つ能はず終に四十二年三月十六日相州逗子の氏が別業に於て忽焉として逝き今や則ち亡し矣。
氏は剛毅果斷機才縱横一度意の向ふ處必ず之を執行せずんば止まざるの概あり、而も萬に一を誤らず、氏が事業の成功主として之に基く、氏は義俠心に厚く他の爲に計りしこと一再の事にあらず、又能く氏に仕ふるものを愛し、此れが誘掖指導に力を盡し、殊に愛郷の心に富み生前往々歸郷する毎に郷閭の神社佛閣を初め貧民孤獨を賑はしたること甚だ多く、郷人之れを徳として氏の爲に碑を建てたるが如き、公共事業に向つて金圓を醸出するは氏の最も喜ぶ所にして日清日露の戰役に軍資金を獻じたるを首めとし教育慈善事業等に資金を出して之れが獎勵發達を計り、或は天災地變に不運を仰つ不幸の同胞の爲に寄附せしもの等擧げて數ふるに遑あらず、以て氏が生前の美事と稱するを得べし、氏は約を重んずること極めて嚴、邦人が歐米人に劣るは約を重んぜざるにありとは、氏が常套語として人の能く知れる所なり。
室富子は絹川氏の出賢にして貞、内助の功頗る多く、氏をして内顧の憂なからしめ、且つ名を成さしめたるもの實に夫人の力與つて大なり、男三あり長を精一、次を常二、末を照清君と言ふ。

ざる所なり、氏亦父に類し性極めて機敏加ふるに業務に忠實熱心なり、學識亦淺からず、父君の營業方針が主として概括的なるに對し、氏は全く系統的秩序的の方を執り、所謂整然として一糸亂れざるもの、眞に文明的實業家の資質を具備すと云ふべし、氏が將來の活動と其發展とは寧ろ未知數にして頗る多望なり、乞ふ地下の英魂氏が名を成すを聞いて喜ぶの目を俟つ焉。

佐治實然君

氏は神崎郡八千種村の圓覺寺に生れ、幼少天台宗の文珠院良貫法師、竝に北條町乙堂先生に就て漢學を修め、十六歳の時、時師藤縣福井三郎の塾に入つて數學を學び、十七歳の時初めて小野中學の設立と同時に同校に入りしも僅か一年間に於て廢校となり、當時十九歳にして副局長に擧げられたが素より大志あるの氏は、一小村吏として甘んずるものではない然るに幸にも仁色の西照寺前住職後藤祐護師の庇護によつて東本願寺教師教員に入り、明治十三年二十五歳の時同校を卒へ、當時渥美契縁氏の組織せる佛教講談會に出演して大に喝采を博し、明治十四年東京に開かれたる佛教講談會に出席することとなつて初めて東京に至り、其後香宿大内青樹師の知遇を受け、同師が佛教各宗の聯合を唱へ且つ高等普通學校を設立するや之れが經營の任を託されて居つたが同校は不幸にして明治二十三年閉校するの止むを得ざるに至つた。然るに時恰も國會開設に際して、氏は三重縣第二區より推されて此

れが候補に立ちしも、伊藤祐賢の爲に落選して東京に歸り嘗て氏等の發刊に係る、高等普通講義録の經營に従事し幸ひ非常なる歡迎を受け之れによつて大に利益を得た、其際より米國ユニテリアン協會代表者たる、ナツプ氏及びマコーレー氏に懇懇せられ、同主義の擴張に従事することとなつた、而して氏は眞宗の寺院に生れて本願寺の教育を受けたるものが、一朝主義を變ずると云ふに至つては大に世間の非難を免れざる處であるが、氏は元より佛教に反對するものではない、然れども本願寺の行動に至つては慷慨たらざるものがあつて、遂に斷然宗義を變節したのであると云つて居る、其後同協會の會長として引續き今日に至り、往年星亨氏が東京市政を腐敗せしむるを憤慨し市政の革新を絶叫して市會議員に擧げられ、又區會議長、學務委員等に選ばれ東京市政の爲に盡瘁せる事は甚だ多い、而巳ならず現に野心は勃々とした人で到底宗教家として満足の出來ない人である。



凸版印刷株式會社專務取締役

伊藤貴志君

明治の聖代は文運の興隆湧然として將に光彩を青史に垂れんとして居るが、而も其能く今日あらしめたる一面の功は之を印刷業の進歩に歸せなければならぬ、而して故大島男爵が初めて鉛版を以て其著築城典型を印刷せる、故淡路の曲木成氏が、築地活版所の創立は共に我國の權輿にして、現に星野錫、森一馬氏が各製本會社の經營、伊藤貴志君の凸版印刷會社の創立に於ける、何れも文運の進歩を誘化せる功勞の大なるものあると共に吾人は縣下の爲に之れを誇らんとするものである。

金を砂に陶すれば砂盡きて金露はれ、玉を石に攻げば石盡きて玉出づると一般、由來成功の士の多くは困厄窮苦に堪へ具に世路の險難を経盡して、精勵努力の久しきを積みたる成果である、伊藤貴志君は、今や大任を成就して實業界に雄視しつゝありと云へども、其今日に至れる實に悲風慘憺たる經歷は、以て世の後進子弟の模範となすに足るものである。氏は舊林田藩士幼少にして世運の趨向を耳にし、如何にもして時勢に伴ふ文明の學を修めんと志し、郷人某氏が東京に出づるに逢ひ乞ふて之れに従ひ、横濱修文館に入り後本郷の共憤義塾に學び、其後大藏省の印刷局に入り初め職工同様の生活を嘗め累進して屬となり、終に同三十三年迄前後二十箇年其職にありしが、其間印刷局の雇教師伊太利人、キヨッネ氏、獨逸人、リールベル及フリニク氏に就て斯道の技術を研究する事多年、現に政府發行の有價證券類にして其手に成れるもの多く、而して竊に社會の趨勢に鑑み此業を民間に起さん事を企圖し、明治三十三年職を辭して同志と共に凸版

印刷合資會社を創設し、主として銅凸版、銅鋼凹版の印刷に従ひ殊に機械の嶄新なる最近發明の、アルミニウム版印刷機械の如きは現に東京に於ては印刷局と同社ある而已、其迅速精巧専ら世の賞讃する處である、其間氏が日夜寢食を忘れて、畫策經營の結果は業務益々發展して爲に規模を擴張するの必要起り、四十一年七月資本金を四十萬圓の株式組織となし、亞で内外印刷株式會社を合併して資本金を一百萬圓となし、本所區に分工場を置き清國漢口に支店を設け、氏は之れが專務取締役として業務一般を經營しつゝあり、抑も同社が斯界の泰斗として今日の發達を見るに至りし所以のもの、元より各重役諸氏の畫策宜しきに依ると云へども又氏が眞率熱心なる經營の功多きに居るや勿論である。氏は性淡快にして自ら困厄の經驗を有するが故に、義氣あり同情あり、頭腦明晰にして又利害得失の打算に明かである最も愛郷の心に富み、常に感慨に堪へざるもの、如く、洵に温情鞠すべき人である。氏の夫人、賦性貞靜にして、舉止閑雅氏が未だ其地位を得ざるに當つて氏を助けて内顧の憂ひなからしめ、子女の教育は固より金錢の出納奴婢の待遇等自ら其責に任じ、人に接するや真心より之れを款待して満足を與へしめ良人の交際を扶けたる事多く、抑も氏が今日あるに至りしは固より其手腕の凡ならざるに依ると云へども夫人内助の功亦其多きに居る。

長養軒 松尾健治君

氏は松尾男爵の次弟にして小字を義之助と云ひ、男が年少
 湖江に志を抱いて養家松尾家を辭さるゝに及び、其後繼とし
 て十六歳の時、同家の養子となり家政を補佐せられて居つた
 が、其後義弟が家を襲がれたものであるから、故あつて明治
 五年東京へ出られた、而して現今織に世に用ひられて居る、
 牛乳は當時未だ我國に於ては僅に藥用に供して居つた位に過
 ぎなかつたが、氏は世の進歩と共に必ず用ひらるゝ時代の到
 ることを豫想して、當時英國公使館に自家用に輸入せられて
 あつた、乳牛二頭を買受け初めて長養軒と云へる牛乳搾取販
 賣店を開業せられた、之れは恐らく本邦に於ける牛乳搾取販
 賣の嚆矢であらう、其後數年間頑迷なる邦人は種々の迷信に
 驅られて一向に用ひんとせる者もなく其間販路の擴張に甚だ
 困難を感じられたが、飽く迄將來を確信して、自ら搾り自ら
 鬻ぐと云ふ風に、忠實と忍耐を以て經營して居られると、漸

次時勢の進歩に従ひ、益々其需用を喚起するに至つた、而も
 氏が多年の經驗と熱心は、専ら品質の善良と供給の便利を旨
 として居られたが、恰も長養軒は京都に於ける牛乳屋の代名
 詞の如く業務は益々發展して遂に今日あるに至つた。
 氏は性温良恭謙にして素朴人に接しては親密、多年東京に
 在られるが、毫も東京化せる處はなく、又男爵の實弟である
 から之れを笠に着て吹聴したり或は男爵に倚る杯と云ふこ
 ともない、他迄至誠一貫忍耐一偏、今に自ら業務を擔當して
 毫も怠ることなく、實に氏の如きは青年者の爲には實際的範
 模とするに足る人である。

氏に二男一女あり、長女は北條町の出身神奈川縣事務官補
 内藤義一氏に嫁し、長男基雄君は醫科大學を卒へて今や北里
 博士の傳染病研究所にあり、次男輝雄君は目下在學中である



龍城 播磨辰次郎君

辯護士

氏は揖保郡林田村の人、十八歳にして縣立師範學校に入り
 卒業後教鞭を執つて居つたが、其間謂らく吾國法曹界の悖德
 今日より甚だしきは莫しと、痛く之を慨して奮然自ら起つて
 民權擁護の任に當らん事を企望し、明治法律學校に入り明治
 二十二年業を卒へ、直に東京に開業した、然るに或る縁故に
 より信州松本に移り同地の法曹界で聲望隆々たりしも故あつ
 て又、三十年東京に戻り引續き其業にある、氏が性温順にし
 て義侠あり、當今辯護士の弊風たる、金錢を貪るやうな惡德
 はない、又恬淡名利を思はず、故に江戸ッ子の氣風に投じ、
 且つ頭腦の明晰にして今や東京市の法曹界に於ける一異彩で
 ある。

氏は又現今の法曹家が徒らに表面の法律に拘泥し、且つ表
 面の結果のみに依つて之れを罰するの不可を覺り、眞に曲直
 を律せんとせば宜しく主觀的に研究して、犯罪人の先天的性
 質を鑑定して處罰し且改善に導かなければならぬ、而も裁判
 なるものは、閻魔の廳であるから其犯罪行為が特發的で果し
 て改心するものこそせば、之れを重く罰するに及ばず、要は當
 人の性質如何にある、之れを之れ究めずして、徒らに千篇一
 律杓子定規を以て、處断するは眞の裁判ではない、而して之
 れを主觀的に鑑別するは性相學にありと確信して、本邦性相
 學の大家たる石龍師に親炙し、多年研究して居られる、氏の
 所説に依ると人間の一切萬事性相學に依つて解決の出來ない
 ものではないと言つて居る、著者一日氏を訪ふ。

曰く、縣下の人物を月旦して紹介するのは近頃面白い趣向と思ふ、一寸見
 ると君は貧乏ではあるが相當に觀察力を具へて居る相恰であるから君の月旦は餘
 り間違はるまい、併し余が多量研究して居る性相學に基つて觀察せられたら

其人が一見して解るゝ共に之は判断ではなく打算である、數理的に割出すので
 あるから間違はない、先づ君の主張に因る出身者の愛郷心と云ふことに就て概
 略を述べる。

愛郷心の計量方に就て 併せて心性機關の大要

私共の熱心に鼓吹しつゝある性相學によれば心性機關は頭腦であつて、而し
 て其機關は單一でなくして多種機關即ち各種專門機關の集合組織になつて居る
 額部が智力機關である、故に額の大なるは智力の多量なる人、小なるは其量の
 少き人である、又額の開口の廣きは智力の廣き人、開口の狭きは其狭き人、額
 の厚く飛び出で奥行の深きは智力の深き人、薄く奥行淺きは智力の淺き人と云
 ふ工合に其量の多少其面積の廣狭で智力の計量が出来るのである、其部位で云
 へば、下層眉骨一帯の部位が物體及び其性質を覺知する智識、其上部即ち額の
 二階に當る一帯が記憶及び思想の表形力、其上通り額の三階目、日月角と申
 す一帯が推理力、其又上通の四階即ち懸際が直覺力（近時千里眼透視など云ふ
 官能で性相學では之を五官に對し第六官と稱す）と云ふ工合に其一定の部位が
 一定の心性機關の部位になつて居るのである、額部は調和性、其下が辨識性と
 云ふ工合になつて居る、そこで其部位の張つて膨れて居るのが其腦の大に發達
 して居るので其部位の小なるは其機關の發達なきものである、機關の大小に準
 じて其機能の強弱大小の生ずるは物理上當然の理合であるから其機關即ち其腦
 部位の大小を測つて其力の大小を計量するのは氣機機關や電氣機關と同一筆法
 である。

それから側腹が自衛力になる、勇氣と警戒性と經濟的才幹等の機能にな
 る、前頭は道德宗教心、前頭隅が美意識の機關、顛頂部が獨立自尊心の機關、
 後頭部が愛情機關、小腦が男女性機關である。

愛郷心は後頭の中央部に住所性云ふ腦部がある、其腦髓の機能が衣食住の
 住、即ち住所家宅に對する愛情の發源地に爲るのである、其住所性の機能が中
 心點となり家宅の愛から其故郷の愛、故國の愛即ち愛國心と爲るものとす、そ
 れで後頭の削けて扁平、耳孔よりの距離近く、即ち後頭腦の薄きものは右愛情

の機關が弱小であるから隨て其機能の表彰が微弱である、それで其家に對して其郷里に對しても其邦國に對しても愛着する感情が薄弱と来る、これは人間許りでは無い動物も皆同じことである。

此腦部の過大に發達せるものは非常に愛宅心愛郷心愛國心が強い、他國へ出て思郷病にかゝるのは此腦部の過大なる人である。
一體山國の人は海邊の人より此腦部割合に多く發達し、隨て思郷心強く、又田舎の人は都會の人より此腦部の發達大なるを常とす、姫路の如く交通便利にして且大なる都市を爲せる土地に生れし人は此腦部は割合發達薄きものとす、つまり都會の人は頭腦が前方に發達し山間僻地や田舎の人は頭腦が後方に發達す、前方は智なり、後方は情なり、又商人は經濟的腦部を重に活動させるから頭腦の側面が張りて圓顔と爲り官吏は權力を希冀し威張りたがるから頭頂部が割合發達する結果顔が細長くなる、昔の士族顔なる一形格は此理由から生じたものなり。

又往昔太平の代に於ける世襲の貴族は別に衣食住其他世間の事に風託なく飽食暖衣醉生夢死の状態で腦髓はチツと働かせぬから腦髓は段々退歩し之を顔面に表彰し間の延びた馬鹿顔を發生す、是れ自然の法則なり、先づ一口に云へば智力の無きを白痴と云ふから情のなきは情的白痴であらふ其筆法で云へば頭部の發達無きは智力的白痴、前項の發達なきは道徳宗教的白痴、前項の發達なきは美意識的白痴、側腦前部の發達なきは經濟的白痴、又其後部の發達無

内務省參事官

塚本清次君

兵庫縣は割合に行政官府に人物が少い、而して氏は其少き人物中の一人として珍重すべき人である、然れども氏は未だ任官後日向淺く、過去の經歷を以て之れを評する事は出来ぬが、將來に於ける有爲の才幹として大に囑望するに足る人である。

氏は明治二十五年に姫路中學校を出で、直に京都市の高等

學校法學部に入り、同二十九年に卒業して一時山陽鐵道會社に入つたが、滿々たる朝氣押へ難く、遂に會社を辭して東京に抵り、判檢事の試験を受くる積りであつた、然るに當今の時勢は縦令實力があつても肩書がなければ到底俗世界に立つて驥足を伸ばす事が出来ないと云ふ風であるから、馬鹿らしといは思ひつゝ、再び大學に入つて學士の稱號を受くるの必

要を感じ、直に法科大學へ入學せんとせしも、學制の改革に依り、更に豫備試験を受くる事となり、再び京都に戻つて高等學校の卒業試験を受けて大學に入り、明治三十五年に大學を出た、其後直に高等文官試験に及第して、東京府屬となり福井、神奈川縣の各參事官、滋賀神奈川縣の各警部長を歴任して、四十一年内務省參事官に轉じ、内務大臣秘書官を兼ねて居られる。

氏は右に述べた如く、毫も小成に安んずると云ふ風がなく飽迄大成を期して居る人である、一見すれば才氣充溢して稀に見る才子風の人であるが、又播州人には珍しい氣概もあり洒々落落として、當今の所謂學士風を去り、街氣なく飽く迄書生的に世に處して居られる處は、吾人の意を得たるものである。



神榮株式會社横濱支店長

奥村鹿太郎君

吾人が東都に抵りて一寸快心に感じたるものは、縣下の人物が彼地の商權を獲得しつゝある一事であつた、例へば範多兼松、鈴木、湯淺、田村新吉氏等各支店を設け、盛なる商取引を行へるを見て大に之れを壯としたのである、然るに省みれば亦以上の諸氏は、單に縣下に籍を有する准兵庫縣人にして、縣下の土に因つて造られたる人々ではない、爰に於てか一度快哉を叫んだる余は更に歎然たるものありしが、轉じて横濱に到れば生絲貿易を以て牛耳を執れる神榮會社を見た

り、此れ即ち伊藤長次郎氏を中心として、重に播州の人物によつて盛に經營せられつゝあるもの、抑も同社の營業たる生絲貿易を以て目的となし、常に顧客を海外に置き、商機は一瞬を争ひ、而して幼稚なる内地の製絲家と、最も文明的なる西洋人の間に介在し、又其製絲業者に資金を融通するや多くは對人的にして、且つ數多の店員を各地に配置し之れを監督すると共に、又國家的には商權の獲得と内地蠶業の發達を企圖しなければならぬと云ふ頗る至難の業務にして、播州式の

實業家としては、一大出色の事業である、是れ畢竟先代伊藤大西氏等の如き英邁進取の人物たりしが故に創立せられたるもので、吾人は此一事を以てするも故人が非凡なる人物たりし事を追想するのである、而も創立當時は重役の手腕に非凡なるものありしに拘らず、使用人に才能ある人物なく、爲に業務は遅々として發展せず、當時の重役をして不満に堪へざらしめたる事もありき、然るに現重役諸氏は何れも新進の手腕家なるに加へて巖に丸岡氏が横濱支店長となるや頓に發展して堅實なる基礎を作り、爰に於て初めて同社の信用を世間に認識せしむるに至りしが、氏が病を得て神戸の本店に移るや、同社が營業の根據たる横濱支店を脊負つたるものは即ち奥村鹿太郎氏である、爾來駁々として商權を擴張し、我國に於ける生絲貿易業者の重鎮を以て目せらるゝに至りし所以のもの亦氏の手腕の興つて力あるや勿論である。

氏は丸岡氏の跡を襲ぐに及び、畫策奮闘怠りなく、同社の營業成績をして優良ならしめたる一面には自ら國家的商人を以て自任し「以らく國家の富強は之れを貿易に俟たざるべからず、而して本邦唯一の輸出品たる蠶絲業は、則ち我國の命脈にして、斯業の消長は國家の盛衰に至大の關係を有す、然も之れが發達を助長せんには、宜しく海外の顧客と内地生産者間に介在する貿易業者が、機宜を誤たず能く趨勢を察して之を鞭撻指導しなければならぬ」と、常に此觀念を以て眼を海外市場に注ぎ、顧客の嗜好に適する製品を獎勵する事に努め、例令ば品質の一定荷造の方法等は勿論、原繭の種類に依り織度の細太、強力、伸力、光澤若くは練減りの歩合等技術的の關係より其の他海外の出來事、經濟界の狀況、需要の程

度に至るまで事細大となく一々親切敏捷なる報告を發して之を指導する等當業者に貢獻せる事頗る多く、殊に氏が年來の持論としては製絲家の奮起改良は當面の急務たるや勿論であるが、如何に製絲家に對して改良進歩を鼓吹するも、原料繭にして向上するなくんば、源を究めずして河清を待つと一般愚の之より甚だしきはなく、然るに我國の蠶絲業家が、養蠶、製絲の分業的にして其間の連絡交渉なく、當業者初め政府當局者も此原理を闕却して居るのは、斯業の進歩を遲緩せしむる一大原因にして亦斯業の爲に一大恨事である、故に貿易業者は、海外の嗜好を製絲家に傳へ、復た製絲家は是れを養蠶家に致し、各自相通して先づ原料繭を改良し、次に製絲に及ぼし、而して後貿易業者は之れを嗜好に投ずることに努めたらんには、當に斯業發達の捷徑たる計りではなく、互に莫大なる利益があるであらうと、専ら各當業者の統一接合を鼓吹し且つ其方法を講究して居られる、氏が常に斯る觀念を以て商業に従事して居る處は、單に營利會社の支配人たる而已ではなく、眞に國家的商業家の概ありと謂つべきである。

氏は播州人には罕に觀る俠骨で頗る義氣と同情に富み、一旦志した事は如何なる障礙に遇うても、徹頭徹尾貫徹する、又毫も人前を衒ふと云ふことはなく、寧ろ人の見ない仕事をすると云ふ質で、名利には至極恬淡唯信じた事を行ふて樂しむと云ふ風の人物である、蓋し是れ氏が人物の偉大なるを證する所以であるが、年齒少壯の氏に對しては單に過去の經歷の一端のみを以て品する譯には行かぬ、希くは僂ます驕らず安んぜず、將來の天地に向つて發進しられたならば前途の向上發展は恐らく之れを疑はぬ。

麒麟ビール會社支配人

井田清三君

横濱に於ける麒麟ビール會社は、素西洋人の設立に係り、其組織と經營振りは、蓋し日本人の従事せる會社としては最も高襟的のものであらう、同社は横濱港を俯瞰せる同市山王山に設置し風景頗る絶佳、而も建築物の堅牢と結構の壯大なる、而して釀造工場如き機械の嶄新と清潔なるには一驚の外はない、而して勞役者の如きも洵に規律整然として、製造工場の外には一大遊園地を設け、遊戯機械を設らへて、職工の娛樂に供へ、且つ釀造工夫の何れも白布を纏うて勞役に執つて居る處は、如何にも衛生上から言つても人の飲用に供する釀造業の如きは憚れせなければならぬと思はれる、而して亦事務所の傍らには數百坪の溜池を穿ち鯉魚の潑瀾として居ると共に、周圍には諸種の樹木を栽植して四時花を絶た

ざるが如き、眞に一大公園である、恁る事務室に最も新鮮なる生ビールを煽りつゝ日々業務を執りつゝある、幸福なる支配人は誰か、曰く井田清三君である。

氏は姫路藩士にして、明治十八年慶應義塾の出身、嘗て山陽鐵道に在り會計課長として、敏腕の聞わがあつた人である、然るに鐵道の國有に迫んで、同社の支配人となり、斯る高襟會社の經營に任じて居られるが、人ど爲りは決して高襟ではなく、何れかと言へば寧ろ姫路根性の脱却しない、道は會計課長の一寸客臭いやうな最も堅實な人である、併し同社が今日の發展を劃して居る處を見ると、強ち姑息因循なる人ではなく新進の手腕家であることが察せられる。何分編者は單に一面識であるから爰に詳細なる氏の月旦をする權能はない



兵庫縣人物史

井田清三君

宮内二朔君

帝國製麻株式會社支配人

宮内二朔君

氏は舊姫路藩十村上慎左衛門氏の四男、文久元年二月生る幼にして同藩宮内家を繼承し、藩校に入りて漢字を修め造詣頗る深く、十七歳兵庫縣廳に奉職し、餘暇泰西の學を研め益雪を積むこと數年、後神戸市役所に轉じ孜孜として勉勵怠らず上下の推重厚く、氏は夙に衛生を重んじ、且亦一面市の繁榮策として水道敷設に着眼し頻りに有志者に絶叫する所ありしも時機尙早或は市の經濟上許さざる事情あり、茲に於て斷然意を決して國庫の補助を仰がんとし、他の委員と共に屢々上京せしが是等一切の費用は私費を以て此を辨じたりと云ふ又以て其熱誠の程を知るべく、而して氏等運動の結果は遂に政府の容るゝ所となり、國庫より九十八萬圓の補助を支給せられて水道事業に國庫補助の前例を開き、茲に水道敷設に着手すると共に氏は水道部長に擧げられ、三十三年工事漸く竣成す、後一年餘職務整理に従事して、完了の上職を辭して實業界に入り、直に安田善次郎氏經營の西成紡績所に所長代理

神奈川縣事務官補

内藤義一君

古來山水は偉人を出すと言つてある、然れば山水のなき處は人物の出ないのも道理である、而して我が加西郡は河もない、又山と云ふべき程のものもない、然るに松尾男爵を出したるは不思議であるが、併し男も幼少から或は書寫山に上り或は加東郡に養はれて加古川の涯りに成育した人である、現に加西郡に生育した人物と稱すべきものは殆どないが強いて索むれば、内藤義一君の如きは先づ其人物の一人であらう。

として大阪に在ること數月、偶々安田氏の知る所となり同家の經營せる下野製麻會社に入る、當時本邦に製麻會社四箇所あり、下野、北海道、近江、大阪是れなり、而して四會社共に收支相償はざるを以て合同説起り、氏は安田派の代表者として之に従事し、先づ一着手として販賣トラストを組織するの考案より合同販賣所を起して氏は其販賣所長に推され、遂に三十六年八月下野、大阪、近江の三會社合同成立して日本製麻株式會社となし、氏は其支配人となる、四十年七月北海道製麻會社を疎外するは國益にあらざるを主唱し、同會社と交渉再三遂に之を合併せしめて更に帝國製麻株式會社と改稱し、今や基礎堅固にして六百四十萬圓の大資本金を擁し、爾來支配人として安田氏の信任厚く實業界に名聲あり。令息秀雄氏は早稻田大學を卒へ、第三銀行に在りて敏腕の譽高く、夫人いく子は貞淑温順の聞あり、家庭は最も圓滿なり。



陸軍用達商

八木覺太郎君

氏は神崎郡屋方村に生る、明治二十四年初めて東京に抵り陸軍用達商小林又七氏の店員となり、二十七八年戦役の際同氏を補佐して多大なる貢獻を興へ、同三十年獨立して陸軍用達商を營み氏が忠實なる用達商人として當局の大に信用する處となり、日露戦役の際第一軍に従ひ、専ら印刷雜貨を擔任して、一種の義氣と俠氣を振り私利を抛つて軍隊の後援に努め、益々其筋の信用を博するに至れり、氏は又播州人に稀に

見るの俠骨、一種の公共狂にして人の哀を乞ふものあれば悦んで之れを救ひ、郷間の爲には學校の敷地を寄附する等奇特の行爲頗る多きものあり。由來陸軍用達に限らず御用商人なるものは、私利を貪らんとして直接關係官吏と結託し往々陋劣なる行爲を爲すものあり、如此は國家の蠱毒として其肉を屠るも尙且惡むべきもの而も氏の如きは大に推奨すべき模範的商人なりと謂つべし。

菓子製造業

小川久四郎君



氏は姫路に生れ家菓子製造を以て業とす、十八歳にして大阪に出で、砂糖仲買商を営み或は同市新町に於て小間物商店を開きたりしが、數年ならずして火災に罹りたるを以て、更に堂島に米穀仲買人となり、最も堅實なる經營は大に斯界の信用を博し、引續き營業すること前後十年に及びしも、性着實なる氏は米穀仲買人の子孫の業にあらざることを感じて、翻然之を廢して東京に抵り、明治三十一年津守商會製造の菓子園の露の販賣を引受け、大に同商會の爲に販路を擴張した

りしが、津守氏が機宜を誤り後失敗して破産の境遇に頻するや、氏は情誼を重んじ之が救済に盡す處ありしも遂に支ふる能はず、其後同商會と關係を絶ち、今や自ら菊世界と稱する芳果を製造して、東京を初め全國に販路を開き、其他東洋製菓會社の特約店として大に發展を畫し、亦横須賀海軍の用途として益々順潮なる成功の域に進みつゝあるものゝ如し、吾人は氏が變化旦夕に極りなき投機業を轉じて堅實なる商業に従事せられたるを悦ぶ。

東京精米會社 犬飼柔吉君

氏は林田藩士にして幼にして學に志し、十三歳の時藩の參事北條直政氏が藩務を以て江戸に出づるや、請ふて之れが從僕となり初めて江戸に出で、傍ら下谷二丁町の或る義塾に入つて漢學を修めたりしが、間もなく廢藩と共に家祿は沒收せられて學資に窮し、折柄有馬侯が邸内に（現今の青山離宮の在る處）報國學舎を設けて子弟を養成せんとするを聞き、素志を陳べて同舎の門番に採用せられ僅に衣食を給せられて修業せりと云ふ、當時の困苦察するに餘りあり、而も幾度か挫

折せんとして遂に折れず漸く同舎を卒業せりと云ふに至つては薄志弱行の青年者が以て龜鑑となすに足るべく、後遞信學校に官費生となり卒業するや直に、遞信技手に任せられて遞信省に入り、明治三十八年迄前後三十年一日の如く勤続して遞信業務に貢獻せること多く、同年官を辭して徐ろに老後を送らんとせしが舊知若宮正音氏の爲に東京精米會社に在り、性温順にして忠實謹厚の人なり

醫師 福島之昂君

氏は加東郡小野藩士、幼少故あつて有馬郡三田の親族に養はれ、十五歳にして醫を志し、大阪の汎愛醫院に入り、食客として最も悲惨なる境遇にあること前後十二年、後東京に出

て、片山某に就て復亦食客たること數年、其間殆ど師家の奴僕と同様の待遇を受けたりしも、堅忍不撓、夙夜獨學、終に開業試験に及第して、明治二十九年本所區に貧民窟を選んで

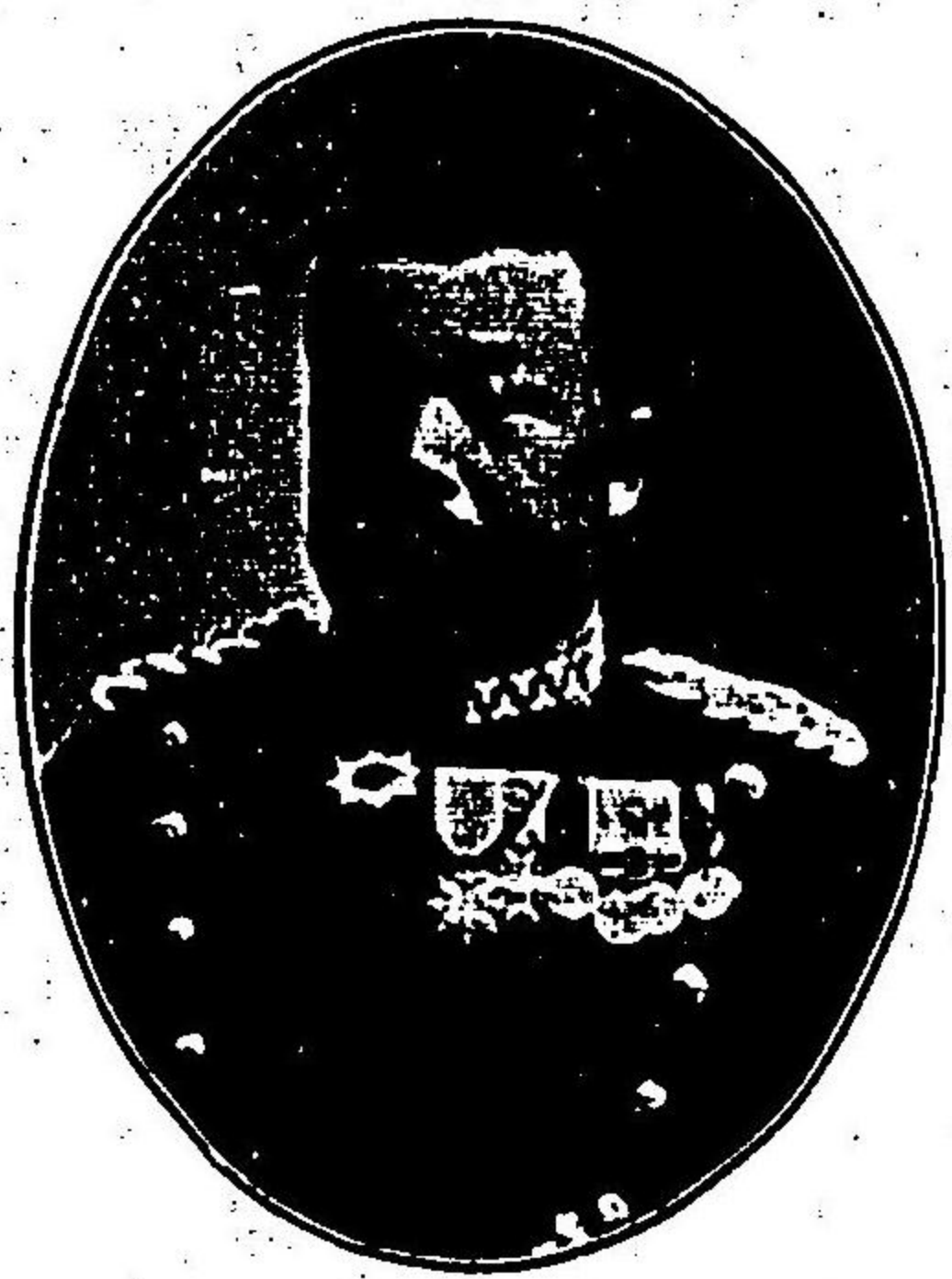
開業せり、之れ蓋し開業の資本に乏しく止むを得ざりしによる、然れども氏の技術は幾もなく世人に認識せられ、遂に今日の發達を來すに至れり、艱難汝を玉にすとは氏の如きを謂つべく、其今日あるや決して偶然にあらず、而して氏は又自

ら困苦窮乏の經驗を有するを以て、人に對して最も同情を垂れ、且つ子弟の養成に意を注げるが如きは、以て氏の人となりの一斑を察知するに足る。

中央園基會主 廣月陵君

氏は、多可郡西脇村某寺に生れ生涯宗祖の法弟として布教を以て天職とすべき身分である、然るに氏は人と生れて飽食暖衣只管信徒に寄食するは、男子として如何にも意氣地なき事を慨し、断然還俗したのである、其行動に就ては必ずしも賞揚すべきものではないが、其意氣は又壯とすべきである、惜むらくは何故此一大決心を以て宗教界を革新すべく努力せなかつたのであらう、而して還俗に就き信徒を集めて退散式を行ひ「墨染を海士の衣にぬきかへて世の荒磯に、いざや立

たまし」と一首を残し、檀徒の愛措を跡にして飄然東京に出でたが、思つたよりは困難で、忽ち食ふに困る、夫れから大決心をして、牛乳配達もやれば、新聞賣りもする、世の難行は大方經盡して見たが、何處からか光明が輝いて來て、僅の資本を貯へ、現今では中央園基會なるものを設け、本因坊と特約して各種の園基雜誌書籍を發刊して居るが、氏の著何れも乾燥無味なる園基法を最も明快に且つ興味多く講述したもので古今の名著として世の歡迎賞讃して居る處である。



陸軍軍醫監 前川榮君

氏は編者と同郷の人である、併し未だ會接した事はなかつたが、偶々名古屋に在ることを聞き、一日同市東掘木町の寓居に訪問すると、早速函を排して懇に迎へられたる氏は、大兵肥滿誠に調和のよい體格で、道に幼少から獨立獨行、奮闘力戰今日の位置を贏ち得た程あつて渾身精力が充實して居る亦温乎たる風采は不言の中に部下の尊仰を受くるに共に上官の氣受けのよい人であつた事も解る。

處が氏は突然今回職を辭された、其理由とする處は「時世の進運と共に随分部下の人に新進有爲の才幹ある人物が澤山にある、故に最早依然として職に在る必要はない、修身官であるからと言つて、位置に戀々として居つては後進の進路を阻む事になる、亦個人として此上を望めば軍醫總監であるが、夫れは外國の關係もあり、到底柄ではない、然らば單に俸給を食ふが爲に在職すると云ふ結論になる、縦へ辭職しても衣食は出来る、出来なければ又働く、人生慾に限りはない、顧みれば、草味の一書生が時勢の恩寵に由つて今日の榮職を辱しめ、空前の大戦に参加して微衷を貢獻したりとせば充分である、人は終りを慎む始めの如しと云ふ事があるから辭任の好時機と思ふが故に辭したので別に不平も不満もある譯ではないとの事である」以て氏が名利に恬淡なるものあるを解すると共に、成程人は進退が肝腎である、如何に令聞あり手腕があつても、進退の機を失すれば零點である、無能無爲にして位置に啗り付き、世の物笑ひとなる例は幾らもある氏が今回の退職は國家の損害で、又氏の爲に惜む處であるが人は強ち位置の高きを以て尊しとするものではない、蓋し氏

が今回の退職は一層氏の人格を高からしむると共に、世の白髮燈々として勳章を食りつゝある者の好教訓であらう。

▲氏が略歴

氏は佐用郡平福村醫前川謙齋の次男にして、幼少兵粟郡千草村の叔父醫前川見瑞の養子となり、夙に醫を志し姫路山本某の藥局生となつて之を學びつゝあつたが、竊に謂らく今後の醫師たらんとせば宜しく泰西の醫學に通せなければならぬ然れども海外の留學は到底之を許さぬ、如かず長崎に抵りて其蘊奥を極めんにはと、折柄筑前の人加藤弘齋氏が歸國に際し伴はれて福岡に抵り、加藤氏の紹介を受けて小倉病院に代診生となりて夙夜其業を學び、後郷里に歸りて開業したりしが、幾何もなくして自ら刀圭界機關雜誌發刊の目的を以て東京に赴きしも、さて筆陣を張つて斯界の進歩發展を指導せんには自ら省みて研鑽の足らざることを慨し、更に蘊蓄を極めて然る後に於て此を盡るも遅しとせずと、爰に再び此れが研究に志したのである、而して此れが研究には利害の關係なき軍醫に従事すること恰好のことならめと、遂に意を決して陸軍醫學校の講習生となつた、之れ即ち氏が今日ある第一歩の登龍門である、後同校を卒業して軍醫となり、爾來廣島、東京、姫路、大津、大阪師團等に歴任して大津聯隊より日清戰役に出征し、明治三十年臺灣基隆衛戍病院長となり、廣島病院長に轉じて一等軍醫正に進み、第三師團軍醫部長として日露戰役に出征しては周到敏活なる行動を敢てし、其妙術を振ふて令名愈々昂り、平和克復後善通寺病院長に任せられ、

更に臺灣總督府軍醫部長に轉じ、四十二年軍醫監に昇進、第三師團軍醫部長となりて今日に至つたのである。

氏は多年其職に在ると共に我國の軍醫制度が未だ草創の域を脱せざるの時に於て銳意諸般の改革に任じ、即ち其間に於

て二回の大戦役に参加して、戰病負傷者を救済したる而已ならず、軍事衛生を初め諸般の制度が今日の如く光彩あるに至らしめたと共に、斯界の進歩に貢獻したる氏が功勞や實に偉大なるものである。

京都醫科大學教授

醫學博士 和辻春次君



編者一日京都大學教授室に博士和辻氏を訪ふ、而して氏は一見舊知の如く淡快にして談論風發奇警縱橫、最も天真爛漫の人である。

▲氏の談論

曰く「兵庫縣人を月旦する然らば吾輩の利口さ加減を見に来たと云ふ譯ですな、全體今迄に君が會つた人で誰が一番偉くて亦よい人なりやとの問ひであるから、余は之れに答へて人は何れも一長一短があつて、殊に人格と云へるものは、地位にもよらず、無論財産にも拘らず、又學問にもよらないやうで、失禮であるが人格の點から論じたなれば却つて博士よりも、神崎郡に在る令兄瑞太郎翁の方が、高いかも知れない

と云へば、氏は呵々大笑して曰く彼は總領の甚六である君は所最負をしては不可ないと、夫より余は嘗て氏が東西兩大學の教授中にあつて最も精力家として且つ斯界の爲に熱心に研究せられつゝあるを聞き、何か研究の結果を傾聴せむと乞へるに應じ、氏は更に語るらく、別に熱心と云ふにはあらざるも、兎角研究すればする程解らなくなる、殊に金が無いのは第一の困難であつて、爰に慙うして書きつゝあるものは、余が専門の耳鼻咽喉の組織並に病原を説明せんが爲に、此圖は何れも顯微鏡の鏡面を描寫せるものである、而して之を印刷して頒たんとするも、一枚に付百圓を要し、百枚あるとして一萬圓を要すると云ふので、到底其希望を達する事は能きない、故に餘義なく此原圖を參考に保存せんと思つて居る次

第であるが、一體日本の富豪と稱するものは誠に吝嗇な奴計り、憚る事には金を拵て、呉れない、亦出版業者も博文館を初め利益のあるものは、毫も世に益せざる而已ならず、却つて世を害する如うなものでも出版するが、學界の参考ともなるべき深遠なるものは、専門家以外に買れないものであるから出版しない、然れば専門家で富裕な人が遣つて呉れ、ばよいが、某博士の如きは一枚一萬圓も投じて妻は著へるが憚ることには金は出さぬ、故に我國の學問せんとする者は餘儀なく高價なる外國の書籍を購はなければならぬ譯で、隨つて學術の進歩も亦遅緩である、余が此迄研究の結果は此臨床と名くる書籍に概略は掲載しあるを以て、餘暇があれば之を見られよ。雜作もなく語らるゝ處は頗る直情徑行の人である。氏は神崎郡和辻瑞太郎翁の令弟にして、明治十二年十七歳にして、東京に抵り、専ら獨逸學を修め、同二十三年大學外



本派本願寺佛教大學教授

鈴木法琛師

方今佛教界の教徒を以て任ずるもの多くは祖師を信り佛を信り、流石は本職丈ありて其宗教に就ては、能く釋き且つ能

く演じつゝあるも、而も口鼻は未だ酒醴に溺き、耳目は猶も美形に迷ひ俗臭紛々恬として愧ぢざるもの、如く、只管村間

の翁媪を瞞着して、唯己の懐ろを肥さんこと而已を謀つて居る有様、所謂身を省して社會風教の師表たるべきもの幾人かある、甚だしきに至つては旅行中法衣を纏うを以て潔とせず却て俗人の風姿を得意とせる生息坊主のある世の中、吾人は播州の佛教界に偶々鈴木法琛師のあるを悦ぶ。

氏は印南郡今市村正覺寺の住職にして、學徳共に高く殊に佛典に通じ郷間の尊信最も敦く、明治二十八年本派本願寺は氏を拔擢して文學寮の教授に任じ、三十一年東京佛教大學の設立と共に同教授に任せられ、三十六年同大學の京都に移さ

るゝに及び、引續き教授として今日に臻れるもの、蓋し本派本願寺は高邁なる光瑞法主を戴き専ら教育に力を致さるゝに當り、氏の如きを教授として任用せられつゝあるは誠に適材を適所に配置せるものと云ふべく、氏は當世風の高標坊主と其選を異にし、圓頂黒衣、内心には金剛堅固の信心を藏へ、名利を銜はず、流俗に陥らず、毅然として宗風の顯揚に努めつゝあるの人、浮華銜燻を以て世に非難ある本願寺派の教徒としては一異彩たるを疑はず。

本派佛教大學教授

森川智徳師



二十世紀の才智は最早地獄極樂を説いて満足せぬ、今や宗教を信仰せんが爲に進んで研究するものは、却て本職の宗教家以上の智識を持つて居る、隨て昔風に無智文盲の善男善女を集めて、單に感情的に阿彌陀様に金色の御光が映すとか西方十萬億土の處に御座る杯と、言つて居つては最早隨喜渴仰するものはない、然らば何うしても今後は佛教を根本的に研究して、哲學を基礎として専ら系統的理論上から布衍しなげ

ればならぬ、従つて宗教家其人も哲學上の研究が必要であるは云ふまでもない、而して是は偏に新進の宗教家に俟たなければならぬ、然るに我邦現在の宗教家なるものは最も割の悪い職業である、故に名利と銜氣に満ちて居る新進有爲の人は自ら之れに任ずることを好まない、之れ我邦の宗教界が日々に衰微を感せしめて居る所以である、當今の青年何れも名利に戀々して、宗教の家に生れて宗教を擲つ者が多い世の中に

氏は獨り之れが天使となり其使命を全うして宗教界の腐敗を郭清せんとする自覺を以て起つた人であるから、最も吾人が尊敬すべき又氏の將來を矚目して居る所以である。

氏は飾磨郡の某寺に生れ明治三十四年帝國大學の文科に入り哲學を専攻して同三十八年業を卒へ、爾來佛教大學の教授



辯護士 砂川雄峻君

帝大の出身辯護士界の先輩として關西の重鎮たる砂川雄峻君は、舊姫路藩士少々東京に出て、外國語學校、英語學校に入りて専ら洋學を研修し、尋で開成學校に入り後同校が大學と改まるに及び、同大學に入りて法律を専攻し、二十三歳にして同大學を卒へ、當時大隈伯が時事に感ずる處あり改進黨を組織せんとするや、小野梓並に同期の卒業生山田喜之助氏等と共に、驟然之れに加はり、伯を補けて同黨の組織に努めたりしが、時恰も藩閥の絶超時代にして政府は政黨を嫌忌すること甚だしく、大學卒業生の政黨に参加することを憂ひ、切に官吏に登府せんとし、當時の官制によれば法學士の用途

として判任官の判事試補なるものありしが、氏等を迎へんが爲に特に任用令を改めて奏任官となし、頓りに從應する處ありしも斷然之れに應せざりき、而して當時早稻田專門學校の創設を補佐して同校法律科の講師となり、傍ら民權擁護の爲に京橋區西紺屋町に事務所を設けて代言人となり、翌年大阪の江陽舎に聘せられて同舎に代言事務を執り、後獨立して代言人となるや、世は未だ官尊民卑の風甚だしく、氏は民權の尊重を鼓吹せんが爲に、自ら馬車を購つて裁判所に入出せる等、代言人をして世に重からしむるに努め、而して當時の大阪は法學士の肩書を有せるもの僅に三人、故に氏は非常なる

羽振りをして直に代言人會長に擧げられ、其後商業會議所特別議員、府會議員、同府會議長に選まれ、辯護士と改稱するに及び重ねて辯護士會長に擧げらるゝ等以て令名の噴々たるものありき、同三十五年郷里姫路市より推されて代議士に當選せしも直に解散せられ、其後改選期毎に同地の有力者は推薦する處ありしも固辭して起たず、蓋し職に辯護士にあつては議會の開會中間斷なく列席することを許さず、斯くの如きは政治社會に起つて自己の抱負を實行すること能はざればなり。

由來政治上の大阪市は自由黨派の根據地として氏の勢力甚だ振はず、以て氏が人物の狭少にして人の頭領たるに適せずと非難するものありと雖も、如斯は畢竟偏見の沙汰にして、

當今腐敗墮落の政治社會は、苟も政黨の勢力を扶殖せんことを自らに、自己の人格を没却して種々の陋劣手段を敢てするにあらざれば能はざることあり、之れ謹嚴にして節制ある氏が大阪人士の歡心を得ること能はざりしによる、而も二十年一日の如く職に辯護士にあつて、民權の擁護に任じたる氏の功勞や没すべからず。

氏は氣品高尚風雅にして常に法律の研究に怠りなき一面、又法律を司るものは審美の思想なかるべからずと爲し、寸隙を得れば直にピアノ、グワイオリン等の樂器を弄し、或は寫真機械を携へ天然の景物を描寫して一は心理の研究に資し、一は精神の修養に努めつゝあるが如きは、以て氏が人格の半面を窺ふことを得べし。



工學博士 小林泰藏君

大阪市水道課長

氏は明石藩に生れ、明治二十九年工科大學土木科を卒へ、直に海軍技師に任ぜられて、横須賀鎮守府建築科附となりしが、同三十一年大阪築港技師に轉じ、三十三年二月築港事業視察の爲に歐米に派遣せられ、英、佛、獨、米國を巡察して

同年十月歸朝、爾來大阪築港に従ひ、我國空前の大事事として滿目の集注せる同築港が遂に豫定の竣工を見るに至りしもの氏の力大に與つて力ありと云ふべく、同四十年淺深船に關する論文を提出して工學博士の學位を授與せられ、其該博な

る見地と嶄新なる研究は諸大家の稱讃して措かざる處である
其後築港事業の竣工と共に、大阪市が水道擴張、竝に下水道
道布設の大工事を起すに及び、氏の力に俟たざるべからずと
なし、大阪市技師に聘せられた、而して氏は單に技術上の手
腕而已ではなく、亦頗る事務の才に長せるを以て同市の水道
課長に任せられ、工事の設計監督と共に一切の事業を統轄し
て居られるが、蓋し竣工の曉には同市が衛生状態の面目を一
新すると共に、氏が一生の好紀念事業であらう。

▲氏が鐵筋混凝土船の發明

氏は亦多年研究の結果鐵筋混凝土船を創製建造せられたる
ことは著明の事實として我國の造船界に一新生面を開いたる
空前の快事である、今其一斑を摘記して之を紹介すれば

近時、鐵筋混凝土の適用著しく發達して、事實上耐火耐震の效果大なるを以
て、家屋其他の營造物に使用せられ、殊に水密性に富めるを以て溝渠、水管、
水槽、貯水池等の營造に適當である、而も混凝土に依りて包被せられたる鋼鐵
は直接に外物に接觸せざれば悉く鏽蝕を生ずるの恐れなく、更に水中の工事に
於ても専ら鐵筋混凝土を應用し、岸壁若しくは突堤、防波堤の如き悉く之を用ひ
海中にありては木材の如く海蟲の侵蝕なく、鋼鐵材の如く鏽蝕を蒙る憂ひがな
いので、鐵筋混凝土は現時に於ける唯一の建築材料である。

○氏は大阪市築港事務所に職を奉ずること十餘年、此間岸壁、棧橋、水管等の
築造に鐵筋混凝土を適用して悉く其好の效果を収められた、從來築港に於て使
用する船舶の数は七十餘艘にして何れも激烈なる操業に従事するので破損が類
類と起り、夥しく修繕を要するものあり、爰に於て去る明治四十一年の秋此の
修繕費用を減せんが爲に鐵筋混凝土船の設計に着手せられたのである。
○鐵筋混凝土船の發明は今より十數年前伊太利人ガベリニ氏に依りて行はれ
たるも、其構造は極めて秘密に關し未だ之を窺ひ知ることは出来ぬ、故に氏は本

邦に於ける之が設計の嚆矢である、而して本船は鐵船に比し建造容易にして耐
久力に富み常に工費の廉なるのみならず維持修繕に要する費用も亦低廉である
唯不利とする點は排水量の増加にあるのみで、氏が建造船に徴すれば重量の増
加約三割に及ぶと云ふ、然れど船體の大なる割合に重量は増加せぬと云ふこと
である、されば噸數三千噸以上の船舶にありては排水量に於て二割三割の増加
は敢て差支なく之に依りて工費が三割を減じ維持修繕費に於て更に大に得る處
ありとすれば、我國幾萬の船舶に對して其利する所夥からざるべし。
○而して百噸以上の船舶にありては二重底又は兩壁を構成して沈没の憂ひを少
からしめ、或は標識及繫船に使用する浮標の如き、或は浮船渠の如き亦も水中
に浮遊する物體に適用して不可なるものはないと云ふことである。

抑も氏が之を設計建造せらるゝに就ては、耐力、水密試験
竝に船底及船側に於ける混凝土の厚さ、或はセメントの粘着
力と其混和物、膠泥試験等に於ては多年幾多の苦心研究を重
ねられたるは勿論、現に昨年自ら資を投じて一船を建造せら
れ世の稱讃を博したるが如きは、如何に氏が學術に忠にして
且つ熱心なるものあるかを察するに足るべく、吾人は我國に
於て斯る嶄新有益なる發明ありたるを悦ぶと共に、氏が工業
界に貢獻せられたるの功勞を多とするものである。

氏は性溫良にして且つ淡快、一見當世風の學者と其選を異
にし、朴訥にして些の街氣なく學才共に高く一面亦事務の才
に通じて居られる處は、斯界の大家として大に敬仰に値すべ
き人である。



河野工務所主 河野天瑞君

所少からざるもの、如し、蓋し氏は十歳にして嚴父を喪ひ、
其後母の手に訓育せらる、氏の母堂は頗る健氣にして且つ賢
婦人と稱せられ、最も氏の養育に心を致し、父の跡を繼ぎ、
以て家名を汚さざらしめんとし、常に周到なる注意と訓戒と
を怠らざりき、即ち氏の人物品性と又其今日ある所以のもの
實に母堂の力與つて大なるものありと謂つべく亦偶然にあら
ざる也。

▲先老河野絢夫氏の略歴

河野絢夫氏初め俊藏と稱す、名は維藤、字は夢吉、號を鐵甲中頃野と號す
又月廊、錦壇、祝田、露南、楡村、石南等の別號あり、居を鐵甲書院、秀野草
堂、白鷗樓、祝田嵐、美竹西莊、第二事齋と號す、姓越智、家世々醫を業とす
父を三名と稱し氏は其第三子なり、文政八年十二月掛東郡綱千余子領村に生る
幼にして敬を家庭に受け、歳十三同郡和久村醫代谷順治氏の家に通學す、天保
十一年歳十六、丸龜藩儒員吉田五郎助(號其淵)に就て學ぶこと一年有餘、爾後
家居研學手卷を釋す時々近藩の文士と往來唱和す、其後弘化二年掛西郡伊津
村に出で醫業を開く時に歳二十一、嘉永元年九月東海道を経て江戸に遊歴し藝
園の諸名流と往來して談論人を驚かす思むものあり、將に中つるに奇禍を以て
せんす、乃ち去て日光山に赴き淨土院に寓して詩書を講す、後ち中山道を経て
家に歸り書を生徒に授く、嘉永三年更に興濱大學寺内に移り専ら教授を事と
す、翌年林田藩主建部内匠頭の聘に應じ藩校敬業館の教授となる、然れども未
だ家を移さず、五年九月讃岐を経て大阪に出て翌六年二月同地を發し山陽諸州
を遊歴し夫れより九州に涉り二豐二筑を経て肥前に入り長崎に到り去て肥後に
赴き到處文藝の士と訂交往來す、文名喧々今山陽の稱あり、安政元年十二月歸

大阪市に河野工業事務所あり、之れ土木工事設計監督及び
技術顧問の依頼に應ずる所なり、所主は即ち河野天瑞氏にし
て碩儒、詩人として有名なりし河野絢夫氏の長男、安政五年
十二月林田に生る、幼にして藩校敬業館に入り、十四歳にし
て東京林鶴梁の門に學ぶ、明治五年廢藩の後更に神奈川縣立
修文館に入りて英學を研修し、十年工部大學に入り、十六年
優等を以て土木工學科を卒業し工學士の稱號を受く、直に工
部省鐵道局に出仕して本邦鐵道業の爲に盡瘁する所あり、後
明治二十年日本土木會社技師吳出張所長として吳鎮守府建設
工事請負を擔任すること二閱年、それより奈良、山陽其他の
鐵道會社にあり、又大阪に工業事務所を開設して廣く土木工
事の設計監督竝に技術顧問の委嘱に應じつゝありしが、三十
四年厚く住友家に聘せられ別子鑛業所の土木に關する諸般の
設備を擔理して四十年に至り、辭して大阪に來り、再び工業
事務所の事務に執掌するに至れり、近時土木工事の設計等に
就て斯業界に最も名聲高き北濱四丁目の河野工業事務所は即
ちこれ氏の經營しつゝある所なり。

抑々氏の嚴父は儒學の大家にして其家庭は又嚴肅なりき、
去れば氏も亦幼少より氣品優れ、加ふるに漢籍の造詣深く、
儒學を以て其思想の根底を成せり、是を以て其人物も亦大に
他と異なるものあり、最も人格高く、名利の恬淡溫厚誠實當今
稀に見る君子人たり、而して氏の此に至れる又其母堂に負ふ

家二年四月林田に移居す、教務の傍ら家塾を開き名づけて新塾と云ふ、四方來學之士頗多し、文久元年請暇英道伊勢地方に漫遊し三四月にして歸る、同三年正月上京して當時二條城守備たりし藩主に謁し具さに當時の形勢に關し意見を開陳する所あり、歸後疾に罹り往再嶺に於て慶應三年丁卯二月六日終に卒す年四十三私諡して文忠と曰ふ、三味谷の墓地に葬る、妻保子井上三左衛門の第三女なり、一男一女を生む女名沼田藩醫士重田定興に嫁す男は即ち天瑞氏にして家を嗣ぎ東京工部大學に入り土木工學を專修して工學士の學位を得、現に土木技師たることは已に述べたる所の如し。

陶夫氏著述の符類凡三十九種あり而も中年にして病歿せしを以て未だ稿を脱せざるもの甚だ多く左に脱稿のもの九種を示さん。
近文奇賞四冊、小日本史一冊、詩餘一冊、覆轍詩談一冊、百一詩集一冊、祝詞百準一冊、雲鶴日程三冊、捕雀談一冊、鐵兜遺稿三冊(明治三十二年刊行)
未脱稿の著書中詩壇三尺は稿本三十餘冊に及び特に意を注ぎたるものなり、尙其他隨筆類十四種詩文稿和歌草等二十餘卷あり。

陶夫氏幼より學を好み殆ど寢食をも忘る、歳十五一夜詩百首を賦し神意の稱あり、資性醇篤人に接するに城府を設けず、談論縱橫辯論を以て稱せらる、極めて讀書を嗜み博覽強記凡和漢の學規はざるはなし、幼時より動植物の學を好み特に本草に精しく、又廣く植物を讀み理に深し、昔律も亦其嗜む所にして筵及横笛を善せり、國書及び和歌を野々口隆正に詩法を熱川星麿に問ふ而して詩は其最も嗜む所にして又最も人の知る所なりと雖も是其餘技のみ以て本領とする所に非ざるなり、教ふる所の儒學別に折衷の一派を樹立す、其尊奉祖述する所は論語を主とし後世謙愈を以て能く孔孟の道統を傳ふるものとす、而して道義には程朱を取り文章には歐蘇を法とし、學問の道致て一派の私説に偏することなし、晩年に及んで國學を崇び經緯漢の學說を立て、大に山崎闇齋の識見を稱揚せり。
陶夫氏は交遊甚だ廣く、當時の儒學名流は關の東西を問はず概ね訂交せざるはなし、而して其意氣最も相投せしは賴三樹、草場船山、松本奎堂、柴秋村、松林飯山の徒にして此他森田節齋、日柳燕石、藤井竹外、阪谷明庵等は皆深交を結べり。



大同生命保險會社長

廣岡惠三君

大名華族は天下無用の遊民なりとは世人の一般に稱ふる所である、然り彼等の多くは殆ど人生の意義を解せざるもの、如く、何等世に爲す所なく、唯座食安逸を貪りつゝある所を

以て見れば、疑ひもなく天下無用の遊民である、然れども大名華族皆悉く然りと云ふ譯には行かぬ、中には社會の競争場に立つて活動して居る人もあり、又世の趨勢を看視して時

代に投合せんとし、孜孜として日進の學問を修むる者もあれば、其準備と用意とに怠らぬものもある、廣岡惠三君の如きは儘に其一人であつた。

氏は舊小野藩主一柳末徳子の長男にして明治九年の出生、少時學習院在學の當時より既に秀才を以て聞えてゐたが、果然氏は身華貴の出でありながら、同族者間の情風に染まらず、飽迄健闘奮勵身を以て世に處さんと志しぬ、斯くて學習院を卒ゆるや、更に帝國大學法科に入りて政治學を修め、其在學中明治三十四年大阪の富豪廣岡家に入籍し、三十六年大學を出づるや、直に三井銀行に入りて行務を實習せられてゐたが翌三十七年養父信五郎氏の逝去せらるゝや乃ち養家に歸りて家事を采配すると共に、加島銀行の行務擔當社員となりて經營頗る宜しきものあり、大に同業者の嘆賞する所となつた、

同時に又加島銀行が江湖に信用を博するに至つたのは、全く氏の手腕に依るものと謂はねばならぬ、而して更に大同生命保險會社を起し、今は其社長として又其手腕と才識とは、遂に同社をして今日我保險業界の大立物たるに至らしめたる如き、其人物才腕の尋常ならざるものあるを推知するに足るであらう、然り氏は年少よりして一般華族の如く、遊逸安眠を以て人生の幸福とは思惟せず、又富豪家の當主となるや、所謂世の富豪家と其運を異にし、自ら實業界に身を處して劃策經營に怠らざる如き、洵に嘆稱すべき人である。
道に品性高く、溫雅にして一面には英斷果決、能く人を見又事物を察し凜乎として冒すべからざる所があり、實に當今華貴出身の異彩たるを失はぬ。

岸本汽船會社長

岸本五平君

播州出身の實業家として最も成功の躍如たるものは、岸本五平翁である、而して翁は單に自己の發展に而已汲々として決して他事を顧みない、最も實質にして世の一代分限の如く銜權を事とせない人であるから、隨て世人は氏が今日の富と成功を謳歌しないやうであるが、兎に角加東郡の邊隅より裸一貫を以て身を起し、自立獨行至誠眞業、最も激烈なる大阪商界の渦中に投じて、英敏なる大阪商人の群に入り、力戰奮闘、遂に今日あるに至れるは、單に播州の成功者たる而已ならず、亦明治實業界の成功者として大に推獎に値するもので

あらう。
氏は加東郡下東條村の人、幼少大阪に出で、長堀の肥料問屋某方に丁稚奉公をして居つたが、後獨立して肥料賣買を營み、諸國八方に駆け廻つて之が販賣に努めて居る折柄、北海道が千島群島と交換せられて我國の領有となつた、そこで北海道より海産肥料の輸入をした處が五倍六倍の利益を得た之が抑も翁が今日を爲したる基であつて、謂はば時世の援助を得たる幸運の人のやうではあるが、併し此機會を捉へたのは翁が最も偉い處である。

以上の如く肥料の買入によつて多大の利益を獲得したる翁は、世の進歩と共に地勢上我國が航運業の將來有望なることを看取して、夙に船舶を買入れて航運業を經營した、處が果して其明に違はず、益々時世の進運と共に復亦一大飛躍して遂に大阪に於ける廣海仁三郎、大家七平、右近、尼崎氏等と共に航運長者として、謳はるゝに至つた。其後業務發展の爲に岸本汽船會社を組織して、翁が統轄の下に息佳孚君をして

日本棉花株式會社社長 志方勢七君

實業界の傑物として羽振りある志方勢七君は單に實業而已ならず、市會議員として、亦市公人として大阪市に於ける重鎮である。

先代勢七氏は加古郡新井村岩井善助の二男にして、幼少艱の干鰯間屋に丁稚奉公を爲したりしが、主人志方利助氏の鑑識に協いて養子となり、終に勤儉力行の結果巨萬の富を致し志方家の今日あらしめたる人である。

氏は又姫路市野里町三好惣七氏の長男、先考の愛甥にして幼少より丁稚奉公として勤儉勵精の結果、明治十八年養子となり、二十四年七月に家督を繼ぎて今日に到る。

世人は氏をして單に果報者であると言ふ然れども、却々容易な事では今日に迫んだのではない、何と言つても一代にして巨萬の富を積み、苦楚辛酸を嘗め盡したる純大阪商人の資質ある、先考勢七氏の目鑑に協ふと云ふのが抑々非凡である上に、若い時には肥料買込の爲に草鞋がけで諸國八方に駆け廻

業務の一切を擔當せしめ、別に日清貿易を經營して次男兼太郎君が之を擔當して居られる、而して佳孚君の大阪實業銀行頭取として絶大の信望あり、兼太郎君が神戸海上保險の重役として、共に新進の手腕家を以て阪神の實業界に前途を嚆望せられあるを以て見れば、想ふに同家の發展は今後實に偉大なるものがあるであらう。

り、到底現今の青年輩では夢にも能きない辛抱を仕遂げたからである。

畢莒氏が今日あるのは先代の薰陶と、此時代に於ける經驗の結果である。

明治二十年頃故田中市兵衛氏と共に棉花會社を組織し、其後同社の財政紊亂に際しては入つて専務取締役となり、之が刷新整理に努め、今や往年の創規已に瘥れて多くの積立金を有し、堅實なる一大會社となつのは全く氏の畫策機宜に適した所以である。

昨年田中市兵衛氏逝去と共に推されて社長となり、其他日本火災保險、大阪生命、萬歲生命等の取締役を兼ね、攝津製油會社社長、商業會議所議員並に市會議員として中橋、谷口氏等と共に大阪市の市政刷新と發達に努力して居られる。

資性濃厚風彩堂々其資産と信用、加ふるに才能を兼備へ、聲望隆々大阪實業界の大立物として、氏の力に俟つ處多し。

高橋病院長

高橋江春君



人の身體を代表するものは、云ふまでもなく顔である、其又顔を代表するものは、眼であつて眼は一寸の使ひ方一つで如何な英雄豪傑でも忽ちに惱殺する云ふ恐るべき魔力を有する計りではなく、男子は兎も角女子が生涯の運命を支配するものは眼であると言つてもよい、そこで風眼や痘瘡で目を潰し、眼球が飛び出て大變に見醜い人や、めかちで、縁付の出来ないうやうな人の爲に、一大救世主として、吾人が崇敬の念に堪へない人は、即ち義眼の發明者として、喧傳されて居る高橋江春君である、今氏が經歷の一斑を叙すれば。

氏は多可郡石原村阪田泰壽の四男で、家累代眼科醫を業とし父泰壽翁は夙に義眼の發明に志して居られたが或日氏を膝下に呼んで、其志を繼ぎ義眼を發明して世の盲者を救済するやうにと篤と言聞かした、此れが即ち氏が義眼發明の動機である。

氏は父の訓戒によつて醫を志し、富津藩醫の澤部玄辰と云へる人に就いて洋醫の端緒を學んだが、故あつて十六歳の時

親族なる加古郡稻屋村の高橋家の絶家を相続することとなつた然るに此高橋家も又累代醫家である、故に里人の懇請によつて、氏は直に開業を爲し、明治十一年内務省より特に開業免狀を下附せられた其後各地の病院に入り研究すること前後八年間明治十九年姫路市錦町に於て眼科病院を開設したのである。

▲義眼の發明

氏が義眼發明の研究に苦心されたのは、即ち此間である、一體此義眼の濫觴は、頗る古く、西洋では已に三百年前より工夫せられ、近代に至り大に進歩して立派な義眼となり、我國に輸入せられたのは明治四年、ボアソナード氏が製品を持つて來たのが初めである、處が西洋人と日本人は、眼の形や色が違ふ而已ならず、其義眼は暫く符めて居ると、眼球の上に畫いてある血管の繪の具が溶解して、内側に色々の病を起すと共に光澤が全く失せて一見義眼と知れて甚だ面白くない

又一面我國在來の義眼を種々蒐めて参考にしたが皆結果が悪い、そこで何とか完全なものを發明したいと、家産は元より能き得るだけの借金もして之れに注ぎ、萬難を排して丹精を凝し、或は透明ガラスに着色し、或は龍甲製陶器製を試みる等其製造を築き替ふるなど二百餘種に及べりと、此一事は以て氏が苦心の一斑を知るべく、漸く十七年の冬に理想通りのもので出来上つた、而して此を試験するに色彩光澤透明何れも眞實の眼と異らざる而已か、運動も至つて自由に曇りの掛る様な事も無い、直に該品を携帶して上京し、松本長與池田三宅石黒伊東井上の諸大家の覽に供して大に賞讃を博し醫科大學部並に衛生局より本邦義眼の製造は貴下によつて完成せりと賞讃状を贈つて來た、又松本總監は爾來邦人の醜容を裝飾し眼目痼疾を瘳する、江春子の至恩と云ふべし、この頌辭を贈つた。

茲に於て二十二年居を大阪八軒屋に移し、後又現今の處に轉じたが、高橋義眼の名一時に昂り遠近より患者の押寄するもの引きも切らず、中には先年遙々雲州より或富豪の令嬢が治を乞ふて、鏡に對ひ一見して母子共に嬉し泣きに咽んだとか、又不縁であつた娘が縁付をして幸福な家庭を作つて居ると云ふ風な人は、今に氏の殊恩を謝して來るさうである何と悦ばしい事ではないか、今や各地の専門家や各病院學校等に用ひられ、一面には一箇年三四十萬圓の輸入を壓倒して居ると云ふのは、蓋し此大發明によつて單に眇者が幸福を得る計りでなく、實に斯界の名譽にして、又氏を産出せる縣下の一

氏は尙割刺術一名角膜染色術、所謂星染法の發明をした之れも四十年前佛國のウニツケル氏が唐墨を應用して發明して居つたが、唐墨には一つの毒素があつて刺激する、そこで氏は油煙を應用して毫も此の害の起らぬやうにしたもので氏が獨特の新案である。

▲有視義眼の發明

氏は又單に修飾的義眼に止まらず、盲目者に明を與へる所謂有視義眼を發明して今尙研究中ではあるが、先年近府縣醫師大會に之の發明を演説して大に諸大家の喝采を博し、且獨逸の眼科大家ヒルシュベルク氏を驚かした、氏の説によると全然視神經の喪失して居る感光性のないものは不可能であるが、盲者の中に正しく眼底に感光性を有するものなれば必ず手術の餘地がある而して世間には此種の盲者甚だ多く、一時角膜移植法は西洋にて發明せられ、余も又試みたれども結果良好ならず、之より無機質義眼の理に基き、人工角膜及虹彩連斯の復式装置を製し種々の工夫と實驗を以て、之の法を發見した、嘗て試みたるに困難なるは視力の保存にして最も永きは五箇月短きは八日に過ぎなかつた、現に視力保存の研究中であるが、何分材料の困難なる爲に進歩が甚だ遅緩である」と而して未だ大成の域に達したと云ふ譯ではないが、氏が熱心は必ず近き將來に大成せらるゝであらう、吾人は切に之を期待して居る。

近時醫學の進歩日々甚だしく斯道の學者博士も澤山あるが多くは先人の精粕を嘗めて居るに過ぎない、故に一時令名噴

噴たるものがあつても、忽ちに種切れとなると云ふ風であるが、實に氏の如きは天賦の能力を有して居る人であつて、其人類に貢獻する上から論じたならば、世の學者博士と稱する者宜しく氏の前に愧死すべきである。

●令嗣祐春君

氏は新潟の人高橋氏の養子となり、嘗て軍醫として日清、北清事件に従軍し日露の



高橋祐春君

戦役には四師團衛生隊長として出征し依勳功勳四等功五級に叙せられ、三十九年海外に留學し、獨逸ミュンヘン大學、埃國ツキンナ大學、ブダペスト大學に入り、専ら眼科を研究して、ドクトルの學位を受け四十三年歸朝せられ、今や副院長として診療に従事して居られるが想ふに嚴父江春氏の經驗に加ふるに氏が嶄新なる學術を應用して同院の發展は今後更に偉大なるものがあるであらう。

香野藏治君

成敗は時の運である、蜀の名將諸葛孔明が五丈原に斃れ、楠正成が湊川に敗る、兩者何れも成功者と稱することは出来ぬ、而も千歳の後赫々として光彩を放ちつゝあるを以て見れば、人は必ずしも時の成敗を以て論すべきでない、況んや商人が商戰場裡に立つて輪贏を決するに於て一朝其成敗を以て

之を上下せんとするは誤れるの甚だしきもの、故に人を陥れ世を欺き以て不義の富貴を貪らんよりは、吾人は寧ろ正義に敗れたるものに與せんとするものである。

氏は加西郡北條町に生れ、幼少大阪市老松町の砂糖商香野商店に丁稚奉公を爲したりしが、長ずるに追んで店主の鑑識

に協ひ遂に明治二十三年香野家の養嗣となつた、然るに香野家は未亡人なかりを店主として嘗て氏が業務を補佐し來り、漸次に業務の發展を致したるもの、爰に氏が公然養嗣子となるに及び業務の實權は氏の手中に歸した、开處で羈絆を脱すると共に從來の大抱負を實現して、遂に砂糖商界の泰斗となり大に斯界を睥睨しつゝありき。

▲氏が失敗に際して世間の同情

然るに明治三十六年相場變動のため倒産の悲運に陥らんとし、三井物産に對する負債約五十萬圓の巨額に上りしが、追に同支店長飯田義一氏は、從來氏が性行と手腕を認識して大枚五十萬圓の債務を帳消しと爲し更に再舉を圖るべきを以てしたりしが、通常人と異り氏は之を諾はず、無擔保無利足無期限に債務を存続することとなしたりしに、果して三十七年には百萬圓の利益を得て、前記の五十萬圓は之を償却した、然るに一起一伏は商界の常として、三十八年には氏が太腹にも、砂糖四十萬擔の見越輸入を行つた處が遂に意外にも約百三十萬圓の缺損となつた、けれども素より成敗を度外に付せる氏は意氣毫も銷沈せず、また世に有勝の隱蔽手段などの卑劣なことは決してやらない、直に各取引銀行へ對し財産は固より十三萬圓の保険契約並に建築費約二十萬圓を要せる本庄の別荘をも提供して潔く處置を乞ふた、處が各銀行共に氏の處決に同情して結局一枚の不渡手形も發表しなかつたさうである。

▲二十萬圓の擔保は前に下つた二品

爰に亦感すべきは氏が取引先なる神戸の某商館に二十萬圓の負債あるに對し、同商館の支配人は氏の將來に囑望して自己の財産十七萬圓を投げ出し館主に辨濟して呉れた、其時氏は感泣して措く處を知らず、直に其厚情を謝すると共に一通の借用證を交付した、而して其文詞に曰く、「ブラリと前に下つた二品を抵當に致せ云々」、實に兩者が此一瞬の消息は全然西郷南洲と勝安房の係を見るやうである、氏が當時に對する同情は單に之計りではない、同業者は十二三萬圓の融金をして氏の手許に贈る、亦大阪地方裁判所の檢事森下龜太郎氏は、幼時より氏と懇意になし且在學中香野家より月々學費を給與せられたるの恩誼に對し、之を酬ゆるは此秋なりと、辭表を提出して其地位を抛ち以て同家が整理の衝に當られたさうである。

▲香櫛園は氏が好紀念物

以上は單に當時の美譚として傳へられて居る二三の概略に過ぎぬ、想ふに人情は紙よりも薄き當今の世に斯る美舉のあつたことは、各同情せられたる諸氏の厚意を大に推獎すること共に、抑々一商賈に過ぎない氏に斯くも世間が同情を與へらるゝは必ずや偶然にあらざるを思へば、氏が前日に於ける人と爲りの一斑は推して知るべきであらう。

居るのを見て、渠等を爰に娛ましめんが爲に設けたもので、敢て利害を打算して行つた仕事ではない、今や同園の設備によつて三百萬の市民が精神的に享くる利益は眞に測り知るべからざるものあると共に、氏が不朽の一遺業として社會的の一大美舉であらう。

米穀仲買人

古門九右衛門君

播州には比較的投機界の方面に人物が多い、就中龜田介次郎、古門九右衛門氏の如きは成功者の最も雄たるものである氏は印南郡會根村にして、即ち同郷の龜田介次郎氏の爲に少壯より店務を補佐して居つたが、後獨立して自ら堂島に米穀仲買人を開業した、然るに吾人が所謂相場師の實業家龜田翁に訓育せられ、翁の秘訣を探り同一の軌道を辿つて之を經營

氏今や否として聲なく常に北濱場裡に輪廊を決しつゝあるが、蓋し氏の如きは生命だにあるなれば、必ずや捲土重來諸氏の厚意を空うするの人ではあるまい、蓋し小利口な小才子の義侠も同情もない人物に多き播州の地に、氏の如き男らしき男を出したるは群雞の一鶴とも稱すべきである。

したるもので、自ら他の仲買人と其選を異にし、堅實一方二十年一日の如く經營し來つて遂に今日に迫んだのである、故に他の仲買人の如く相場師根性は毛頭なく質實を旨として居る人であるから、比較的社會の尊敬は受けて居らぬやうであるが、富と信用の程度に至つては堂島場裡に於ける泰斗であらう。

印刷業

藤井護三郎君



氏は安栗郡山崎に生る、家代々米穀商を營み、少壯遺業を繼承したりしが、霸氣常に滿々一攫千金を夢想して、當時藩

主本多家に請ひ音水鐵山の依託經營に着手するや、忽ちにして維新廢藩となり、遂に本多家の財政改革に據つて該鐵山は

兵庫縣人物史

古門九右衛門君

藤井護三郎君

大阪の商人某が所有に歸する事となつた、茲に同氏と提携して事業の經營に力めたりしが、物價の昇騰と一方輸入鐵類のために折柄の企業も歴倒せられ休業の止むなきに至りしも、之れを休止せんか從來使役せる多數の村民は直に失職の不幸に逢ひ、結果路頭に迷ふの慘狀を演出すべきを憐み、俠氣を以て一手に引受け引續き經營すること三箇年間に及びしも、到底輸入品の競争に堪へ得べくもあらず、終に廢業の不幸を見るに至つた、去れど氏と労働者間の關係は極めて濃厚にして多數労働者の前途に深く同情を寄せ、其後更に以上の労働者を引率して作州英田郡大鳴銅山及び富士野の銀山を經營することゝなし、坑夫と共に洞窟に入つて奮闘怠りなかりしが又もや採鑛意の如くならず、失敗に失敗を重ねて遂に起つ能はざるの悲運に遭遇したのである、爰に於て今は如何せんか一時煩悶發苦に堪へなかつたが、熟ら謂らく失敗に懲りて又起つ能はざるは大丈夫の爲すべき業にあらず、不若軍都會に出で、再舉を圖らんにはと、驟然志を立て、舍弟說三氏と

共に大阪に抵り、西横堀に於て嘗て經驗ある白米小賣業を始め、頗る微々たる一小舗に過ぎざりしも、熱心奮勵の結果業務日々繁榮を來し、幾干ならずして多少の貯蓄を爲すに至つた、折柄心齋橋筋南本町に巻煙草製造業を營める某氏と親しみあり、故あつて某氏が廢業せんとするを耳にし、請うて之を譲受け舍弟說三氏をして之れが製造に當らしめ、氏は更に活版印刷業の前途有望なるを看取し初めて印刷業を開始した處が果して世の進歩に従ひ漸次發展すると共に業務を擴張して、明治二十五年新式の印刷機を据付け其後精巧なる技術の方面に全力を盡し、更に獨逸より最新式印刷機械を輸入して石版印刷を専らとし、多年眞摯熱心なる經營の結果は遂に今日の成功を見るに至つたのである。

氏は人ご爲り濃厚篤實義氣に富み而も名利に淡く、一面には風流を友として悠々餘生を樂しみつゝあるが如き亦以て欽すべきである。

莫大小製造業 高井說三君

氏は護三郎氏の實弟にして、護三郎氏の指導に依つて煙草製造を以て遂に今日あるに至る、而も人格の上に徴すれば、護三郎氏とは大に異り、虛榮の心飽くまで高く、氏が位置と資産に比例して中之島に於ける壯大なる邸宅は以て華奢街燈當世風の紳士たることを知るべく、又曩に市會議員の選舉に關し候補者として妙からざる費用と、且つ熱誠に叩頭主義を

固執して逐鹿場裡に現はれしも、頓に革新せる大阪市民は、最早タマニ一黨跋扈を許さず、氏をして市政に干與すべき資格なきものとして、青二才の二川氏の爲に失敗せるは氏が自己を見るの明なきに由ると雖も、實に吾人の同情に堪へざる處である。

日出ビール醸造家 横山助次郎君

氏は揖保郡龍野町の素封家大坪氏より出で、少壯或る縁故を以て山梨縣に到り、本邦ビール醸造の鼻祖たる江州の横田宗兵衛氏が同地に於てビール醸造を開始するや、氏は將來邦人の嗜好に適し、發達の見込ある事業なることを看取して、同所に入り爾來前後十年、其間ビール醸造の技師たる英人某に就き専ら技術を研究せり、斯くて其後東京手形ビールの醸造家宮内福藏氏の技師に聘せられ、明治二十一年大阪に於て帝國ビール製造會社の起るに迫んで、同社の技師に轉じ二十四年解散せらるゝや、氏は其機械一切を譲受け、同二十六年同市天満橋一丁目醸造場を設けて、茲に初めて個人經營となせしが、氏が技術の熟練なる非凡の逸品を出し、日の出ビールの聲價は頓に揚り、殊に清國に向つて輸出を試みたりしが、非常なる歡迎せらるゝに至り、其間朝日ビール會社より

商標問題起り、終に訴訟となりしも結局氏の勝訴に歸し、今や清國市場に於て日の出ビールの聲價は朝日ビールを壓倒するに至れり。

氏は更に業務發展の爲に今回尼崎に一大醸造場を建設し、附屬營業としてウキスキー、ブランドー、ブドウ酒等を醸造し、而も個人經營として各同業會社に對抗して毫も遜色なく益々發展の偉大なるものあるは、全く氏が多年の經驗と誠實熱心なる經營の結果に外ならず。

氏は性堅忍不拔、至誠正實人に接するや他迄親切を以てす故に往々信するものゝ爲に奇禍に陥ることあるも毫も之を追及せざるが如きは、人ご爲りの一斑を知るべく、道に名門の出悠揚として氣品の高尙なるものあるは吾人の欣慕する處なり。

大阪株式取引所仲買人 中村秀五郎君

取引所仲買人と云へば直に投機師とか相場師とかを聯想せしめ、其人物を認めないのが世間の通弊である、乍併今日の株式取引所が我經濟界と密接の關係を有するものとすれば、此取引所仲買人は最も進歩せし文明的の職業であらねばならぬ、従つて仲買人には相當の手腕と人格とは勿論、資産と信用の伴うものがなければ到底其職責を盡すことは出来ぬ。

氏は濃厚謙直にして其學者風の態度と人に接して莊重なる

應接とは、世の所謂相場師なるものと大に其選を異にし、確に其人格を認め得らるゝと同時に、文明的仲買人として其素質を具へたるものと云ふことが出来る。

氏は赤穂藩に生れ後岡山師範學校に入り、明治二十八年迄岡山、兵庫縣に教鞭を執りつゝありしが、令兄不破福松氏が嘗て大阪東京の兩市場に於て、熾に株券仲買人として業務を經營しつゝありしを以て、之が經營監督上氏を待つ切なる

兵庫縣人物史 横山助次郎君 中村秀五郎君

ものあるより、茲に教鞭を抛ちて東京に到り、兜町支店を経営することゝなつた、然るに後明治三十六年不破氏の歿するや、氏は之を繼承することゝなり、遂に大阪本店に戻りて自ら仲買人を開業したのである。

氏は嘗て教育家を以て任じた人で自ら普通仲買人を以て律すべからざるものあり、今日の株式仲買人の多くは相場師根性を以て權謀術數、己れの利益を收むることに汲々たるに反し、氏は其人格と共に正義實着を旨とし、専ら信用を重んじ

所謂顧客本位を以て其職責を盡しつゝある人にして、要するに氏が今日の發展は、一に此の至誠を以て盡瘁したる結果である、殊に近時仲買人の品性問題が屢々世評に上り取引所改善問題なるものが學者、爲政家、實際家に依て唱へらるゝや氏は竊に仲買人の品性を向上して顧客本位を絶叫し、改善問題に盡力しつゝあると共に、其業務の經營は最も秩序を重んじ信用を専らとして居られる。

堂島米穀取引所仲買人

大阪市會議員

二川茂助君



昔から相場師は三代續かないと云ふが誠に至言である、世の中で最も榮枯盛衰の劇烈にして新陳代謝の頻繁なるものは投機業者である、今日の裸一貫も一朝機運に乗ずれば、明日は百萬長者と成り濟して世人羨望の標となり、今日百萬の富を擁して居ても明日は元の杳阿彌となることは敢て珍らしくない、實に之れ程激變する職業はないのである、隨て投機業者は子々孫々まで永續することが困難であると云はれるので

あらう。
二川茂助氏の先考は加古郡二俣村の人で、初めて堂島仲買人となり、歿後嗣子鹿之助氏之を繼ぎ、是亦夭折せられて氏が其後を享けて開業以來既に七十年、爾來仲買人として堂島市場に隠然一勢力を有し、同僚關係者に推重せられつゝあるは實に珍しい家である。
確か昨年か一昨年秋かに、堂島仲買人中の少壯有爲者が

一團體の明治會を組織し、仲買人の品性向上、從來因襲の弊風と認むべきもの、改善、其他現時の經濟組織に適應した取引方法に革めると云ふ様な決議を以て大に活動したことがあり、此改善派の首唱者となり其牛耳を執つたものは實に現主二川茂助氏である。

昨年大阪市會議員の改選に際し市政改革を標榜して、從來市政の廢頽せるを慨き同志を糾合して市民會の旗幟の下に、

大に市民を覺醒した際に、市民會の推選する處となり、市會議員に當選したのも同じく二川茂助氏である。
氏は資性溫順、年少氣鋭にして店務の發展に努力し、今や堂島仲買人中の少壯有爲者として囑望せらるゝのみならず、氏が公人としての將來は最も前途を有するもの、今後營業の發達と共に氏の人物も漸次向上すべきは之れを疑はない。

大阪播州會幹事

改野曠君



由來播州人は輕薄である、情誼に乏しい、隨て團結心がなく、地方勢力が振はないとは吾人が夙に絶叫すると共に常に憤慨に堪へざる處にして本書編纂の趣旨も亦爰に在るのである、然るに之を出身者の集合地としては東京に比較したなれば、社會的の位置並に出身人物の教育程度も亦低い、殊に自利に重きを置いて、社交の念慮にも乏しい、謂はば裸一貫で身を起し寸隙を争ふ商業家の惡戰苦闘を経盡しつゝある、大阪在住の人々によつて播州會なるものが創設以來已に二十年會すること三十七回に迫んで居るのは全く輕薄を以て特色と

せる播州人の組織としては一寸奇怪の現象であつて、抑も又一國の會同として、僅か郷里を距ること三十里の地に於て愆くも出身者が情誼の切なるものあるかを想へば、吾人が曩に播州人は輕薄である否な情誼に乏しいと言つたが、今や幾らか前言を事實の上に打消すもので、實に快感に堪へざるに、且つ之を他に誇らんとするものである、而して本會が其今日に至れる素より在阪出身諸氏が情誼の切なるものあるや勿論であるが、抑も亦本會の創設を主唱すると同時に爾來引續き、常任幹事として終始一貫本會の爲に斡旋せられつゝあ

る、改野君の勞を感謝しなければならぬ。
氏は改野耕三氏の令弟、幼少同地の矢野塾に入つて漢學を修め、後地方の各舉職に盡しつゝ、あつたが、明治二十年頃奮然として大阪に抵り、初めて藥店を開き子孕藥其他諸種の要藥を發明して、一時大に聲價を昂め家道愈々振ひ、遂に今日に迫んで居る、氏は性高尚にして家道發展の傍ら勉めて公共

に身を致し、嘗て市會議員、又は府會議員、府參事會員等に擧げられ、或は藥業新聞を發刊して斯界の進歩に貢獻せるが如き、亦播州會の組織と幹旋に於ける、實に常人の能くし得べき處ではない、以て如何に公共に熱心なるものあるかを推知し得べく同時に氏が人爲りの一斑を解することが能きる。



鹽業家

宮崎元治君

赤穂鹽の名聲は四十七士の忠誠と共に喧傳せらるゝ處である、而して赤穂鹽は硫酸の含量稀薄にして、比重輕く、資質輕鬆、色澤純白にして、混合飽和物無き純鹽素にして、殊に燒鹽は我國唯一の名産である、而も之が精製に苦心慘憺たる方法を發明し、以て其聲價を擧げたる宮崎元治君の功勞は没却することは出来ぬ。
氏の祖先某、此燒鹽精製の方法を發明して氏に至り六代、代々燒鹽の製造を以て業として居つたが當時尙世間の需用は甚だ僅少、従つて製造の方法も又幼稚にして、凡て鹽田に於

て之が製造をなし、其形狀の如きも大小區々、品質粗惡定に微として、單に一名物たるに過ぎなかつたのである、然るに明治十年西南役に初めて軍糧品として多額の需用を喚起したが、而も多額の製造には少からず困難を感じたものであつた。茲に於て氏は熱心研究に怠らざりし結果、明治二十三年に到り漸く特種の竈を築き、機械的に食鹽の再製を爲し、以て大規模の製造方法發明したのである、氏が發明の方法に依ると機械的作用に依りて含有中の汚穢物、有害物を除却し、一定の形狀に仕上ぐる事を得る而已ならず亦燃料を節約する利益

がある、开處で竊に時機を待つて居ると其後日清、北清事變に際し、大倉組に依りて多額の供給をなし、其筋の賞賛を博して、初めて氏が多年研究苦心の効果を試験することを得たのである。

其後日露戰役には陸軍糧秣廠より直接、氏に用命あり性義氣に富める氏は大に發奮して、一は國家危急の際、一は祖先以來の家業を發揮すべき緊切の好機會となし、赤穂町に一大製鹽場を設け、多數の職工を使役督勵して日夜寢食を忘れて只管國命に違はざらんことを誓ひ、而も遠征將卒が危急の一

餐たることを想ふて、品質の精選と納期を誤らざらんことに勉めたりしが遂に模範的用達商人として其筋の推奨を受くるに至つた。

平和克復後は大阪市西横堀に支店を設置して食料品として全國に販賣を試み、今や販路大に拓けて輸入食鹽を防禦するに到れりと云ふ。
氏は爲人、淡快にして、同情と義侠に富み、又風流に心を寄せ世の所謂成金者と自ら其選を異にして居る。

大阪府會議員

西海作次郎君

氏は明石郡出身、師範學校を出で、小學校に教鞭を執つて居つたが、毎日鼻垂れ兒を相手にして、蜚かす飛ばず、窮問に泥蟠して猿癩と共に老ゆるが如きは氏の性にあらず、若かず都會に出で、奮闘劇戰、一花咲くも咲かぬ迄も人生の快事と、野心を勃發させたのが明治二十五年頃であつた、最初大阪に出で、松屋町に煙草店を出したが早速思付いたのがパイプの發明であつた、即ち一時愛煙家の流行となつた象牙のパイプは氏の發明である、些細なものでも流行程恐しき力のあ

居るものはなく、此新發明のパイプが一時非常の勢を以て歓迎せられ、忽ち數萬圓の利益を收得したのである、斯く云へば氏は洵に坦々として成功した様であるが、併し之れには却々骨を折つたと言つて居る、故に畢竟商業に掛けては機敏な抜目のない氏であるから、斯る成功を遂げたのである、其後大に發展して現今は心齋橋通に立派なる雜貨商を營んで居られるが、大阪市に於ける小賣商業としては鉅々たるものである氏は又相當の教育あり、英敏にして淡快、現に區會議員、府會議員に擧げられ大阪市の紳士として相當なる聲望を有して居る。

材木商 朝田荷藏君

人の成功には種類がある、程度がある、強ち財巨萬を重ね顯名天下を蔽ふと謂ふに至つた者而已を以て、成功者とは目

すべきでない、天下無役の者なしとすれば、總て事の大小を問はず己れの従事したる職業に向つて、奮勉努力而して素志

を其徹したる者を以て何れも成功者と謂つべきである、然らば即ち氏の如きは眞に成功者と稱すべき人である。
氏は神崎郡瀬加村に生れ家業を農を業として居つたが決して裕福な百姓ではなかつた、故に氏が幼少の頃より農閑必ず木挽を業として漸く家計を補うて居たが、徒らに山澤の樵夫となつて生を畢ることの如何にも腑甲斐なきを感じて、斷然鋸一枚を肩にして大阪に抵り、或る材木屋に入つて職業に従事せる内、材木賣買取引の方法を研究し、多年力行の貯蓄を以て、初めて商業に従事せしが、偶然にも西南戦役によつて

堂島取引所仲買人

氏は加古郡新在家村の人にして醬油製造を業とし、明治三十五年頃、姫路取引所仲買人となり、又加古川に於て米穀肥料の賣買を營み、堅實なる經營は大に斯界の信用を博し、更

森田宇佐吉君

材木の暴騰となり一時に奇利を獲て資本を作り、多年の經驗は遂に商界の雄者となり、今や數十萬の富を擁するに至つたのは、全く氏が困苦經營の結果にして所謂天の報償である。
凡そ人は成功と云ふも無爲徒然にして決して成就するものではない、人には能不能あり識に深淺あり第一自己を知らねばならぬ、自己の天分の如何なるかを知つたならば必ず其所に天賦は見出されるのである、一度其天賦を見出したならばそれに向つて勇往邁進奮闘努力を怠らざること、氏の如きにして初めて大成するのである。

樂器製造販賣

寺田清四郎君

播州出身の人物を通觀するに、何れも官吏或は銀行會社員等に多く、而も實業界の方面に於て成功の大小こそあれ、最も多くの人物を輩出して居るものは揖保郡である。
氏も亦揖保郡出身者の實業界に成功せる一人にして、元揖東郡天満村に生れ、明治十七年頃初めて大阪に到り大工を以て職業として居つたが、同二十六年頃偶然或る人より幻燈の修繕を依託せられ、慧敏なる氏は初めて之に興味を有すること共に、將來文明の進歩と共に大に世に用ひらるものなること

を看取して之が製造法を會得し、爰に製造販賣を開始したのである、然るに幸にも日清戦争となり、頗る需用を喚起したる而已ならず、輸入品に比して甚だ價格の低廉なるが上に、氏が熱心なる苦心研究の結果は技術の上に於ても毫も舶來品に遜色なく、業務益々發展して今や本邦に於ける供給は殆ど氏の一手に歸するに至つた、蓋し氏の今日ある元より着眼奇抜なるによるや勿論であるが、亦熱心にして忠實且つ才能の非凡なる場であらう。



播重左衛門君

最も艶麗にして優雅、且つ簡單にして人の耳目を樂しましむるものは、女義太夫である、而して此義太夫なるものは、即ち元祿時代の一遺物にして、今日の如く素淨瑠璃ではなく必ず綾釣り人形と共に演ずるを例として居つたが、之れを今日の如く單に素淨瑠璃として最も簡單瀟洒に演ずることを、卒先改革した人は播重左衛門氏である、而も氏の門下に曠古の名媛豊竹呂舟を出し、畏くも天聽に達するの光榮を得せしめたるもの、一は又氏の功勞に歸せなければならぬ、其今日に至れる道程を簡單に列舉すれば。

氏は飾磨郡今宿村に生れ、少壯裸一貫にて大阪に出で、肴屋もすれば、料理屋も行く、甚だしきに至つては紙屑買迄も行つた、恐らく世間の職業で氏の經驗しないものはないと云ふ位に、艱難辛苦を嘗め盡し、結果明治二十三年頃或る動機より、大阪日本橋の北詰に、綾釣り應用、昔風の義太夫席を開いたのが初めて、其後故あつて、相生橋の井筒席に移り此時初めて素淨瑠璃に改めた處が、意外にも喝采を博した、爰に於て一樓の光明は認めたりしも、斯う云ふ社會の有勝と

して、他人の嫉みや其他種々の障礙を受け、各所の席に轉々して顧客を吸集する迫がない然るに兼て氏が肴屋時代に、出入りをして居つた八木豊之助と云へる人の義侠に由つて、資本を借受け、清津橋に一席を新築した、其後大に發展して、明治二十八年頃現今の播重席を道頓堀に新築して、遂に斯道の改良を大成すること共に、氏も亦巨萬の富を爲すに至つた。
以上は單に氏が事業の筋途を紹介したもので、實に氏が斯業に於ける困難は、到底他人の想像の及ぶ處ではない、氏は斯る苦勞を嘗め盡した人丈けに、人情に感ずる事最も切に、往年恩人八木氏が病氣に罹るや、氏は八木氏の恢復を祈請して、食を斷つたと云ふ事である、又以て氏が人を爲りを偲ぶべき一美談ではないか。
一女あり、彦根の人百々恭之介君を迎へて、以て相續者として居られる、恭之介氏は明治三十年大阪醫學校の出身にして、日露戦役の際軍醫として第四師團に従ひ出征して、今や陸軍中尉である、最も恭謙温良氣品高雅にして書畫骨董の美術を嗜む。



印刷業

井上忠藏君

大器晩成と云ふ、人の論評は棺を蓋ふて後定まるもの、人の成功も又最後の勝利にあり、然るに世の青年之れを是れ悟らずして狼りに功を急ぎ、未だ才なく識なく經驗なく、徒らに種々の事業を起し、一敗地に塗れるや意氣銷沈して亦起つ能はざるものあり、如此は所謂薄志弱行の敗北者と云ふべく蓋し夫れ功を最後に期して蹉跌失敗毫も意に介せず、如何なる艱難辛苦に遭遇するも不撓不屈、奮闘力戦するに於ては、運命は必ずや最後の勝利を與ふるものにして、即ち井上忠藏翁の如きは晩年の成功者として稀に見るの人、青年者の好模範として推奨するに足るべし。

翁は姫路野里の木綿商米屋忠兵衛の長子、十九歳獨立して木綿商を營む、然るに思想の幼稚にして意思の堅實ならざる年少者が一度竊糾を脱するや、四圍の誘惑は青春の血に燃ゆる翁をして爾來放浪、放逸忽ち祖先傳來の遺業を抛ち遺産を蕩盡するに至れり。

明治十三年意を決して佐賀に赴き雲南亭と云へる料理屋を開業し、同二十七年迄經營せしも是又意の如くならず、兎角

する内一切の資本家財に至るまで悉く蕩盡して、最早其日の生計にも困難するの境遇となり、而も無一物、無經驗如何ともする能はず、爰に翻然一大決心を以て、遂に一切の衣類什器迄も賣却し、僅かの資金を作り、遂に大阪に漂泊せり、而して或る時番付屋の職工となり、其内番付印刷の内容も會得して、自ら之を創め一家舉つて日夜勤勞の結果は、茲に漸く端緒を得て漸次活路を見出し、所謂天は自ら助くるものを助く、遂に芝居の番付は氏の一手に掌握し、現に大阪南區鯉谷中橋南詰に一大印刷工場を設けて今日の大發展を見るに至れり、而も無一物無經驗にして只不撓不屈の奮闘心を以て、大阪に到りし氏は實に四十八歳の晩年なりしと云ふに至つては世の薄志弱行輩の企及し得ざる處、確に青年者の興奮劑と云ふべく、性頗る義侠に富み、資性温厚の内に豪毅、人の哀を乞ふものあれば之を救済するを以て快となし、而も元氣の旺盛なる尙壯者を凌ぐの慨あり、先年還曆紀念として郷里姫路神社に神馬を獻じたるが如きは、氏が成功の好紀念として大に推奨するに足る。



川口嘉吉君

床の間四面硝子壁を以て繞らし、恰も松島の料亭現長の雪隠の如く、金塗りの屋臺骨を扁額として、コスメチックを頭に塗り付け、生へ下りの耳以上に剃り上げた處などは、當世ハイカラの標本的人物として頗る氣障也、十三の時郷里姫路を飛出して山陽鐵道の給仕となり、鐵道學校に通うて居つたが、偶々岩崎博士の知遇を受け遂に鐵道技師となり、後南海鐵道が玉車の製造に就て聘せられて之れが監督をなし、夫れ

より關西鐵道の技師に轉じ、故あつて神戸七十七番の輸入係となり、更に轉じてアメリカン、テレチング商會に入り、各地機械の販賣を司つて居る、却々の敏腕家で、京都水道、阪本銅山、住友、貝島の炭鑛、日本、佐賀、金山セメント等の機械は何れも氏の手に依つて供給する事を得たと云ふ、同商館の利き者である、年齒少壯マダ〜前途多望の人物として期待する處があらう。

キルク製造業

進藤清雄君

氏は龍野藩士にして維新の際、藩の授産金を以て同地に實業社と云へるキルク製造事業を開始せられしに當り、氏は明治十三年大阪の販賣店主任に擧げられ、之が販賣に執掌しつありしも、當時所謂士族の商賈は營業幹部が經營の法を誤

り引續き不振の状態に陥り、已に廢業せんとするに當り、自ら之を引受けて個人經營となし、爾來眞熱心なる經營の結果は遂に今日の發達を見るに至り家道頓に榮へ播州出身の實業家として大阪市に著聞せられつゝあり。

●其他播州出身の人物

以上の外播州出身の人物にして、文部省視學官小泉復一、大審院判事島中島政司、奈良高等師範學校長野尻精一郎、軍醫監大西龜太郎、軍醫正中川十全、外務省通譯官國府寺新作氏等の逸すべからざる人物ありと云へども、編者は未だ會接の機會を得ざれば爰に乍遺憾紹介することを得ず、以て他日に期せんとす乞之を諒せよ。



但馬出身之部

舊出石藩主
貴族院議員

子爵 仙石政固君



(明治四十三年十二月稿)

●同家の祖先

仙石家の祖先を繙めれば、内大臣藤原鎌足の曾孫左大臣魚名四世、越前守高房の後裔、吉信の三男伊傳の後なり、伊傳より十三世を経て大膳亮重久に至る、重久初めて仙石次郎と稱す、それより九代越前守秀久に至り、秀久は織田信長に仕へて祿千石を賜り、天正六年四千石に加増せられ、同八年に淡路洲本を領し、同十四年島津氏と戦ひ、同十八年秀吉の小田原征伐に従ひ手勢纒に二十二人を率ひて早川口を攻めて之を破る、其功に依つて信州小諸に封せられ五萬石を食む、慶長庚子の亂東征に従ひ、上國亂起るに及び、小諸城に據り上田に備ふ、子兵部大夫忠政元和八年一萬石を加増せられて上

兵庫縣人物史 子爵仙石政固君

田城に移る、それより政俊、忠俊を経て政明に至り出石に移封せられて五萬八千石を食む、それより五代讃岐守政美に至る、政美早く卒し、子なく其弟政賢も亦性羸弱なるにより、政賢の弟久利家を嗣ぐ、久利尙幼、家老仙石左京不軌を謀り座して三萬石に減封せらる、左京誅に伏して事落着せり所謂仙石騷動是れなり、其子久成天性羸弱を以て現子爵政固君其後を繼ぐ、氏は前記政賢の長男なり。

▲子爵の略歴

子は天保十四年十二月出石に生れ、幼名を銳雄と稱し年甫めて六歳、藩士麻見義比の家に入り家族と寝食を共にして教育を受くること十二年、其間旦夕文武を修められたが此時に

於て初めて世態を味ふことを得たと言つて居られる、而して維新の際に於ける出石藩は擧つて佐幕派にてありしに拘らず子は獨り夙に尊王攘夷を唱へ、時に元治元年六月江戸に赴かんとせられるに當り、子が嘗て勤王の志士と書寫山に會せられた杯と流言するものもあつた爲めに、幕吏は之れを聞いて藩の老職を召し温言以て子の入京を止めた、けれども微行して京都を過ぎ、石部驛に抵つて先代久利公と共に江戸に入られた、幾もなくして宗家仙石久利公が子を養つて以て嗣となさんことを請はれたが、幕府は子を疑懼して容易に之を許さず、慶應元年五月に至り始めて之を許す、夫より贊を加藤張卿、田口江村の門に執り、又安井息軒、芳野金陵の門に出入して居られると、幕吏は之れを忌み人をして謂はしめて曰く宜しく林大學頭を師とせらるべし、然らざれば幕府の嫌疑釋けずと、而も子は遂に肯かれないかつた、此年意見を具して傳奏野宮中納言に封事を呈し、亦明治元年に伏見の役が起り將軍慶喜倉皇として江戸に逃るゝに及び、直に謁して時事に就いて具申極諫せられたが其言は容れられず、爰に於て京師に上り、當時久利公は京師に居られたので、子は代つて藩政を執り、政廳を藩事、文武、會計の三局に分ち人材を淘汰し、更に議員を置いて行政、議政の體裁に倣ひ、總て學制及び藩政を革め、同二年初めて天顔を拜して二月に出石に引取られた、然るに同年四月に大中小候伯を東京に召集して國是を議せらるの命が下り、子は父の代理として上京せられ、同年五月勅答取調御用を仰付られ、同十月大學小監に任せられたが時に學制の方針は未だ立たず、皇、漢學の爭論は日々喧しく

異論百出して底止する處がない、爰に於て子は到底事の爲すべからざるを察し、學制大意を述べて辨官に呈し、併せて其官を辭せんことを請はれた、蓋し其主旨は人材を成育するは専ら漢學を修むるに在りとの議論であつたから、皇學者流は之れを聞いて益々憤激し、或は奸賊と稱し、流言して子を途に要撃すべしと迄云ふに至つた。

同三年正月家督を襲ぎ、出石藩知事に任せらるゝや、尋いで女學校を設け士民の女兒をして女禮、裁縫及び刺繍等の教を授けられた、之れ蓋し我國に於ける女學校設立の嚆矢である、以て子が如何に教育に意を注がるゝこの厚きものありしを知るに共に、時世を看取せる明のあつたことも亦窺はれるのである、同年五月晚翠樓叢書六十五卷を史料參考として大政官に獻納せられ（此書は子が元治慶應年間に江戸に在つて苦心纂輯せられたもので世評に高き名冊であつたが惜しいことには同六年皇城炎上の際に烏有に歸したさうである）同五年四月同家累代の重寶千鳥の香爐を宮内省に獻じ、同六年三月子が壯年の頃より集輯せられたる書籍百十二部三百七十一卷を文部省所管書籍館へ獻じ、同八年四月侍從に任せられ陛下が時に龍馬を調し賜ふにより大坪本流五取傳書、及び其他の馬術傳書併せて二百卷、射術傳書二十三卷を獻納せられたる等、子が如何に公事に篤かりしを知るべく、明治二年三月越前守に任じ、同年學校權判事、又は大學大坂に或は大學少監に任せられ、同三年四月出石藩判事に、同四年九月少議官に、同八年四月侍從に、同十二年九月宮内省七等出仕に、同十五年一月内務權少書記官に、同十六年八月内務少書記官

等に任せられ、同二十三年七月貴族院議員に當選し、同三十年同三十七年共更に再選せられ、現に貴族院議員として尙友會に屬し諸々の聞わがある。

子は齡已に古稀に達して在られるが壯健なことは壯者も及ばぬ程で、氣品の高雅なる上に冒すべからざる權威を具へ、而も舉措悠揚として加ふるに我國の純武士的精神と孔孟の教へに訓養せられたる方で、隨て貫目もあり、輪廓も大にして眞に古武士の風を存して居られる。

氏は藏卿、矯堂と號し、後磐山と改め、堂を晚翠樓と稱し、漢籍の造詣最も深く、文藻詩藻に富み、嘗て獎順議略、中興議略、議略拾遺、擬彈密疏、擬彈附疏、杞憂錄、滌淚秘言、遠馬小志、浴沂雜記、丹誠錄、刪補仙石家譜、磐山餘滴等の著がある、詩歌亦多く左に二三を摘載すれば



仙石 官として本年公の歐米漫遊に隨行せられ、其後貴族院書記官、徳川議長秘書官、其後編者が貴族院に訪問せるときは、氏が歸朝せられたる數日の後で、種々の有益なる洋行談を傾聴することを得、其後芝神谷の本邸に於て再び老公と共に會接せられたが、風采瀟灑最も謙讓にして社

虫の音も猶枯のこる淺茅生に薄霜見わて冴ゆる月かな。
以て其蘊蓄の深きを窺ふに足る。

▲子の家庭

子の令夫人善子氏は木下俊政の女にして四男一女を擧げられ、長は則ち令嗣政敬君にして、次忠久君は昨年政謙子爵家の養子となり、他は皆在學中である。

▲令嗣政敬君

氏は明治三十一年帝國法科大學政治科の出身、同三十二年文官高等試験に合格し、其後貴族院書記官、徳川議長秘書官として本年公の歐米漫遊に隨行せられ、其後編者が貴族院に訪問せるときは、氏が歸朝せられたる數日の後で、種々の有益なる洋行談を傾聴することを得、其後芝神谷の本邸に於て再び老公と共に會接せられたが、風采瀟灑最も謙讓にして社交に慣れ、敢て貴公子の態度はなく且つ「私も出石の方へは誠に濟まぬことになつて居りますので、一度歸郷して皆様に御目に掛りたいと思つて居りますが何分公務上其隙を得ませんので」と其辭令の謙遜にして如何に郷里を念はれることこの厚きを知るに共に最も敬仰すべき人である。氏の令夫人素子氏は久邇宮朝彦親王殿下の第六女にして琴瑟相和し、華胄界の諸々として大に將來を囑望せられて居る。

蓋し徳川幕府三百年の泰平は、各藩主何れも祖先が劔戟の

○笠 置 山

天歩艱難想昔年 山河依舊恨綿綿
攀援獨欲尋遺蹟 露墜松陰春冷然。

○秋

新涼上枕曉凄々 殘月一痕江水平
知是牽牛花候好 團丁早起排幽蹊。

○馬 上 見 花

咲匂ふ花の木蔭を乗くれば、いさめる駒もしづまりにけり

○月 前 霜

兵庫縣人物史 子爵仙石政固君

間に出入して、武を練り功を擧げ以て家を興し身を成したるものあるを忘れ、徒らに煙逸華奢に流れ單に遺勳に座守するの有様、恰も大名華族は無爲無能の代名詞の如であつたが、世の進歩に伴ひ甲冑貴紳も又有爲の材に乏しからず、殊に仙

舊豊岡藩主 子爵京極高義君

●同家の祖先

宇多天皇の皇子、式部卿敦實親王の子、左大臣雅信の苗裔中務少輔京極高吉の次男、丹波守高知の後なり、高知豊臣秀吉に仕へ若年にして近江蒲生郡の地五千石を賜ふ、文祿元年男毛利河内守の領せし、信州伊奈郡の地八萬石を食む、後慶長庚子の役徳川氏に従うて戦功あり丹波國に移り十二萬三千石に加増せられ、其次男修理大夫高三分家して同國田邊の城主となり、三萬三千石を領す、それより九代を経て先々代甲斐守高行に至る、此間寛文八年封を豊岡に移され、享保十二年一たび絶家して更に一萬五千石を賜ふ。

▲人物の養成に意を致されたる二君

高行公淵達明敏にして前代の弊を革め、法制を嚴にし、節儉を勸め、因循遊逸の風を一洗し、最も育英の志に敦く、稽古堂を設け名儒を聘して文武の學を講せしめ、俊秀の子弟を選びて遊學せしむる等、大に人材の養成に努めらる、蓋し一

石子爵父子の如きは、縣下舊藩主中の巨材たる而已ではなく實に我國に於ける貴族中稀に見るの人物として吾人が大に尊崇する所以である。

小豊岡藩が今日學界に多士濟々たる所以のもの多くは此時に胚胎せりと云ふ、高行薨じて先代高厚公之を繼ぐ、高厚公又前代の意を承け、藩政を治めて文武を振興し、藩校稽古堂に力を注ぎつゝありしが、維新廢藩と共に稽古堂も亦廢せらるるに至りしも、後資林義塾を設けて厚く保護を加へ、専ら後進子弟の誘掖指導に励められし、初め高行、高厚二公相繼いで共に和歌山藩の儒官遠藤義齊に師事し、又士族を選び就きて業を受けしむ、遠藤氏の學専ら實用を主とす、其豊岡藩諸生を訓へて、空論浮説、浮靡雜博を戒む、二公を初め時の執政舟木外記深く此主義に服し、子弟教養の目的を定め、後の參政猪子清、資林義塾長久保田清一氏等亦此主義により、浮華を去り着實を尙び、専ら實用的人材の養成に努む、想ふに維新草創の際官尊民卑の風甚しく或は政治熱の最も高潮を極めたるの時に際し、豊岡出身の士が何れも斯る方面には比較的冷淡にして着實に身を處したる所以のもの、一は先輩の指導其宜しきに歸因せるものならんか。

高厚公は明治六年豊岡藩知事に任せられ、同三十年七月貴

族院議員に當選せられしが、同三十八年薨去せらるる則ち當主高義君之を襲ぐ。

▲當主高義君

子は明治七年十二月生る先代の歿後家督を襲ぎ、其後日向淺く社會的活動に至つては未だ見るべきものなしと雖も、而も郷國を念ふこと治下の往時に異らず、多年の歴史的關係を益々敦厚ならしめんが爲めに常に往來親睦に努め、恰も昨

年、李世子殿下が見學の爲めに城崎に成らせらるゝや、歡迎の爲め直に歸郷せられ、或は同地の郡役所、病院、又は學校裁判所等に何れも無償又は最廉の補償を以て敷地を貸與せられあるが如きは同町民の感謝措く能はざる處、幸ひ吾人の主張一にするものあるを悦ぶ。

樞密院顧問官

男爵 加藤 弘之君

文學博士



(明治四十三年十二月稿)

凡そ物には原因あれば結果がある、結果のある處必ず原因あらざるはない、一粒の粟と雖も偶然には生ぜず必ず播種の結果である、明治昭代の文運興隆して盛を世界に争ふに至りしもの、之れ社會の蒙を啓き、文明を鼓吹し、以て世の指導に任じたる先覺者の賜と謂はねばならぬ、而して其先覺者として我國文明の大恩人として最も國民の記憶して忘るべからざる人は、一は故福澤翁で、一は博士加藤弘之翁である、此兩者は實に明治文明の大恩人にして、明治の文明が如何に此

兩偉人に負ふ所大なるかを思ひ、而して又其一人が我兵庫縣下の出身者たるに想到せば、之を縣下の誇りとして縣史上特筆大書して、其傳記を散逸してはならぬ、編者は乃ち此一大偉人の聲咳に接して得る處は之を後見に傳へ、以て縣下に紀念せんが爲めに、一日麴町區上二番町の邸に訪問した。

▲男爵を訪問す

迎へられて應接室に通ると、先づ目に着くのは先年學士會